筑波大学博士（文学）学位請求論文

蘇詩及びその注解者の研究

王　連旺

二〇一七年度

目次

序章……1頁
第一節　蘇軾の作品集とその注釈書……1頁
第二節　本論の研究意義……5頁
第三節　本論の構成……7頁

前　篇……12頁

第一章　蘇詩注釈書としての『四河入海』……13頁
はじめに……13頁
第一節　題注……15頁
第二節　作品の構造分析……20頁
第三節　校勘……24頁
第四節　詩語や詩句の注釈……27頁
第五節　詩歌全体に対する総評……30頁
第六節　『四河入海』の注釈の特色……31頁
おわりに……35頁

第二章　市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考……43頁
はじめに……43頁
第一節　『米沢九一集注』の版本系統……45頁
第二節　先行研究……47頁
第三節　成書時期と蘇軾受容研究に対する意味……50頁
第四節　形態の著録と分析……55頁
第五節　『米沢九一集注』復元の試み……59頁
第六節　『米沢九一抄物』――月舟寿桂の『東坡詩幻雲抄』を中心にして――……63頁
おわりに……72頁
第三章　想像と真実――論「虔州八境図八首並引」――……78頁
はじめに……78頁
第一節　知事の誘い……80頁
第二節　画外における鑑賞と想像……84頁
第三節　傍観者から画中の人へ……96頁
おわりに……102頁

後篇……106頁
第四章　蘇詩趙次公注新考――宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書入れを中心に――……107頁
はじめに……107頁
第一節　趙次公注を引用した諸資料……109頁
第二節　蘇詩趙次公単注本の輯校方法と試み……126頁
第五章　趙次公「和蘇詩」輯考……143頁
はじめに……143頁
第一節　趙次公の文学作品……144頁
第二節　趙次公「和蘇詩」に関する先行研究……149頁
第三節　趙次公「和蘇詩」の創作時期・刊刻・流布……151頁
第四節　趙次公自注の価値……156頁
第五節　趙次公の創作動機……158頁
第六節　趙次公「和蘇詩」の類別・詩風……161頁
第七節　趙次公「和蘇詩」四十八首……169頁
おわりに……194頁

結……200頁
参考文献……205頁
初出一覧……213頁

序章

第一節　蘇軾の作品集とその注釈書

蘇軾（一〇三七～一一〇一）、字は子瞻、号は東坡居士。眉州眉山（今の四川省眉山市）の人。北宋の代表的文人である蘇軾は、詩歌・散文・詞など、数多くの文学作品を創作している。本論文は、主として日本中世の蘇詩抄物資料を考察することによって、中国と日本とにおける注解者を研究し、さらに中国・日本の注釈を広く参照しつつ、新たな研究方法を用いて蘇詩を研究するものである。

蘇軾の作品集は彼の存命中にすでに刊行されており、多くの読者に愛読された。南宋に入ると、所謂「百家注蘇」の風潮が起こり、蘇詩を好む多くの知識人たちが積極的に蘇詩に注を附けるようになり、『王状元集百家注分類東坡先生詩』という百人近くの注釈を集めた注釈書が編まれた。このような蘇詩に対する注釈作業は、元・明の時代においては下火となったが、清代再び活発に行われるようになり、現代に至るまで、膨大な注釈書が世に出ている。

現存の最も信頼できるテキストは『東坡七集』（南宋初期刊本）である。『東坡七集』は『東坡集』、『後集』、『奏議』、『内制』、『外制』、『和陶集』（明刊は『東坡続集』）、『応詔』で構成されており、蘇詩のほとんどが収録されている。これらには蘇軾の自注が若干収められているだけで、まだ他者の手が加わっていない。

蘇詩に注が附けられるのは、北宋から南宋にかけての李厚、程縯、宋援、趙次公など所謂「四家注」からである。また、南宋に至って、五家注本、八家注本、十家注本が現れたが、今はほとんど失われており、わずかに『集注東坡先生詩』前後集（五家注本と十家注本の残本が中国国家図書館に所蔵されている）の一部のみが残っている。(一)

南宋から清まで、最も流行した蘇詩の注釈本は、南宋の王十朋（一一一二～一一七一）の名を借りた、『王状元集百家注分類東坡先生詩』である。(二)この注釈書は詩歌の主題によって、蘇詩を七十八類に分けており、刊行されて以来、福建の書肆で争ってそれを刊刻し、覆刻するものもあれば、書名を変えるものもあり、同時期の同じ地域でも五、六種類の版本があった。宋末元初に至って、劉辰翁による批点本も刊行され、広く流行していた。これらのテキストは旧王本と言われている。日本に伝わったテキストもそうである。室町時代の禅僧たちの蘇詩講義録（『四河入海』など）はほとんど旧王本を用いている。明代になると、旧王本は万暦年間、散文家の茅坤の次男である茅維が、内容から体裁まで大きな修訂が加え、元々の二十五巻を三十二巻に、七十八類を三十類に改編し、また、『和陶詩』、『東坡続集』から原書未収の詩歌を増加したり、古い注釈を削除したり、注釈者の氏名を変更したりして、旧来の姿を失わせた。このテキストは新王本と呼ばれている。また、清の康熙三十七年（一六九八）、新安の朱従延は新王本に基づきつつも、「酬和」と「酬答」の二類を一類にし、二十九類、三十二巻として刊行した。このテキストが『四庫全書』に著録された。

また、旧王本とほぼ同時代に編纂された注釈書がもう一つある。南宋嘉定六年（一二一三）に淮東

倉司（泰州）で刊行された『注東坡先生詩』である。編者は施元之、顧禧、施宿である。この注釈書は蘇詩を作詩時期によって並べて、注釈を附けたものであり、施注また施顧注と言われる。陳振孫の『直斎書録解題』、馬端臨の『文献通考・経籍考』に著録されている。しかし、このテキストはあまり通行しなかった。清に至って、邵長蘅（一六三七～一七〇四）らが宋刊『施顧注蘇詩』残本三十巻に補注を付け加え、刊行することによって、初めて世に通行した。『四庫全書』に著録される『施注蘇詩』がそれである。邵長蘅の注釈は邵注と言われる。[三] また、清の査慎行（一六五〇～一六二七）は『施注蘇詩』をもとに、『蘇詩補注』五十巻を編集した。査慎行の注釈は査注と言われる。さらに、清の馮応榴（一七四一～一八〇〇）は新・旧王本の注、施注、邵注、査注及び馮応榴自らの注をあわせて、『蘇文忠詩合注』五十巻を編集した。この系統の注釈は合注と言われている。黄任軻・朱懐春点校の『蘇軾詩集合注』[四]、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳注の『蘇東坡全詩集』[五] 及び小川環樹・山本和義両氏の『蘇東坡詩集』一～四冊（巻一～巻十六）[六] は合注本系統のテキストを底本としている。

清の王文誥（一七六四～？）は合注本に大きな修訂を行い、『蘇文忠公詩編注集成』四十六巻を編集した。王氏は、蘇詩の創作年代の考証をした総案を各巻の冒頭に附している。孔凡礼点校の『蘇軾詩集』[七] は『蘇文忠公詩編注集成』を底本としている。なお、張志烈・馬徳富・周裕楷編の『蘇軾全集校注』[八] の詩集の部分は孔凡礼氏の『蘇軾詩集』を底本として、修訂を加えたものである。

日本に蘇軾の作品集がいつ伝わってきたのかは分からないが、[九] 室町時代から五山禅僧の間で広く読まれたことが、現存する抄物資料からわかる。蘭坡景茝（一四一七～一五〇一）は『増刊校正王

状元集注分類東坡先生詩』の書名について、

江西ハ三度東坡ヲ講ズルカ、トヲルトアルカ、王状元集百家注分類東坡先生詩ヲ一度ヨムゾ。瑞岩ハタビ〳〵ニナンドモヨムゾ。ソウシテハヨムベキゾ。総而詩ヲ講ズルコトハ唐土ニハナイゾ。朝ノ補アルコトゾ。方札ニシルスゾ。五経ヲ読（ム）ゾ。本ニスベクハ、題号カラヨムゾ。坡ガ家ニハ論語、易ガ本ゾ。論語ノ注ガ一部アルゾ。日本ニ詩ヲ講ズルコトハ、義堂ノ三体詩ヲヨムゾ。太白、柳文ヲ点スルゾ。坡ガ詩ヲ講ズルコトハ、惟肖ガ初ゾ。今日私ガ云（ワ）バ、瑞岩、九淵、江西バカリゾ。四書五経ノ点ハ吉備大臣カラハジムルゾ。(十)

と注しており、日本における経学書や詩に関する講読活動の歴史を遡り、特に蘇詩を講ずるのは惟肖徳巌（一三六〇～一四三七）がその嚆矢であることを指摘している。また瑞巌竜惺（一三八四～一四六〇）、九淵竜賝（？～一四九八）及び江西竜派（？～一四四六）など、数多くの臨済宗の禅僧たちは蘇詩を愛読したことも窺える。彼らは蘇詩を読むにあたって、中国・日本・朝鮮半島の各種のテキストを読み比べ、中国の古い注釈書を参照しつつ、書名から詩語に至るまで自らの説を事細かに述べている。これらの説が後に聴講者によって整理されて蘇詩抄物として禅林の間に広まった。現存する主要な蘇詩抄物資料は、大岳周崇『翰苑遺芳』、瑞渓周鳳『脞説』、万里集九『天下白』、桃源瑞仙『一韓聴書』の四書を収める『四河入海』、及び市立米沢図書館所蔵の大岳周崇、瑞巌竜惺、瑞渓周鳳、

蘭坡景茁、天隠竜沢、万里集九、河清祖瀏、月舟寿桂、馬、青など十人の禅僧の説を集めた抄物である。これらの蘇詩抄物には、五山の禅僧たちの説のみならず、中国ですでに散逸してしまった南宋初期の古い注釈が多く引用されているため、資料的価値が極めて高い。

第二節　本論の研究意義

中国・日本の蘇詩注釈資料において、特に重視されてきたのは蘇軾に最も近い時代の南宋の趙次公注と施顧注であった。二種の旧注はいずれも長く散逸していたが、施顧注については、清初の邵長蘅らが宋版施顧注残本三十巻をもとに欠如の部分を補って『施顧注蘇詩』として刊行し、後に『四庫全書』に収められたことで、改めて流布することとなった。その後、中国国家図書館、上海図書館及び台北「国家」図書館の宋版施顧注本の残本が発見されたため、現在では概ねその元の姿も見ることができる。しかし、趙次公の蘇詩単注本は早くに散逸してしまい、南宋初期に成立した『集注東坡先生詩』前後集、旧王本系統の注釈書にたびたび引用されているものの、その原初の姿を見ることは出来ない。一九六五年、小川環樹・倉田淳之助両氏は『蘇詩佚注』において旧王本に見えない趙次公注を輯佚したが、輯佚の対象は大岳周崇『翰苑遺芳』のみであり、まだ不充分である。

中国では元・明時代、蘇詩の注釈作業は下火となったが、東アジア諸国の間では漢字・漢詩・漢文などを通じて、政治・経済・文化といった諸分野で国際交流が広く行われ、東アジアの知識人の共有

の文学的素養として、蘇軾の作品集が日本・朝鮮においても刊行されていたことは注目すべきである。特に日本には、中国本土のテキストばかりでなく朝鮮銅活字版のテキストも伝来し、五山禅僧が今中国ですでに散逸してしまったといえる趙次公注・施顧注などの旧注を踏まえつつ、独自の見地から蘇詩講義を行い、さらに刊行事業も行っている。禅僧たちは、南宋における蘇軾を読む人々と時空を超えて切磋琢磨することで、中国人であれば問題にしないような箇所にまで説明を試み、蘇詩に対する理解を深めた。とりわけ、趙次公の注を多用し、それに基づいて語句を解釈し典故を消化して作品の構造に至るまで詳細な分析を加えていることは蘇詩の注解において重要な意義がある。また趙次公がさらに蘇軾の詩歌に唱和して数多くの「和蘇詩」を創作していることも五山の禅僧の抄物から知ることができるのである。これらの抄物資料は、中田祝夫氏をはじめとする言語学者によって影印、紹介され、日本語史研究資料として広く利用されてきた。しかし蘇軾文学それ自体の研究資料としては、わずかに小川環樹・山本和義両氏が『蘇東坡詩集』四巻（合注本全五十巻のうちの巻一～十六）において『四河入海』を参照しているのみである。中国では一九八〇年代から王水照氏、厳紹璗氏、王曉平氏らが『四河入海』を紹介したものの、今日に至っても未だ充分に蘇詩研究に生かされているとは言えない。本論文は中国本土の資料のみに限定せず、日本の蘇詩抄物資料を文献学的立場から考察することで、五山禅林において盛んに蘇詩を読む禅僧たちの姿を明らかにし、さらに、こうした抄物資料から趙次公の佚注、及び「和蘇詩」を輯佚して考察を加え、中国・日本の注釈者の注解を利用することで蘇軾の作品をより多角的に解読し得ることを示す。

第三節　本論の構成

本論文は、前篇・後篇の二部、全五章の構成である。蘇軾の作品集とその注釈書を概説したうえで、五山の禅僧たちによる蘇詩講読の流れ及びその文献学的価値を明らかにする。

前篇では、『四河入海』及び市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻を文献学的立場から考察することで、注釈の体例、文献価値を明らかにし、抄物の形成過程において日本と朝鮮半島との間でいかなる書籍の交流が存在したのかを考察する。また、従来注目されてこなかった禅僧たちの注解を含め、中国・日本の諸家の解釈を踏まえつつ、「虔州八境図八首並引」詩における創作態度の多様性について論ずる。

第一章「蘇詩注釈書としての『四河入海』」では、蘇詩抄物資料の集大成である『四河入海』を蘇詩注釈史の流れの中で捉え直すことで、その体例及び五山禅僧らの注釈の価値を提示する。五山の禅僧たちは蘇詩の諸テキストを比較しながら批判的に用いており、宋代の注釈者があまり用いていない様々な資料を参照し、詩歌ごとに題注・作品の構造分析をしたり、詩語や詩句の解説・校勘をしたり、詩歌全体に対して総評を附したりといった、詳細で多様な注解作業を行っていることを具体的に明らかにし、『翰苑遺芳』『脞説』『天下白』『一韓聴書』それぞれの特色と、それらの『四河入海』における役割とを明らかにする。

第二章「市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考」では、市立米沢図書館が所蔵する『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻の形態を分析し、成書の時期及び朝鮮銅活字本の成書の時期を究明する。また、そこに引用される月舟寿桂の東坡詩注を形態によって分類したうえで、その分布を確認し、月舟の注として限定し、さらに漢文で書かれた注と漢字仮名交じり文の注との関係を明らかにする。そして、豊臣秀吉の朝鮮出兵以前に朝鮮銅活字本のテキストが日本に伝来していたことを論証して、当該書の価値を示し、曹洞宗禅僧による蘇軾文学参与の意義を指摘する。

第三章「想像と真実――論「虔州八境図八首並引」――」では、創作論の視点から蘇軾「虔州八境図八首並引」詩における実景を見ずに作る想像的詩作と実景を見て作る体験的詩作について論じる。万里集九が「虔州八境図八首並引」について「ミヌ京モノガタリ（未見の物事を見たように記述する）」と指摘する通り、「虔州八境図八首並引」の創作には蘇軾の想像による描写が多く見られる。従来の蘇詩注釈書及び『四河入海』などの抄物資料を用いて、当該連作の全体構造に分析を加えると同時に、想像による詩作営為の方法を究明し、当該作と、蘇軾が虔州の地に実際に赴いて詠じた詩作とを比較することで、想像による詩作と実地による詩作との差異について考察を加える。

後篇では、趙次公の佚注と「和蘇詩」とを考察する。

第四章「蘇詩趙次公注新考――宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書き入れを中心に――」では、蘇詩趙次公注の輯佚に関する従来の研究を検討するために、趙次公注を収める（イ）『集注東坡先生詩』前後集、（ロ）諸種の旧王本、（ハ）『四河入海』、さらに従来取り上げられることのなかった（ニ）宮内庁

書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』の室町期の書入れを加えて考察し、蘇詩趙次公単注本の輯校方法を定める。そのうえで（ニ）を柱として、（イ）・（ロ）（ハ）を参照しつつ、類注本巻十三所収の「器用」類の十首の作品を例として、実際に輯校作業を試みる。

第五章「趙次公「和蘇詩」輯考」では、趙次公の「和蘇詩」四十八首を『四河入海』より輯佚し、その数量・創作時期・刊行と流伝について明らかにし、自注の価値を指摘し、次公の作品を分類してその特色を究明する。さらに輯佚した作品を『全宋詩』未収の新資料として翻刻する。

最後に、前篇・後篇で論じたことを要約し、抄物資料の蘇詩研究における価値を述べて結とする。

なお、引用文の字体の原則として、中国語・漢文は旧体字（明朝体フォント）に、日本語については常用漢字（明朝体フォント）に統一したが、後篇において整理した趙次公佚注・趙次公「和蘇詩」は繁体字（明朝体フォント）に統一した。

注

（一）詳しくは劉尚栄氏「宋刻集注本『東坡前集』考」（『蘇軾著作版本論叢』、巴蜀書社、一九八八年、四十～五十三頁）参照。

（二）劉尚栄氏「百家注分類東坡詩集考」（『蘇軾著作版本論叢』、五十四～八十六頁）、及び西野貞治氏「東坡詩王状元集注本について」（『人文研究』第十五巻第六号、一九六四年、六十一～八十七頁）は、旧王本について詳しく考察している。

（三）劉尚栄氏「宋刊施顧注蘇詩考」（『蘇軾著作版本論叢』、八十七～一〇二頁）によれば、邵氏らが『施注蘇詩』を刊行した際に、いたずらに削除したり、改竄することがあったため、テキストの元の姿を失わせた。現在、宋刊『注東坡先生詩』の残本は、中国国家図書館、上海図書館、及び台湾「国家」図書館に所蔵されている。それ　をあわせれば、全四十二巻のうち、巻一、二、五、六、八、九の六巻分が欠如しているが、概ね施顧注の元の姿を見ることはできる。

（四）黄任軻・朱懐春点校『蘇軾詩集合注』、上海古籍出版社、二〇〇一年。

（五）岩垂憲徳・釈清潭・久保天随『蘇東坡全詩集』、国民文庫刊行会、一九三〇年。

（六）小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』、筑摩書房、一九八三～一九九〇年。

（七）孔凡礼点校『蘇軾詩集』、中華書局、一九八二年。

（八）張志烈・馬徳富・周裕楷編『蘇軾全集校注』、河北人民出版社、二〇一〇年。

（九）蘇軾の作品は平安時代後期から鎌倉時代前期までの間にすでに日本にある程度流布していたと言われるが、

詩文集の伝播に関する記述がない。五山時代に入ると、宋元刊本が日本に広く伝わり、五山版の出版も行われ、さらに五山禅僧の注釈本などが現われた。詳しくは王水照氏「蘇軾文学初伝日本考」（「湘潭師範学院学報」一九九八年第二期）を参照されたい。

（十）市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』（米沢善本91）、第一冊5ウ。

前

篇

第一章　蘇詩注釈書としての『四河入海』

はじめに

室町時代というのは、漢学が盛んに行われた時代であった。この時期に数多くの蘇詩講義録が出てきた。たとえば、大岳周崇（一三四五～一四二三）の『翰苑遺芳』、厳中周噩（一三五九～一四二八）の『東坡詩抄』（散逸）、惟肖得厳（一三六〇～一四三七）の『東坡詩抄』（散逸）、江西竜派（？～一四四六）の『続翠』（散逸）（『天馬玉津抹』とも言う）、瑞渓周鳳（一三九一～一四七三）の『脞説』、万里集九（一四二八～一五〇七）の『天下白』、一韓智翊が師匠の桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）の講義を記録して編んだ『一韓聴書』（『一韓聞書』、『一韓翁聴書』、『蕉雨余滴』とも言う）などが挙げられる。これらの講義録は『四河入海』の成書の基礎を築いた。

『四河入海』[一]は天文三年（一五三四）、五山の笑雲清三によって編まれた蘇軾の詩歌に注釈を加えた抄物資料であり、その内容は『翰苑遺芳』・『脞説』・『天下白』・『一韓聴書』の四書を集め、さらに笑雲清三自家の説を加えたものである。『四河入海』については、中田祝夫氏が『四河入海』の「解説」[二]において、『四河入海』の書名の由来、『四河入海』の成立、底本との関係、先行注釈書、諸テキストとの異同、諸本の訓点とその意義、『四河入海』に関する諸学僧の略伝、『四河入海』関係年譜といった各方面にわたる記述を行っている。

『四河入海』のテキストに、中田氏による国立国会図書館所蔵の古木活字版（『抄物大系別刊・四河入海』全十二冊）に基づく訓点付きの影印本と、岡見正雄・大塚光信編集の訓点・書入れのない宮内庁書陵部所蔵の古木活字本のリプリント版（『抄物資料集成』全五巻[三]）がある。今では、国立国会図書館所蔵の古木活字版『四河入海』がデジタル化され、簡単に見られるようになっている。[四]

『四河入海』の本文、及び注釈には多くの訓点が付されており、室町時代の口語で解説した部分も多数あることから、従来の研究では、中世日本語研究において重要な資料として利用されてきたが、蘇詩注釈書としての『四河入海』の研究に関しては、まだ検討の余地がある。たとえば一九六五年、小川環樹・倉田淳之助両氏が南宋の趙次公注・施顧注を『翰苑遺芳』から輯佚しており、これは二十世紀の蘇詩研究史における重要な成果であろう。しかしながら、趙次公注は『翰苑遺芳』以外の三書にあっても残されており、『四河入海』の輯佚作業はまだ不完全なものである。小川環樹・山本和義の『蘇東坡詩集』[五]は、『四河入海』の注釈を多く参照しているが、それも合注本全五十巻のうち、十六巻までしか完成していない。なお、中国における『四河入海』に関する研究は一九八〇年代から始まったものの、未だ書誌的紹介の段階に止まっており、『四河入海』自体に関する研究があまり見られないのが現状である。[六]

『四河入海』には性質を異にする何種類もの注が附されており、日本人の注のみならず、中国の古い注解が頻繁に引用されている。五山禅僧たちの蘇詩講義は旧王本に基づいており、現存の旧王本諸本未収の趙次公注と施顧注を今に伝えている。[七]従って、日本で編まれた『四河入海』は、先行する中

国の旧王本と施顧注本[八]といった重要な蘇詩批評を継承している注釈書であることが認められよう。

冒頭に「増刊校正百家注東坡先生詩序」が引用されているため、『四河入海』は旧王本直系の劉辰翁（一二三一～一二九四）批点本・全二十五巻を底本としていることがわかる。しかし、元来一巻のみであったものを「巻X之一」から「巻X之四」のように一巻を四冊に分けており、全百冊にも達する膨大な蘇詩注釈書となっている。冊ごとの初出の注釈は、「翰苑遺芳云」「脞説云」「天下白云」「一韓聴書云」のように提示し、その後は、「芳云」「脞云」「白云」「一云」のように略称で提示して、また笑雲清三の注釈や案語は、「三云」、或いは「三私云」で提示して行間、或いは枠外に書き込まれる場合もある。その注釈を厳密にみてみると、五つの部分に分けられており、注釈の特色を見ることができる。以下、題注・作品の構造分析・詩語や詩句の解説・校勘・詩歌全体に対する総評について、各節において実例に即して考察を加えていきたい。

第一節　題注

題注は、詩歌の題目、或いは詩歌の創作時期、場所、人物などについての注釈で、作品の理解に非常に重要な役割を果たしている。宋人のなかで蘇詩に題注を詳しく付けたのは南宋の施宿であり、『四河入海』の題注はそれを継承しながら一層発展させている。また、詩歌に関する創作状況を知るうえでは詩人の年譜が必須であるが、施宿は『国史』[九]によって詳しい年譜を作成し、それを参照しつつ、

題注を付けている。五山禅僧は施顧注を重要な資料として扱っており、題注を付け加える場合に、年譜を重視する点では施宿と一致している。『四河入海』の題注には、施宿の『東坡先生年譜』、何掄の『三蘇年譜』、傅藻の『仙渓紀年録』の引用が頻繁に見られる。巻一の三の「十月二日初到恵州」の題注を見てみよう。

白云、『仙渓紀年録』云、紹聖元年甲戌、先生五十九、十月二日到恵州、與此題同。『施宿年譜』記十月不記日。何掄『三蘇年譜』云、十月三日到恵州、與王十朋題下注同。有兩説、故竝録之。（白云う、『仙渓紀年録』に云う、紹聖元年甲戌、先生五十九、十月二日に恵州に到り、此の題と同じくす。と。『施宿年譜』は十月を記すも日を記さず。何掄の『三蘇年譜』に云う、十月三日に恵州に到るは、王十朋の題下注と同じくす。両説有るが故に並に之を録す。）

一云、実ニ紹聖元年十月三日デアルゾ。(一〇)

このように『四河入海』の題注は、概ね三種類の年譜を用いており、『仙渓紀年録』の「十月二日」、『施宿年譜』の「記十月不記日」、『三蘇年譜』の「十月三日」といった異説を併記する。また、五山禅僧の見解もしばしば述べられている。先に引用した詩と同時期に創作された巻五の四の「遊博羅香積寺並引」の題注を見てみよう。

『翰苑遺芳』云、惠州作。（『翰苑遺芳』に云う、惠州の作なり。と。）

『天下白』云、紹聖元年甲戌十月二日到惠州、『三蘇年譜』作十月三日、恐傳寫誤歟。此詩紹聖三年丙子先生六十一、春之作也。（『天下白』に云う、紹聖元年甲戌十月二日に惠州に到り、『三蘇年譜』は十月三日と作るは、恐らく伝写の誤りなり。此の詩は紹聖三年丙子先生六十一、春の作なり。）[二]

万里集九は「十月二日初到惠州」の題注と同じように異説を並べ挙げ、さらに、異同の理由について「恐傳寫誤歟。此詩紹聖三年丙子先生六十一、春之作也」と自身の見解によって訂正を試みている。

なお、事項についての注釈を見てみると、人物に関する注釈として引用されるのは、十三経、正史のほか、『東都事略』・『言行録』・『続資治通鑑長編』・『宋元通鑑』などが多く見られる。地名、楼閣、史跡といった場所の注釈は、『翰墨全書』・『方輿勝覧』・『太平御覧』・『杭州図経』『咸淳臨安志』などによっており、中国の地理に対する関心が非常に高いことが窺える。

地理考証の具体的な例として「望湖亭」[三]を挙げて見てみよう。

八月渡長湖　八月　長湖を渡る

蕭條萬象疏　蕭條　万象疏なり

秋風片帆急　秋風　片帆急ぎ

暮靄一山孤　暮靄　一山孤なり
許國心猶在　国に許して心猶お在り
康時術已虚　時を康くす　術已に虚し
岷峨家萬里　岷峨の家　万里
投老得歸無　投老　帰るを得るや無や

蘇軾は多くの地域で活動したため、彼の詩に登場する望湖亭が一体どこを指すのかを明らかにするには考証が必要である。『四河入海』の重要な参考資料となる南宋期の注釈には、一切言及されていないため、五山禅僧たちはこの点を明らかにする試みを行った。まず、『一韓聴書』は「此望湖亭ハ在湖州道場山ト云（フ）ゾ」と注しているが、根拠は示されていない。『天下白』では、次のように注釈している。

續翠云、不知何處。雖杭州有望湖、望海之名、皆樓而非亭。『勝覧』等亦不載之。襄陽亦有望海亭、無望湖亭。焦雪、北禪亦不記何處（『続翠』に云う、何処なるかを知らず。と。杭州に望湖、望海の名有ると雖も、皆楼にして亭に非ず。『勝覧』等亦た之を載せず。襄陽に亦た望海亭有るも、望湖亭無し。蕉雪、北禅も亦た何処なるかを記さず。[一三]）

万里集九は江西竜派の『続翠』を引用するうえで、自らの見解を述べている。この注釈を見てみると、万里集九は「望湖亭」が杭州に位置するものと推測しているが、『方輿勝覧』などの地方志には記載されていないことを述べており、問題点を提示することに留まっている。ここに、万里の慎重な注釈姿勢を見ることができる。なお、望湖亭は南康の呉城山にある重湖であることが数百年後の清の査慎行によって明らかにされている。

『江西志』、南昌呉城驛、有呉城山、山有望湖亭。周煇『清波雑志』、紹興辛酉、煇隨侍之鄱陽、至南康。揚瀾左蠡失舟、老幼僅以身免。小泊沙際候易舟、信歩至山椒一寺、軒名重湖。梁間一木牌、乃蘇内翰留題。登榻觀之、即「八月渡重湖」云云。（『江西志』に、南昌の呉城駅に、呉城山有り、山に望湖亭有り。と。周煇の『清波雑志』に、紹興辛酉、煇 侍して随いて鄱陽に之かんとし、南康に至る。揚瀾左蠡 船を失い、老幼 僅かに身を以て免る。砂際に小泊して船を易うるを候ち、歩に信かせて山椒の一寺に至り、軒に重湖と名づく。梁間の一木牌、乃ち蘇内翰の留題なり。榻に登りて之を観、即ち「八月重湖を渡る」云々。と。）(一四)

査注に従えば、五山禅僧の考証は誤りであるが、「杭州に望湖、望海の名有るも、皆楼なり、亭に非ず」と述べており、異国にありながら、杭州にあるのは望湖楼、望海楼であり、望湖亭ではないことを明らかにしている点は、評価してもよいであろう。

第二節　作品の構造分析

中国における詩歌の注釈は、典拠や字句の解説を重んじており、作品全体を評価する場合には、批点、或いは詩話の形式を用いることが多い。しかし、『四河入海』に引用される趙次公の注釈においては、一部の作品で、内容によって段落を分ける形式を採用している。これは瑞渓周鳳が「刻楮子瑞渓脞説叙」において、「長篇分段蓋擬趙次公杜詩之解也（長篇分段は蓋し趙次公の杜詩の解に擬するなり）」と述べているように、五山禅僧らは趙次公の注釈のあり方を継承して、この形式を広く用いている。たとえば絶句の場合は、作品全体に対して分析を加え、律詩と古詩の場合は、詩歌の内容によって幾つかの段落に分けて説明を加える傾向が見られる。

「懐西湖寄晁美叔同年」[一五]詩を例として見てみよう。

〔第一段〕

西湖天下景　西湖は天下の景
游者無愚賢　遊者　愚賢と無く
淺深隨所得　浅深得る所に随う
誰能識其全　誰か能く其の全を識らん

〔第二段〕

嗟我本狂直　嗟　我れ本と狂直
早爲世所捐　早に世の捐つる所と為る
獨專山水樂　独り山水の楽しみを専らにす
付與寧非天　付与すること寧ろ天に非ざらんか
三百六十寺　三百六十の寺
幽尋遂窮年　幽尋して遂に歳を窮む
所至得其妙　至る所　其の妙を得るも
心知口難傳　心に知りて　口　伝え難し
至今清夜夢　今に至るまで清夜の夢
耳目餘芳鮮　耳目　芳鮮を余す

〔第三段〕

君持使者節　君は使者の節を持し
風采爍雲煙　風采　雲煙を爍さん
清流與碧巘　清流と碧巘と
安肯爲君妍　安くんぞ肯えて君が妍ならん
胡不屏騎從　胡ぞ騎從を屏けて

暫借僧榻眠　暫く僧榻を借りて眠らざる
讀我壁間詩　我が壁間の詩を読まば
清涼洗煩煎　清涼煩煎を洗わん
策杖無道路　杖を策きて道路無く
直造意所便　直ちに意の便とする所に造れ
應逢古漁父　応に古の漁父に逢うべし
葦間自延緣　葦間に自ら延緣す　延緣、集本・旧王本作寅緣。
問道若有得　道を問うて若し得る有らば
買魚勿論錢　魚を買いて銭を論ずる勿れ

この「懐西湖寄晁美叔同年」詩は、蘇軾が密州の任にあった時期の作品である。蘇軾は晁美叔とともに、嘉佑二年（一〇五七）に科挙の進士に及第しており、両者の交遊は親密なものであった。

万里集九は詩歌全体の構成について、「白云、三段、起句下四句一段、「嗟」下十句一段、「君」下十四句一段」と分析している。それに即して言えば、一段落目では、西湖の美しい風景を描写しており、二段落目では、杭州通判を勤めた時期に日々山水を楽しみ、今になってもその新鮮さを覚えていることをうたい、三段落目において、自分の生活方式を親友の晁美叔に薦め、山水趣味を強調しながらうたっていると思われる。

桃源瑞仙は、自身の想像として一段落目の西湖の風景について次のように述べている。なお、引用文のなかの括弧の文は原文が省略されているものであり、引用に当たっては読解の便を考えて文字を補っておいた。

『一韓聞書』云、西（湖天下景）　天下ノ景ニ杭州ノ西湖ホド面白処ハナイゾ。サル程ニ、愚ト無ク賢ト無ク遊バヌ者ハナイゾ。今、在京ノ者ニ清水寺エマイラヌモノナイ類ゾ。サル程ニ、イカナ者モ西湖ニ遊ゾ。其ノ境致ノ浅処ヲモ、深処ヲモ、各々、人々ノコノミミテ遊テ見テ、トルゾ。誰デマリ、境致ノ浅深トモニ、ズットヲ、全ク識ル人ハナイゾ。此詩ハ、坡密州ニ在リ杭州ノ事ヲ思テ寄スル詩ナレバ、カウ云ゾ。

桃源瑞仙は、無論杭州に訪れた経験はないが、清水寺と西湖とを類比しながら、西湖周辺の風景、さらには遊覧する人々の様子を想像している。しかも、この想像を単なる表層的な比較ではなく、両者の本質的な共通点として指摘している。即ち第一・二句の「西湖天下景、游者無愚賢」において、天下一の風景であっても、愚者も遊べば賢者も遊ぶことをうたい、また、「淺深隨所得、誰能識其全」とそれがどれほどすばらしいものかは見る者次第、すべてを知り尽くせる人はあり得ないとうたっているのに対して、杭州の西湖に広がる風景と日本の京都の清水寺を結び付けることで、日本の読み手に親近感を与えるような主体的な態度で解していたのである。

第三節　校勘

蘇軾の詩歌は彼の生きた時代にすでに文字の異同があった。南宋の邵博は『聞見後録』に次のように述べている。

蘇仲虎言、有以澄心紙求東坡書者。令仲虎取京師印本『東坡集』誦其中詩、即書之、至「邊城歲莫多風雪、強壓香醪與君別」、東坡閣筆怒目仲虎云、汝便道香醪。仲虎驚懼、久之、方覺印本誤以「春醪」爲「香醪」也。（蘇仲虎言う、澄心紙を以て東坡の書を求むる者有り。仲虎をして京師印本『東坡集』を取り其の中の詩を誦せしめれば、即ち之を書し、「辺城歲暮れて風雪多し、強いて香醪を圧して君と別る」に至れば、東坡筆を閣きて怒りて仲虎を目て云う、汝便ち香醪と道うか。仲虎驚懼す、之を久しくして、方に印本に誤りて「春醪」を以て「香醪」と為すを覚るなり。）[一六]

「邊城歲暮多風雪、強壓香醪與君別」は「送曾仲錫通判如京師」[一七]詩のなかの二句である。現在のテキストには「春醪」となっているが、当時は「香醪」となっているテキストもあったこともわかる。この記述からみれば、蘇軾の詩歌は彼が生きていた時期にすでに文字の異同があったと思われる。

従って、南宋の注釈者は蘇詩の校勘に苦心していた。たとえば、施顧注本は墨蹟や石刻資料を多く用いて、優れた校勘作業を加えている。[一八]

南宋の注釈者と同様に、五山禅僧も校勘を重視しており、『四河入海』は幅広い材料を用いて校勘を行っている。一次資料として宋刊『東坡集』[一九]・『東坡文集』[二〇]・『大全集』[二一]・『東坡別集』[二二]・『烏台詩案』[二三]などを用いていた以外、宋元版の注釈書も多く参照している。旧王本系統のテキストの場合、宋刊旧王本を「無批語本」[二四]・「無批語唐本」[二五]、宋元版の劉辰翁批点本を「増刊本」[二六]・「批語本」[二七]、日本五山版を「和本」[二八]・「日本本」[二九]・「日本版」[三〇]と略称している。宋刊施顧本を「施本」[三一]或いは「顧本」・「顧氏本」[三二]と呼ぶ。また、中国より伝わってきたテキストを「新度唐本」[三三]・「新渡増刊本」[三四]と称して引用している。

さらに、中国の注解者があまり校勘に採用しない地方志や詩話なども用いている。筆者の調査した限りでは、『叢林盛事』[三五]・『事文類聚』[三六]・『事文類聚続集』[三七]・『漁隠叢話』[三八]・『方輿勝覧』[三九]・『冷斎夜話』[四〇]・『詩学大成』[四一]・『東京夢華録』[四二]などが用いられている。

そして注目すべきは、校勘資料として旧王本に収められなかった趙次公の校勘を引用していることである。先に引用した「懐西湖寄晁美叔同年」詩第二十六句「葦間自寅緣」の「寅緣」を例として見てみよう。「寅緣」は、施本では「延緣」、集本・旧王本では「寅緣」と作っている。『天下白』は趙次公注を引用して二字の相違の発生と理由を述べている。

白云注、某謂此注、也曰「等字」。與『莊子』不同、祥見於「漁父篇」。「延縁」「寅縁」同意。故先生用之。次公注云、莊子作「延縁」、今先生作「寅縁」、應誤、云云。**文選ノ形読延縁ト、シリゾキ、カエッテ、**『莊子』同意。（白云う、注、某謂らく 此の注、また「等字」と曰う。『莊子』と同じからず、詳らかに「漁父篇」に見ゆ。「延縁」「寅縁」は意を同じくす。故に先生は之を用う。次公注に云う、『莊子』に「延縁」に作り、今先生は「寅縁」に作り、応に誤りなるべし、云々。文選ノ形読延縁ト、シリゾキ、カエッテ、『莊子』の意を同じくす。）

『天下白』に引用された趙次公注は旧王本に見られない趙次公佚注である。万里集九は「等字」の概念を以て趙次公の注釈を訂正したうえで、いわゆる文選読みを用いて、「寅縁」の意味を「退き、帰って」と解釈している。

また『四河入海』には、詩の本文に対する校勘だけでなく、注釈までも校勘を行う場合もよくある。「坐上復借韻送岢嵐軍通判葉朝奉」詩の第一句「雲間踏白看纏旗」の「踏白」の師民瞻注に対する校勘を例として見てみよう。まず、校勘の範囲は本文のみではなく、注釈にまで広げられている。たとえば、師民瞻の「踏白」の注釈を「軍中有白馬、**過**行師、以爲先驅」「軍中有白馬、**遇**行師、以爲先驅」それぞれ並べ挙げて、

和本竝増刊校正本又無批語本等皆作「過」字、新渡増刊本部必有作「遇」字、北禪已見之、故云

「遇」可也。（和本並びに増刊校正本又た無批語本等は皆な「過」字に作り、新渡増刊本の部に必ず「遇」字に作るもの有り、北禅已に之を見、故に「遇」可なりと云う。）(四三)

と四種類のテキストを比較して校勘作業を行っている。

第四節　詩語や詩句の注釈

次に、詩語、詩句の注釈における引書資料の傾向について検討を加えていく。詩句に対する訓詁や典故、或いは地名、建築物、人物の考証には、旧王本や施顧注本を参照する以外にも、『文選』・『唐文粹』といった総集類、『翰墨全書』・『事文類聚外集』・『詩学大成』・『古今源流至論』といった類書、『続資治通鑑長編』・『宋元通鑑』といった宋注には用いられていない史書、『容斎随筆』・『清波雑志』・『雲臥紀談』・『東京夢華録』といった宋人の筆記、『苕溪漁隠叢話』・『詩人玉屑』・『臨漢隠居詩話』・『石林詩話』・『西清詩話』といった詩話、『百川学海』といった叢書、『大全本草』といった医書、『釈氏資鑑』・『五灯会元』といった仏教内典、『荊楚歳時記』・『歳華記麗』・『建安茶記』といった風土に関する書籍、『広韻』・『方言』・『爾雅』といった字書などを幅広く引用している。『四河入海』所収の四書のうち、とりわけ『天下白』の引書はほかの三書と比べて比較的に量が多く、幅が広い。これは万里集九の序文においても述べられている。

芳・脞・翠之三部、廼坡集之日月星也。凡好學者而孰不借其餘光。故彌綸夏夷之間、今不悉録也。三大老、若有異説則舉「某謂」之二字以判矣。加之、史傳・小説・詩話・圖經・大梵之悉曇・扶桑之假名有益于本集而三大老不載者件件纂焉。（『（翰苑遺）芳』『脞（説）』『（続）翠』の三部は、廼ち坡集の日月星なり。凡そ学を好む者にして孰か其の余光を借らざる。故に彌(あまね)く夏夷の間に綸ぜらる、今悉くは録せず。三大老、若し異説有らば則ち「某謂えらく」の二字を挙げて以て判す。之に加うるに、史伝・小説・詩話・図経・大梵の悉曇・扶桑の仮名　本集に益有るも三大老載せざるものは件件纂むるなり。[四四]）

万里集九の序文を見れば、『四河入海』がこのように膨大な資料を用いていることがわかる。次に、「飲湖上初晴後雨」[四五]詩二首の其二を例として詩語と詩句の注釈を見てみよう。

水光瀲灩晴方好　水光　瀲灩として　晴れて方に好し
山色空濛雨亦奇　山色　空濛として　雨も亦奇なり
欲把西湖比西子　西湖を把って西子に比せんと欲すれば
淡妝濃抹總相宜　淡粧　濃抹　総べて相宜し

これは「西湖」をうたったもので、「西子湖」の名称は即ちこの詩に由来している。蘇軾はその後また三首の詩歌のなかでこの比喩を用いている。

西湖真西子　西湖は真の西子
煙樹點眉目　煙樹　眉目を点す

「次韻劉景文登介亭」（巻三十二）

祇有西湖似西子　祇西湖の西子に似たる有り
故應宛轉爲君容　故に応に宛転君が為に容づくるべし

「次前韻答馬忠玉」（巻三十三）

西湖雖小亦西子　西湖　小と雖も　亦た西子
縈流作態清而豐　縈流　態を作し　清にして豊

「再次韻德麟新開西湖」（巻三十五）

次に、「西子」を巡る諸テキストの注釈を見てみよう。まず、「飲湖上初晴後雨」詩における旧王本の趙次公注は、「先生詩又云「只有西湖似西子」（先生の詩に又言う、「只西湖の西子に似たる有り」）」とある。旧王本所引の趙次公注は「次前韻答馬忠玉」詩の用例を指摘するのみであり、新王本に至ってはこの趙次公注を省いている。しかし、『天下白』に引用される「飲湖上初晴後雨」詩に

対する趙次公注では、「次公注云、此先生新意新句也、「故應宛轉爲君容」、蓋自其今之語、爲故事也。（次公注に云う、此れ先生の新意新句なり、「故に応に宛転君が為に容づくるべし」、蓋し其の今の語に自りて、故事と為すなり。）」とある通り、『天下白』に引用される趙次公注はほかのテキストに見られない。従って、『天下白』に見える趙次公注は、諸注本よりも詳細であり、諸注本に引用されているものよりも、極めて資料的価値が高いと言える。

第五節　詩歌全体に対する総評

詩語や詩句の個別解釈は部分的な理解である。それに対して、作品全体を分析・評価するという方法も『四河入海』には見られる。その担い手は主に『一韓聴書』である。先に挙げた「飲湖上初晴後雨」詩の注釈の最後に付されている『一韓聴書』の総評を見てみよう。

「水光（瀲灩晴方好）」云ハ、西湖に遊トキ、始メハ晴テ、西湖ノ水光ガ瀲灩シタガ、ナニトモ、面白ガ、エイ。又、アソコニハ、雨ガフルガ、ヤラウ。山色ガ空濛トシタガ、ナヲ、面白ゾ。雨ガフライテハ、サテゾ。コノ二句ハ、影略互見セヨゾ。「欲（把西湖比西子）」、サル程ニ、此ノ西湖ヲバ、西子ニ可比ゾ。ナゼニト云ヘバ、西子ハ、天然美人ナレバ、淡粧濃抹ガ、西湖ト似タ程ニゾ。西子天然ノ美人ナレバ、淡粧ノウスケハイノ時モウツクシク、又、濃抹ノコイ粧ノ時

モウツクシイゾ。サル程ニ、西湖ノ面ノ、雨フルモ、晴モヨイガ如ナゾ。是ガ坡ガ新意ゾ。

『一韓聴書』の総評は諸家の注釈を踏まえつつ、わかりやすい言葉で一句ずつ説明し、詩歌全体の意味を解説したうえで、自身の判断を示している。また、異説がある場合には、『四河入海』に所収のほかの注釈の得失についても分析を加えている。特に、総評の最後に「是ガ坡ガ新意ゾ」と強調して、この作品の最も優れたところを説き出している。

第六節　『四河入海』の注釈の特色

中国の伝統的な詩歌解釈は、主に注釈・詩評・詩話・批点の四つの形態に分けられるが、『四河入海』はそれらを兼ねた性質を持ち、一種の総合的な注釈体例と言うことができる。

ただし、同一の作者によって書かれたものではなく、四種の注釈書を集めて編者の注釈や案語も付け加えたものである故に、それぞれ異なる特色も見られ、共通している点もある。たとえば、『天下白』、及び『一韓聴書』における引書資料はほかの二書に比べて引用量も多く、書物の種類の幅も広い点において異なっている。

一方、「長篇分段」などの点においては、四書の注釈書において一貫して見られる。瑞渓周鳳は「刻楮子瑞渓脞説叙」において次のように述べている。

長篇分段蓋擬趙次公杜詩之解也。題渉繫詞則摘首尾兩三字、而中間安止一字、蓋王伯大注韓集之例也。義有異論則先舉諸説而至末判其優劣、蓋顔師古注『漢書』之法也。至於未易決是耶非、則故諸説竝舉耳。若不可有異論、則惟一義而止矣。或存不善之説、則此亦善資也。或有予臆決、則標刻楮子也。件件觀者辨焉可也（長篇分段は蓋し趙次公の杜詩の解に擬える。題に繫詞に渉れば則ち首尾両三字を摘りて、中間に止だ一字を安（お）くは、蓋し王伯大の韓集に注するの例なり。義に異論有らば則ち先ず諸説を挙げて末に至りて其の優劣を判するは、蓋し顔師古の『漢書』に注するの法なり。未だ是なるか非なるかを決し易からざるに至れば、則ち故に諸説を並挙するのみ。若し異論有るべからざれば、則ち惟だ一義にして止むなり。或いは不善の説を存すれば、則ち此も亦た善資なり。或いは予の臆決有れば、則ち刻楮子と標するなり。件件観る者これを弁じて可なり。）(四六)

瑞渓周鳳の記述をみれば、中国の代表的な注釈の方法を真似ており、長い作品の場合に段落を分けてその大意を説明し、諸説を並べてその優劣を判断している。また、異説を併記すると同時に、独自の見解が先行注釈と紛れないように工夫もしているのであるが、これは『脞説』だけでなく、『天下白』や『一韓聴書』の注釈も概ね同様であり、五山禅僧の蘇詩注釈に共通した特色と言える。

中国の注釈と比べた場合、『四河入海』の注釈は、典拠の注釈の方法において異なる点がある。た

とえば中国の蘇詩注釈は概ね必要な部分だけ引用する傾向がある。それに対して『四河入海』の引用は全体引用の例が多く、史伝と仏教内典の場合は引用が非常に多い。たとえば、『四河入海』巻十一之三の「趙令晏崔白大図幅径三丈」詩の題注において、『脞説』は『漁隠叢話後集』巻二十六の『芸苑雌黄』の説の一部を引用しており、その次に『天下白』はもう一回引用してから、「『脞説』不引足『叢話』末、故竝記之」(四七)と述べ、『芸苑雌黄』における説の全体を引用している。また、巻二十三之四の「人日猟城南、会者十人、以身軽一鳥過槍急万人呼為韻、得鳥字」詩の第十五句「何似雷將軍」の注において、『天下白』は『新唐書・雷万春伝』を引用してから、「堯卿注不引足、故以本傳質之。（堯卿の注に引き足らざるに、故に本伝を以て之を質す。）」(四八)と述べている。これは、『四河入海』が講義録であり、啓蒙的な一面があることを示しているのかも知れない。

そのほかに、中国の注釈書にはあまり見られない『四河入海』に特有の注釈の方法として、図録を用いている方法や、蘇詩を和語で解説するという方法いわば蘇詩国字解(四九)と言えるものを多く用いていることも大きな特色と言える。

中国の動植物、或いは器物について、文字から情報を得るばかりでは、なかなか想像し難い。それ故に五山禅僧は図録や類比の方法で視覚にうったえているのである。五山禅僧の引用する資料、或いは彼ら自身が作成した図録は世系図・植物図・器物図・卦図・天文図・地理図の六種類に大別できる。また蘇詩に関わる人物が多いため、世系図があれば、人物関係も一目瞭然である。『四河入海』では、「范仲淹世系図」(五〇)・「宋朝世系図」(五一)・「王定国世系図」(五二)・「蘇氏世系図」(五三)・「程氏世系図」(五四)・

「禅僧系譜」[五五]・「東林系譜」[五六]・「雲門系譜」[五七]などが見られる。中国と日本とでは、風土の違いによって相違する植物が多くある。それを説明するために、五山禅僧は『大全本草』を多用しており、[五八]稀にその植物図を注釈に入れている。器物について、植物と同じように文字では説明し難いため、「古銅器図」[五九]・「織錦琁璣図」[六〇]などの引用が見える。天文や『易』の卦は、図録化して読むとわかりやすくなるため、その引用もよく見られる。天文図の例を挙げれば、「北斗七星之図」[六一]・「二十八星宿排十二宮図」[六二]などがあり、卦図について随所に見えている。[六三]また、地理図については、「堯制五服図」[六四]などが挙げられる。

蘇詩国字解は、わかりやすい和語で日本の事物を挙げて、中国の事物を解説する方法であり、既知の情報を以て未知の情報を伝える手段で、やや通俗的な嫌いがあるが、読み手にとってはわかりやすい方法と言えるだろう。蘇詩国字解の具体的な手段としては五点が挙げられる。

イ　諺語・俚語の多用
ロ　実物の日本化
ハ　人物の類比
ニ　連歌による異域文学の対話
ホ　抽象概念の通俗化

五つの手段はいずれも多く用いられる。ここでは、具体例を挙げることを省く。

また、朱・墨点は『四河入海』の重要な要素であり、意味の解釈や異説を併記するために用いられている。『四河入海』において、「此点可也」(六五)、「此点甚不可」(六六)などの評価や「墨点ハ『續翠』之義……朱点ハ北禅之義」(六七)などのような異説の併記がよく見られる。中田氏は「古活字版『四河入海』に記入されたる訓点について」において、「訓点の記入と、講抄の口語とが、分かち難い関係であり、講抄の口語は、いかに蘇詩を訓読するかを問題にしている場合が多いからである。朱・墨の訓点について注意しないと、講述抄説明が、一体何を述べているか理解できない結果となってくる。時には全く解意できないのである。そうした意味理解を全く無視して、四河入海の口語資料とするが如きは、学問の堕落というほかはない」(六八)と述べており、訓点の重要性を強調した。またさらに、「四河入海においては、朱・墨点の記入のないものは、未完成品であり、それでは、口語抄としても解義できない部分を到るところに生じる。誠に残念極まる。それのみでなく、そうした記入のない古活字版を引用することは、この方面の学問を誤らせる結果になる。朱・墨の記入のない本は、有害である。」と言語研究における訓点の重要性を繰り返し述べている。言語研究のみならず、蘇詩研究の領域でも『四河入海』を用いて蘇詩を研究する場合、朱・墨点付きのテキストは重要な意味を持つ。

おわりに

以上、蘇詩抄物資料の集大成である『四河入海』を蘇詩注釈史の流れのなかで捉え直すことで、実例に即しつつ、その体例及び五山禅僧注釈の独自の価値を提示した。

五山禅僧たちは蘇詩の諸テキストを網羅しながら批評的に用いており、宋代の注釈者があまり用いていない様々な資料を参照している。また詩歌ごとに題注・作品の構造分析・詩語や詩句の解説・校勘・詩歌全体に対して総評を附すといった、詳細で多様な批評スタイルを取っていることを具体的に明らかにし、『翰苑遺芳』・『脞説』・『天下白』・『一韓聴書』それぞれの特色と、それらの『四河入海』における役割を究明した。また、『四河入海』に引用される南宋の旧注は、中国ではすでに散逸したものが多くあるため、輯佚資料としての価値を指摘した。

注

（一）本稿では、『四河入海』や蘇詩を多く引用するため、その底本を示しておく。『四河入海』については、中田祝夫整理の国立国会図書館所蔵の古木活本のリプリント版（『抄物大系別刊・四河入海』、勉誠社、一九七〇～一九七二年）を用いる。蘇詩は孔凡礼点校の『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）とする。引用する際、また、そのほかのテキストについては、適宜当該箇所に示す。

（二）『四河入海』第十二冊、一〇七一～一一二五頁。

（三）岡見正雄・大塚光信編集『四河入海』（『抄物資料集成』、清文堂、一九七一年）当該書の凡例に「底本は宮内庁書陵部蔵本であるが、後世の補写と思える「巻一之一」及び脱葉と思える「巻十八之三」四二丁一葉は土井忠氏蔵本で補った」とある。

（四）http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609732?tocOpened=1（二〇一七年十二月二日）

（五）小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』、筑摩書房、第一冊、一九八三年、第二冊、一九八四年、第三冊、一九八六年、第四冊、一九九〇年。

（六）王水照氏は『蘇軾』（上海古籍出版社、一九八一年）の日本語版（山田侑平訳、日中出版、一九八六年）の「自序」及び「蘇軾作品初伝日本考」（『湘潭師範学院学報』（社会科学版）一九九八年〇二期に所収）において、厳紹璗・王曉平は『中国文学在日本』（花城出版社、一九九〇年、第九十二頁）において『四河入海』に言及している。中国で初めて『四河入海』を紹介した論文は池澤滋子氏の「『四河入海』―日本四僧的東坡詩注―」（『宋代文化研究』二〇〇〇年に所収）である。

（七）劉尚栄氏は「百家注分類東坡詩集考」（『蘇軾著作版本論叢』、巴蜀書社、一九八八年、五十四～八十六頁）において、類注本の変遷・注釈者・分類・評価・現存のテキストについて、詳しく考察されている。

（八）施顧注に関しては、劉尚栄氏「宋刊『施顧注蘇詩』考」を参照されたい。

（九）施宿は自ら著した『東坡先生年譜』の跋文において、「宿卽略採國史、譜先生之年而系其詩於下」と述べている。（鄭騫・厳一萍編『増補足本施顧注蘇詩』、台湾芸文印書館、一九八〇年、一〇七頁。）

（一〇）『四河入海』第一冊、四〇一頁。

（一一）『四河入海』第三冊、五三一頁。

（一二）『蘇軾詩集』巻三十八、二〇四九～二〇五〇頁。

（一三）焦雪は惟肖得厳の「東坡詩抄」を、北禅は瑞渓周鳳の『脞説』を指している。

（一四）右掲注（一二）。

（一五）『蘇軾詩集』巻十三、六四四～六四五頁。

（一六）『邵氏聞見後録』巻十九、中華書局、一九八三年。

（一七）『蘇軾詩集』巻三十七、二〇一一～二〇一二頁。

（一八）詳しくは浅見洋二氏の「校勘から生成論へ　：宋代の詩文集注釋、特に蘇黄詩注における眞蹟・石刻の活用をめぐって」（『東洋史研究』六十八（一）、二〇〇九年、三四～六九頁）を参照されたい。

（一九）『四河入海』では、「本集」或いは「集本」と呼ぶ。用例は第三冊、六二二頁、一〇二四頁、第九冊、六九九頁など、多数ある。

（二〇）『東坡文集』を以て詩集を校勘する例は、『四河入海』第二冊、八四五頁など、多く見られる。
（二一）『四河入海』第一冊、九九〇頁、第三冊、六二二頁など。
（二二）『四河入海』第一冊、五八七頁、五九七頁など。
（二三）『四河入海』第七冊、九五頁など。
（二四）『四河入海』第二冊、二七一頁など。
（二五）『四河入海』第六冊、八六一頁など。
（二六）『四河入海』第一冊、八〇五頁など。
（二七）『四河入海』第一冊、六二頁など。
（二八）『四河入海』第九冊、八三五頁、一〇四六頁など。
（二九）『四河入海』第七冊、一三〇頁、第八冊、三〇一頁、第九冊、八二頁など。
（三〇）『四河入海』第七冊、七一一頁など。
（三一）『四河入海』第四冊、九六六頁など。
（三二）『四河入海』第五冊、七七八頁、第十冊、一四六頁など。
（三三）『四河入海』第六冊、二二八頁など。
（三四）『四河入海』第十一冊、九頁。
（三五）『四河入海』第二冊、八九三頁。
（三六）『四河入海』第七冊、二一一頁。

（三七）『四河入海』第六冊、九八二頁。
（三八）『四河入海』第七冊、九五頁。
（三九）『四河入海』第一冊、四六四頁。
（四〇）『四河入海』第六冊、四八一頁。
（四一）『四河入海』第七冊、五八五頁。
（四二）『四河入海』第九冊、八六一頁。
（四三）『四河入海』第十一冊、九頁。
（四四）『四河入海』第一冊、六三頁。
（四五）『蘇軾詩集』巻九、四三〇頁。
（四六）『四河入海』第一冊、六一頁。
（四七）『四河入海』第六冊、二三五頁。
（四八）『四河入海』第十一冊、八四八頁。
（四九）『漢籍国字解全書』（早稲田大学編輯部、早稲田大学出版部、一九二六年、第四～五頁）第一巻の「緒言」に、「国字解」という形の沿革について、「今飜て國字解書濫觴如何と考ふるに、之を推理の上より見れば、我國に漢文の盛に研究せられ且假名文の盛に行はれたる平安時代に於て夙に其萌芽を発したるべき筈なれども、今之を文獻に徴するを得さるが故に鎌倉時代において尼將軍平政子が政務の參考の為に『貞觀政要』の假名文を書かせたるを以て其濫觴と看做さざるを得ず。降りて足利時代に至りては、此類の書、五山僧徒の間に盛に

行はれたりと見え、五山抄として傳へらるるものの少からざるが中に、蘇東坡の詩集を講述したる「四河入海」、『史記』を講述したる「史記抄」の如き大部の書籍すらあり。以て其盛況を推すべし。然れども其廣く行はれしは元和偃武以降にあるなり」と述べている。

（五〇）『四河入海』第一冊、六一一頁。
（五一）『四河入海』第五冊、七四二頁。
（五二）『四河入海』第五冊、八六三頁。
（五三）『四河入海』第二冊、六〇二頁、第九冊、一〇七七頁、第十冊、七七六頁、第十冊、八七八頁。
（五四）『四河入海』第十冊、八五七頁。
（五五）『四河入海』第三冊、九頁。
（五六）『四河入海』第三冊、四八二頁。
（五七）『四河入海』第三冊、四八六頁。
（五八）『四河入海』第七冊、五五六頁、第八冊、一〇四～一〇五など、多数ある。
（五九）『四河入海』第六冊、八一一頁。
（六〇）『四河入海』第十一冊、九六一頁。
（六一）『四河入海』第十一冊、二九六頁。
（六二）『四河入海』第十一冊、一〇八〇頁。
（六三）『四河入海』第二冊、四八〇～四八一頁、第四冊、一〇三七頁など。

（六四）『四河入海』第一冊、四一七頁。
（六五）『四河入海』第一冊、八五八頁など。
（六六）『四河入海』第四冊、二二三頁など。
（六七）『四河入海』第二冊、三七頁。
（六八）『四河入海』第十二冊、一一〇二頁。

第二章　市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考

はじめに

日本の中世五山禅僧は、杜甫、蘇軾、黄庭堅らの作品について講義を行い、抄或いは抄物と呼ばれる漢籍の作品の講義録を多く残している。特に蘇軾の詩歌に関する抄物が多く、蘇詩研究において重要な意義を有している。

市立米沢図書館には「米沢善本」と称される多くの特別貴重典籍が所蔵されている。そのなかに蘇詩研究の重要な資料である、(1)『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』十五冊（請求記号「米沢善本九〇」）、(2)『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残七巻、八冊（請求記号「米沢善本九一」）の二点が収蔵される。(1)は、元刊本で、以下請求記号に従って『米沢善本九〇』と略称する。また本書第一冊巻頭には朝鮮銅活字版「東坡紀年録」が配補される。これを『米沢九〇紀年録』と略称する。(2)は、朝鮮銅活字版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』を貼り込み、その空白部分に「抄」が記されるという特殊な型式で作られている。これを請求記号に従って、その全体を『米沢善本九一』と略称し、そのうち朝鮮銅活字版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』の部分を『米沢九一集注』、抄の部分を『米沢九一抄物』と略称する。本章で考察するのは(2)の『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』、即ち『米沢善本九一』である。この書は、巻十九が完全に、巻一と巻二十から二十四までの

各巻がそれぞれ半分ほど残存している。なお、元々『米沢善本九一』の一部である「東坡紀年録」一巻が『米沢善本九〇』の冒頭に補配されていることについて後述する。

『米沢善本九一』は、朝鮮銅活字版劉辰翁批点本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』を底本としており、底本の一張の四周の余白を切り捨て、匡郭内の部分を四等分にし（四半張、五行または四行）、それを和紙（三十六・五×二十六・二糎、表半丁の左下或いは裏半丁の右下に切られた底本のサイズにあわせて窓枠を作ったもの）に張り込み、和紙の空白部分に、芳、瑞、脞、蘭、天、白、頑、幻、馬、青といった十人ほどの禅僧の蘇詩に対する抄を類聚編纂しており、抄の種類は蘇詩抄物を集大成した『四河入海』よりも遥かに多い。

『米沢善本九一』の抄の部分と『四河入海』とをあわせて研究することは、中世禅林における蘇軾文学の受容の有り様をより明らかにするほか、『四河入海』および各種抄物の研究にとっても重要な資料価値を持っている。またこの書物は朝鮮銅活字版底本と日本抄物資料とが邂逅した稀有な例であり、中国本土以外の地域における蘇軾文学の伝播ルートと範囲、受容の主体と方式といった多方面にわたる課題に対して重要な価値を有している。

本章では、まず『米沢善本九一』の著録情報を検討し、次に『米沢九一集注』と『米沢九一抄物』の形態を記述したうえで、成書の時期を比定し、『米沢九一集注』の復元を試みる。あわせて蘇軾文学の伝播と受容における当該書物の意味についても論じる。また、『米沢九一抄物』に類聚編纂されている十種類の抄の量と配置を調査し、月舟寿桂の『東坡詩幻雲抄』を重点として考察したい。

第一節　『米沢九一集注』の版本系統

すでに述べたように、各種の蘇詩抄物は、そのほとんどが劉辰翁批点本『増刊校正王状元集百家注分類東坡先生詩』を底本として用いている。この類いのテキストについてすでに劉尚栄氏「百家注分類東坡詩集考」(一)および西野貞治氏「東坡詩王状元集注本について」(二)に詳しい論説がある。それを参考にしつつ、類注本の概要とその変遷を紹介しておく。

南宋中葉に、建安の書肆に王十朋の名を冠する『王状元集百家注分類東坡先生詩』全二十五巻という注釈書が現れた。蘇軾の詩歌を主題によって七十八門類に分類し、凡そ九十六人の注釈を集めて編纂を加えたものであり、旧王本、百家注本、或いは新王本を含めて類注本と呼ばれている。傅増湘によれば、類注本は、刊刻以来、「閩中書肆遂爭先鐫彫、或就原版以摹、或改標名以動聽、期於廣銷以射利、故同時同地有五、六刻之多（福建省の書肆では争ってそれを刊刻し、原版のまま覆刻するものもあれば、人の注意を引くために書名を変えるものもあったが、いずれも多く販売して利益を得ることを目的としていた。それ故、同時期の同じ地域でも五、六種類の版種があった）」(三)と言う。傅氏が述べるように、類注本は刊行された初期にすでに多くの版種が現れたが、それは版式或いは書名の異同だけで、体裁や内容はほぼ一致していると考えられる。しかし、後世において類注本は書名、内容および体裁にわたって大きく変わった。主には以下の四系統がある。

A、『王状元集百家注分類東坡先生詩』二十五巻、七十八（七十九）門類

南宋中葉の版本で、「王十朋龜齡纂集」と題している。この系統で現存する最も古いテキストは中国国家図書館所蔵の黄善夫家塾本である。ほかに、同じ系統のテキストとして、泉州市舶司本、建安万巻堂本および魏中卿家塾本がある。黄善夫家塾本は七十九門類に分けており、ほかは星河類（一首のみ）を月類に合併して七十八門類となっている。

B、『増刊校正王状元集注分類東坡詩』二十五巻、七十八門類

宋末元初に成立したもので、書名に「増刊校正」の四文字が加わり、さらに「王十朋龜齡纂集、東萊呂公祖謙分類、廬陵須溪劉辰翁批點」と掲げられるようになり、劉辰翁の批点を「増刊」し、宋人の旧注を若干「校正」し、詩歌の配置にも少し調整を加えている。

C、『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』二十五巻、七十八門類、無批語

元明の時期に南宋建安本（A本）を元にして題名を変更し、空白の箇所或いは旧注を削った箇所に「増刊校正」という独自の注釈を付け加えている。「王十朋纂集」としているが、「呂祖謙分類」が記されていない。

D、四庫本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』三十二巻、二十九門類

明代の万暦年間、散文家の茅坤の次男である茅維によって、類注本の内容から体裁までに及ぶ大きな修訂が行われた。茅維は元々の二十五巻を三十二巻に、七十八門類を三十門類に改め、また、『和陶詩』、『東坡続集』から原書未収の詩歌を増加したり、古い注釈を削除したり、注釈者の氏名を変更したりして、宋、元の類注本の本来の姿を失わせた。その後、清の康熙三十七年、新安の朱従延が

茅維のテキストを底本にして、類注本を刊行したとき、「酬和」と「酬答」の二類を一類にしている。これによって、類注本は二十九門類、三十二巻となった。序章でも述べた通り、これが即ち『四庫全書』に著録されたテキストである。

上記四種の類注本のなかで、最も広く伝わったのはB本である。このテキストは王十朋、呂祖謙、劉辰翁の名前の故に、元・明の時代において多く刊刻され、朝鮮や日本でも度々刊行されており、同時期の東アジア漢字文化圏における蘇詩の伝播と受容の共通のテキストと見なすことができる。さらに、中世日本において盛んに行われた五山禅僧の蘇詩講抄も多くB本を底本として用いている。本章で取り扱う『米沢九一集注』はこの系統のものである。

第二節　先行研究

一般的な抄物資料の形態は、テキストの余白或いは行間に書入れを記入し、本文に訓点・朱点・朱引などを施した覚書、禅僧の講義録を整理して抄写した古鈔本、『四河入海』のように数種の抄物を集めて編纂し、鈔本や古活字で印刷したものも抄物資料と称される。ところが、『米沢善本九一』はこれら従来の抄物資料と形態が異なり、底本と抄との融合性或いは一体性が形態上において弱い。なお、柳田征司氏は一九七七年に作った抄物資料を紹介する「書込み仮名抄一斑」には、『米沢善本九一』が著録されていないものの、二〇〇四年に新たに作った「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」に

収められている。[四]

『米沢善本九一』を著録した最も早い書目は嘉永二年（一八四九）頃成立の『興譲館書目』である。当該書目の集部四十二番に「東坡集　八冊」[五]と著録されるのは『米沢善本九一』であろう。次に、明治二十八～三十三年（一八九三～一九〇〇）頃成立の『興譲館蔵書目録』漢土部・別集類に「東坡詩集　八巻」[六]と著録されている。『興譲館書目』および『興譲館蔵書目録』は、書名と冊・巻数を記録する簡略な書目であり、巻数の存佚状況については言及されていない。明治四十一年成立の『興譲館旧蔵和漢書目録』[七]（『米沢善本の研究と解題』所収）の解題になると、次のように著録されている。

『増刊校正王狀元集注分類東坡先生詩』殘七卷、附「紀年録」一卷。宋蘇軾撰、宋王十朋集注、宋劉辰翁批點、「紀年録」宋傅藻撰、朝鮮活字印本、存卷一、第十九至二十四、八冊。[八]

この目録は、書名と冊・巻数のほか、新たな情報を追加しているものの、テキストの精査はなされていない。巻一、巻十九から二十四までの七巻が存していることを記述しているが、完全な状態で残っているのは実は巻十九のみであり、ほかの六巻はそれぞれ半分程度しか残っていないことについてはすでに指摘した。なお、「紀年録」も今の『米沢善本九一』には見えない。このように、『興譲館旧蔵和漢書目録』は『米沢九一集注』だけに解題を施しており、『米沢九一抄物』については一切記述していない。

『米沢善本の研究と解題』になると、『米沢九一抄物』の情報が補足される。

前に王十朋序、西蜀趙夔序あり。毎葉行十七字、注双行。原本五行ずつ、稀に四行に切りとって和紙の縦三十六・七糎、横二十五・一糎のものに隔葉に貼りつけ、漢文或は細字片仮名交じり文のいわゆる抄を細写した。その抄は瑞溪の『胜説』、万里の『天下白』、太岳の『翰苑遺芳』と瑞巌、天隠、蘭坡、河済、月舟などの説がある。惜しいことに巻第一と巻第十九より第二十四にいたる七巻を存するのみ。凡そ一一八七葉。毎冊に「米沢藏書」印あり。(九)

この解題は、「紀年録」を『興譲館旧蔵和漢書目録』から削除した点では、より正確になっていると言えよう。しかし、巻数については『興譲館旧蔵和漢書目録』の記述を踏襲している。『米沢九一抄物』に関する情報も不十分である。たとえば、抄の種類は解題が言及する八種に止まらない。ほかにも青、馬の二種の抄がある。「凡そ一一八七葉」は筆者の調査では一一九〇葉である。また、「横二十五・一糎」は筆者による調査では二十六・二糎である。倉田淳之助氏は「東坡抄と山谷抄」(一〇)においても『米沢九一抄物』について考察をしたが、巻数、丁数などについては同様の記述である。

このように、書誌著録において共通することは、『米沢善本九一』について、版式の一部のみを記述しているに過ぎず、『米沢九一抄物』についての記述については、なお補正すべき箇所がある。

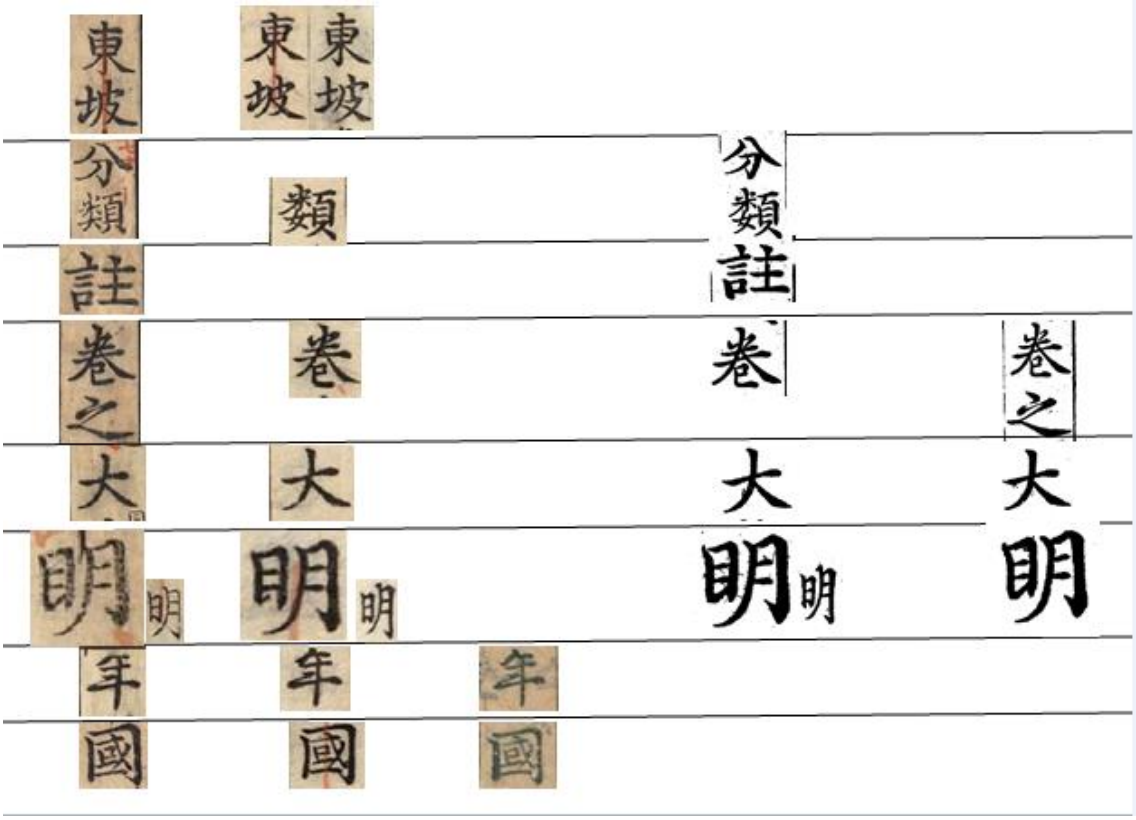
なお、『米沢藩興譲館書目集成』未収であるが、明治四十四年に、財団法人米沢図書館によって編

まれた『珍書目録』を見ると、集之部に『東坡詩集』に著録しており、「朝鮮活字本、毎行十七字、縦一尺二寸幅八寸七分の大本ナリ、毎紙原紙ヲ糊貼シ欄外ニ解釈ヲ細書ス、蓋シ五山僧徒ノ講座用ニ供シタルモノナリ、毎巻「米澤臧書」ノ朱印アリ」[一一]と説明している。また、『米沢善本九一』についても、『集注』と『抄物』の両方に言及しており、両者をあわせてこのテキストの形態を述べている。しかし、巻数については記述していない。また『米沢善本九〇』についての解題に、「活本東坡紀年録ヲ合綴ス」[一二]と指摘しているが、『米沢九〇紀年録』と『米沢善本九一』の関係については言及おらず、目録編纂者の慎重な態度が窺える。総じて言えば、従来の書目中では、『珍書目録』が最も重要な目録だと考えられる。

第三節　成書時期と蘇軾受容研究に対する意味

『興譲館旧蔵和漢書目録』ではすでに『米沢九一集注』は朝鮮銅活字本であることを指摘しているが、字様および成立については言及されていない。ここでは、『米沢九一集注』、『米沢九〇紀年録』と三種の初鋳甲寅字（一四三四年）テキストの字様と再鋳甲寅字（一五七三または一五八〇年）とを表(1)、表(2)で比較することによって字様の判定を行いたい。表(1)の三種の字様はそれぞれ字様(1)、『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻三第23a残葉[一三]初鋳甲寅字、字様(2)、『真西山読書記乙集上』「大学衍義」巻十五第一張[一四]初鋳甲寅字、字様(3)、『分類補註李太白詩』巻二十三第一張[一五]初鋳甲寅字である。

米沢善本 91	米沢 90 紀年録	字様（1）	字様（2）	字様（3）



表（1）

表(2)

・上段は、『米沢九一集注』巻一から選定した字様。

・下段は、『会纂宋岳鄂武穆王精忠録』から選定した再鋳甲寅字様。(韓国図書館学研究会『韓国古印刷史』、同朋舎、一九七八年、一五一頁。)

※たとえば、最も分かりやすいものとして「千」の字を取り上げて見ると、縦棒の上部に小さな白い空白が見えるが、再鋳字はこれがない。

後に述べるように、『米沢九一集注』は天正十三年（一五八五）以前に日本に伝来したものである。これ以前に鋳造された甲寅字は初鋳甲寅字と再鋳甲寅字の二種である。両者を比較した結果、『米沢九一集注』、『米沢九〇紀年録』の字様を初鋳甲寅字と判定した。こうなると、『米沢九一集注』と『米沢九〇紀年録』はいずれも一四三四年以降に印刷されたことがわかる。また、字様の墨色、魚尾などから見れば、初鋳甲寅字の初期印本と推測してよかろう。従って、『米沢九一集注』と『米沢九〇紀年録』は十五世紀四十年代前後に成立したものと推測される。

次に第七冊第十三丁オに記された次の墨識を手掛かりに『米沢九一抄物』の成立時期を考察する。

天正十三酉雲、月松鶴老衲、行年七十五歳、殘命不期明朝、形見之爲書之。不忽道者（花押）。

付與宗虎上座。（天正十三酉雲、月松鶴老衲、行年七十五歳、残命は明朝を期せざらんとして、形見の為に之を書す。不忽道者（花押）。宗虎上座に付与す。）

これによれば、『米沢九一抄物』は天正十三年(一五八五)八月に月松鶴によって書かれて宗虎に付与したものであることがわかる。『景勝公御年譜』巻十八慶長元年（一五九六）冬十一月条に、

林泉寺九世ノ住職月松宗鶴和尚示寂ス、時ニ八十五歳、和尚往昔公ニ於テ帰依ノ僧ナリ、説法ノ暇処々軍使ノ事ヲ務メシカハ、公ニモ常ナラス愁傷ノ御眉ヲ攢玉フ。(一六)

とある。禅僧の名の三字目は系字または通字・偏諱と言い、自称する場合によく省略する。地域や時間の面から見ても、月松宗鶴という曹洞宗林泉寺九世の住職は墨識にある月松鶴のことであろう。

一般に、外典文学の講読に参与したのは臨済宗の禅僧を主としており、曹洞宗禅僧の外典文学参与に関する江戸時代以前の文献資料は極めて少ない。[一七] この点から見ると、『米沢九一抄物』は曹洞宗禅僧の外典文学参与に関する初期文献としての価値を有していると考えられる。

以上の考証によって『米沢九一抄物』と『米沢九一集注』の成立時期から考えると、『米沢九一集注』の日本伝来の時期の上限を一四三四年、下限を一五八五年と推測してよかろう。日韓書籍流通に関して藤本幸夫氏は『日本現存朝鮮本研究』[一八]の「前言」において、「我が国には許多の朝鮮本が存在する。その経緯は複雑であるが、時期的には大きく分けて、（一）室町末以前の伝来本、（二）豊臣秀吉朝鮮侵略時の将来本、（三）江戸時代対馬宗藩を通じての伝来本、（四）明治以降の書肆・学者による購入本、と考え得るであろう」と伝来時期によって日本現存の朝鮮本を大きく四種類に分けている。また室町末以前伝来本について、「この時期の書籍で現在日本に多く伝わるのは、『大蔵経』である。（中略）仏典以外で存するのは例外的で、「太宰大貳」および「日本国王之印」の両印を鈐した『三綱行実図』や『駱賓王集』はその例外に属すと言えよう」と述べている。これによれば、室町末以前に日本に伝わってきた朝鮮の書籍は『大蔵経』といった仏教内典を主としており、『三綱行実図』や『駱賓王集』のような外典文献は少数例外であって、しかも『三綱行実図』と『駱賓王集』

は銅活字版ではないので、『米沢九一集注』は室町末以前に日本に伝来した外典の銅活字版文献として、日韓書籍流通史において重要な意味を持っていると思われる。

『米沢九一集注』の日本伝来年月は不明であるが、可能性として次に『朝鮮王朝実録・燕山君日記』七年（一五〇一）九月十七日条の記述を挙げておく。

日本国使臣弸中、智瞻等求『東坡詩集』・『碧巖録』・『黄山谷』等冊、命給之。『碧巖録』未知何冊、其問於弸中。（日本国の使臣弸中、智瞻ら『東坡詩集』・『碧巖録』・『黄山谷』等の冊を求め、命じて之を給わしむ。『碧巖録』未だ何の冊なるかを知らず、其れ弸中に問う。）(一九)

この記述によれば、一五〇一年に『東坡詩集』は朝鮮より確実に日本に伝わった。この『東坡詩集』が『米沢九一集注』であるかどうかは不明であるが、可能性としては十分に考えられる。

以上から、日本に伝来した蘇軾の作品集は直接中国本土から齎されたものばかりでなく、朝鮮経由で齎されたものもあり、禅僧は両者を使用したことが確認される。また十五世紀の日本における蘇軾文学伝播と受容は京都にある臨済宗の禅僧を中心として行われたが、本節の考証により、十六世紀後半に至ると越後（新潟県）の曹洞宗の禅僧が蘇詩抄物を整理するまでに至ったことが明らかになった。

第四節　形態の著録と分析

ここで改めて『米沢九一集注』・『米沢九一抄物』・『米沢善本九〇』の冒頭に補配されている「東坡紀年録」の三部よりなる『米沢善本九一』の詳しい形態を記述すると、以下のようである。なお、説明を要する箇所に【　】で番号を付けて、著録情報の後に置くこととする。

〈市立米沢図書館　米沢善本九一〉

『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』〔二十五巻、附紀年録一巻（『米沢善本九〇』首に配補）〕

【一】　存巻一（闕後半）、十九（全）、二十（闕後半）、二十一（闕前半）、二十二（闕後半）、二十三（闕前半）、二十四（闕前半）。八冊。

後補焦茶色雷文繋唐草文艶出表紙（三十六・五×二十六・二糎）、左肩後補題簽に本文別筆にて「東坡詩集　冊数」と墨書す。右肩(第一冊のみ)に米沢善本蔵書票を貼付し「91」と書す。改装【二】、袋綴、五針眼綴じ。本文楮紙。前後見返し。

『米沢九一集注』、宋蘇軾著、宋王十朋集注、宋劉辰翁批点、宋傅藻撰「紀年録」、朝鮮銅活版、初鋳甲寅字【三】。首四半張は第一冊十丁オ左下に貼付し、首行に「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩巻之一」（大字）と題し、次行は「宋禮部尚書端明殿學士兼侍讀学士贈太師謚文忠蘇軾」（低三格、中字）と著者名を、三行は「廬陵須溪（小字）劉（大字）辰翁（小字）批點（大字）」（低八格）と批点者名を記す、以下本文。半張五行或いは四行、一張は五行＋五行、または五行＋四行の形である。

行十七字、小字双行、批点有り。匡郭二五・〇×八・五（五行）／七・三糎（四行）。大黒口、三魚尾、版心上下二段、上段題坡詩及巻数、下段題張数【四】。自注、注釈者名、批などの提示語は陰刻である。第一冊、本文および空白箇所・行間に朱点・朱引や墨筆による返り点、送り仮名、音合符（中線）、訓合符（左側線）、傍注・傍訓、批注などがある。また、同一の漢字（語彙）に複数の訓み方がある場合、朱・墨にて両側に傍訓を併存する【五】。第二冊以降、ほぼ朱筆のみである。

『米沢九一抄物』巻首に「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩巻之一」と題し、巻十九、二十、二十二の首行に「東坡巻之幾」と略題を記す。半丁十七行、行四十字前後、同筆行楷書体。上下に横線を引く。上下余白縦一～二糎。被解釈語を朱筆方形で囲み、注釈者或いは注釈書の代表の一文字（朱或いは墨）を挙げ、朱筆または墨筆で囲む【六】。

跋文・刊記無し。墨識①第一冊第三十三丁オ「三条院蔵人」、②第七冊第十三丁オ「天正十三酉雲月松鶴老衲行年七十五歳／残命不期明朝形見之為書之／不忽道者（花押）／付与宗虎上座」。毎冊首に長形陽刻「米澤蔵書」朱印記を存す。

各冊丁数、第一冊、一六五丁。第二冊、一七六丁。第三冊、一七二丁。第四冊、一五六丁。第五冊、一二一丁。第六冊、一五四丁。第七冊、一三五丁。第八冊、一一一丁。計一一九〇丁。

【一】劉辰翁批点本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』は全二十五巻である。すでに述べたように、「紀年録」一巻が同館所蔵の『米沢善本九〇』の冒頭に配補されていた。このように判断する理由は、「米沢九一集注」と「米沢九〇紀年録」の料紙、版式、字様などの諸方面から比較した結果、

両者が同一テキストであることはわかるということになる。

【二】『米沢善本九一』の装釘を改装と考える理由は以下の通りである。第三冊第一丁オ左肩に本文同筆にて「東坡先生詩十九之中」とあることから、元々巻十九を上、中、下の三冊に分けた形であり、後に三冊を二冊に改装したと推測できる。また、第三冊一七二丁は落丁であり、当該丁の書脳部下方（綴じ目で見えないところ）に「ろ七十七、ろ六十六（二重線）」とあり、先に二重線で「ろ六十六」を消して、その上方にまた「ろ七十七」と改めた。「ろ」が何を意味しているかは不明であるが、数字を丁数と理解して間違いないであろう。この「七十七」という丁数は改装後の第一七二丁と一致していないことからも、巻十九が改装された証拠になる。ほかの巻の場合は、題箋の字様と本文の字様と別筆であることから改装の可能性が大きいと判断する。

【三】字様については、本章第三節において判定を行った。

【四】匡郭・版心は改装時に書き添えたものであり、墨で匡郭を書き添えて貼り目を隠す意図が窺える。

【五】多くの場合は、両側とも墨筆で異訓を併存するが、右側は墨筆、左側は朱筆を以て記す場合もある。

【六】『米沢九一抄物』には、芳（大岳周崇、一三四五～一四二三、『翰苑遺**芳**』、墨名朱囲）、瑞（**瑞**巖竜惺、一三八四～一四六〇、朱名墨囲）、脞（瑞渓周鳳、一三九二～一四七三、『**脞**説』、墨名朱囲）、蘭（**蘭**坡景茝、一四一七～一五〇一、墨名墨囲、少量墨名朱囲）、天（**天**隠竜澤、一四

二二～一五〇〇、墨名墨囲、少量墨名朱囲）、白（万里集九、一四二八～？、『天下白』、墨名朱囲）、頑（河清祖瀏、一四六〇？～？、「豩雲集」、墨名墨囲、少量墨名朱囲）、幻（月舟寿桂、一四七〇～一五三三、別号幻雲、墨名墨囲、墨名朱囲）、馬（調査を要する、朱名墨囲）、青（調査を要する、墨名墨囲）、題（南宋の施宿が蘇詩に付けた題注、墨名朱囲）および「〇」で示すものなど、凡そ十種の抄が含まれている。

第五節　『米沢九一集注』復元の試み

前述のように、『米沢九一集注』は一部だけが存しており、また切られて和紙に張り込んで元々の様態を失っている。従って、これを復元するには（一）版本の復元、（二）内容の残佚整理の二つの面から行う必要がある。

そこでまず、『米沢九一集注』と同系統と思われる以下二種のテキストとを比較することによって、版本の復元を試みる。

比較（一）、『米沢九一集注』巻一の1a1・1a2と日本国立国会図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』[一〇]巻一の1aとを比較することによって、二種のテキストが同じ系統のものと判断した。

比較（二）、国立国会図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻三の26aと同館所蔵の『東国古活字譜』第一張（『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』巻三の26a残葉）[一一]とを比較することによ

って、二種のテキストが同じ系統のものと判断した。（一）（二）の結果により、『米沢九一集注』と国立国会図書館所蔵の二種のテキストとが同じ系統のものに属していると判断した。

右、『米沢善本九一』　左、国立国会図書館本

右、『東国古活字譜』　左、国立国会図書館本

以下、三種のテキストを参照しつつ、『米沢九一集注』の版本の形態を復元する。

原表紙色不詳（二十八・三×二十一・七糎）、題箋はないか。五針眼綴法か。第一冊「増刊校正百家註東坡先生詩序」四張（1～2a王十朋序、2a～4b趙夔序）、「増刊校正王状元集註分類東坡先生詩姓氏」五張、「増刊校正王状元集百家註分類東坡先生詩目録」七十張、「東坡紀年録」二十七張。

半葉九～十行、行十七字、小字双行。四周単辺、有界、批点有り。匡郭二十五・〇×一七・〇糎。双魚尾、白口、版心上方題「坡詩幾」、下方題張数。

各巻張数および存佚状況：

「増刊校正百家注東坡先生詩序」4張、底本闕4張。

「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩姓氏」5張、底本闕5張。

「増刊校正王状元集百家注分類東坡先生詩目録」70張、底本闕70張。

「東坡紀年録」27張、底本存27張（『米沢善本九〇』第一冊首に配補）

巻之一　50張、底本存1～21張、22a、紀行詩92首、存「奉詔減囚禁記所経歴」　至「発広州」50首、闕「初到恵州」至「過海得子由書」42首。

巻之二　38張以上、底本全闕。述懐6首、詠史8首、懐古2首、古跡37首、時事2首。

巻之三　48張、底本全闕。宮殿17首、省宇8首、陵廟3首、墳塋3首、居室14首、堂宇41首。

巻之四　51張、底本全闕。城郭2首、壁塢2首、田圃8首、宗族5首、婦女11首、仙道16首、釈老上

40首。

巻之五　47張、底本全闕。釈老下16首、寺観59首。

巻之六　38張、底本全闕。塔4首、節序43首、夢10首、月星河附17首。

巻之七　59張、底本全闕。雨雪46首、風雷8首、山岳36首。

巻之八　50張、底本全闕。江河10首、湖26首、泉石31首、渓潭10首。

巻之九　44張、底本全闕。池沼3首、船揖2首、橋梁3首、楼閣27首、亭榭45首。

巻之十　46張、底本全闕。園林55首、果実9首、燕飲上27首。

巻之十一　50張、底本全闕。燕飲下17首、試選8首、書画63首。

巻之十二　46張以上、底本全闕。書画下51首、筆墨9首、硯8首、音楽11首。

巻之十三　46張、底本全闕。器用10首、灯燭3首、食物5首、酒12首、茶12首、魚6首、竹3首、木11首。

巻之十四　36張以上、底本全闕。花79首、菜5首、菌蕈1首。

巻之十五　38張、底本全闕。投贈27首、戯贈32首。

巻之十六　48張以上、底本全闕。簡寄59首、懐旧上21首。

巻之十七　54張、底本全闕。懐旧下13首、尋訪17首、酬答上59首。

巻之十八　61張以上、底本全闕。酬答中91首。

巻之十九　83張、底本存83張。酬答143首。

巻之二十　46張、存1至30張。恵貺35首、送別上39首。底本存恵貺35首、送別上「送曾子固倅越得燕字」至「送張職方吉甫赴閩曹」16首、闕「送張軒民寺丞赴省試」至「送李公恕赴闕」23首。

巻之二十一　53張、底本存26至53張。送別中75首。底本闕「送鄭戸曹」至「送表弟程六知楚州」41首、存「送王伯敭守虢」至「送子由使契丹」34首。

巻之二十二　52張、底本存1至32張。送別下56首、留別14首、慶賀15首。底本存送別下「送苛嵐軍通判葉朝奉」至「送仲素寺丞致政帰潜山」51首。

巻之二十三　52張、底本存25至52張。遊賞56首、射猟5首、題咏上32首。底本存遊賞「上巳日出遊随見作句」至「柳子玉以詩邀遊金山」19首、射猟5首、題咏上32首。

巻之二十四　63張、底本存38至63張。題咏下42首、医薬3首、卜相2首、傷悼49首、絶句21首、歌10首、行3首。底本存傷悼「王鄭州挽詩」至「弔徐徳占」13首、絶句21首、歌10首、行3首。

巻之二十五　38張以上、底本全闕。雑賦94首。

第六節　『米沢九一抄物』――月舟寿桂の『東坡詩幻雲抄』を中心にして――

本節は『米沢九一抄物』に集められている十種の抄の量と配置を調査し、そのなかの月舟寿桂『東坡詩幻雲抄』を中心に考察するものである。

幻は月舟寿桂の東坡詩に対する解釈を纏めたものであることがすでに倉田淳之助氏に指摘されて

いる。[一二]しかし、根拠が示されていない。本論文では『史記幻雲抄』、『山谷詩幻雲抄』などの書名を倣って、幻の注釈を『東坡詩幻雲抄』と呼び、『米沢善本九一』における『東坡詩幻雲抄』の量と配置を明らかにすることで、倉田氏の説を補正し、あわせてその注釈の体例について略説する。倉田氏は「東坡抄と山谷抄」[一三]において、

以上の八家（芳、脞、白、幻、瑞、天、蘭、頑）はどういうふうに記載されているかというと、一定の順序がない。『文選』六臣注のように定った順序がない。通覧すると脞白幻芳をまとめとして最初に書き、瑞蘭天頑幻が一まとめとして続いて書かれたようである。というのは前の一群が一応頁の終まで解釈してあるのに、後の一群が再び頁の初に遡って居る。また前の一群中の幻と後の一群の幻があり、さらに幻のなかには幻江のように小さい江字が書き添えられていて全然別物ではないかとの疑念が湧く。しかしそのなかには意味の同じものがあるから、同じ幻雲の説で、別の人の記録か、別の時の講釈であるのであろう。

と、『米沢善本九一』における八家の配置について記述し、幻の種類と配置を特に強調している。

倉田氏の記述は基本的に合っているが、簡略に過ぎて、各巻がすべてこのように配置されると錯覚しかねない。本論では、『米沢善本九一』所収の三種類の幻、即ち「幻（墨名朱囲）江」、「幻（墨名朱囲）」、「幻（墨名墨囲）」をそれぞれ上から幻甲、幻乙、幻丙と略称する。以下、『米沢善本九一』所収の

十種の抄の数量と配置を概観し、幻の量と配置を具体的に見てみたい。

第一冊、巻一紀行詩九十二首のうち、「奉詔減囚禁記所経歴」から「発広州」までの五十首には、芳一七九条、脞一九七条、白三〇七条、**幻甲一一一条**、**幻乙二三七条**、**幻丙六五九条**、瑞三三六条、天五十九条、蘭二二八条、頑三〇一条が収められている。そのうち、芳、脞、白、幻甲、幻乙は第一注釈群として各家の順番が定まらず、題注（作詩の時期、場所、関係人物などに関する解釈）、分段および詩語解釈の役割を持ち、表記は主に漢文である。そして瑞、天、蘭、頑、幻丙は第二注釈群として第一注釈群の後に配置され、表記は主に漢字仮名交じり文であり、内容は字、語、句の解釈および分段の分析である。

第二冊と第三冊は巻十九の酬答詩一四三首を収めている。この巻の第一注釈群に芳五一七条、脞四九七条、白七四七条、**幻甲一二六条**があり、第二注釈群に瑞八〇五条、天九〇八条、馬七四二条、**幻丙一七五条**（第三冊第九十八～一七二丁に分布）、青九十五条（第三冊第五十七～九十七丁に分布）がある。

第四冊は巻二十の恵貺三十五首、送別上三十九首のうち、恵貺三十五首、送別上「送曾子固倅越得燕字」から「送張職方吉甫赴閩曹」までの十六首を収めている。第一注釈群に芳二九七条、脞二一〇条、白二七八条、**幻甲七条**があり、第二注釈群に瑞二八七条、天四八二条、馬二五一条、青四〇三条がある。

第五冊は巻二十一の「送王伯敭守虢」から「送子由使契丹」までの三十四首を収めている。第一注

釈群に芳一九一条、脞一七六条、白二一一条、**幻甲十五条、幻乙二条**がある。第二注釈群に瑞二二二条、天一四七条、馬二六二条、青一三〇条がある。

第六冊は巻二十二の「送苛嵐軍通判葉朝奉」至「送仲素寺丞致政帰潜山」の五十一首を収めている。第一注釈群に芳二二四条、脞一九六条、白二六九条、**幻甲九条、幻乙五条**がある。第二注釈群に瑞三〇九条、天三六六条、馬二五八条がある。

第七冊は巻二十三の遊賞「上巳日出遊随見作句」から「柳子玉以詩邀遊金山」までの十九首、射猟五首、題咏上三十二首を収めている。第一注釈群に芳二〇二条、脞一八六条、白二一三条、**幻甲二十一条、幻乙二十九条**がある。第二注釈群に瑞二六八条、天三九七条、馬二七一条、青三七八条がある。

第八冊は巻二十四の傷悼「王鄭州挽詩」から「弔徐徳占」までの十三首、絶句二十一首、歌十首、行三首を収めている。第一注釈群に芳一九六条、脞一一七条、白二五一条、**幻甲十三条、幻乙八条**がある。第二注釈群に瑞二二一条、天四〇三条、馬二五八条がある。

以上を見れば、各巻における抄の配置の特色は次のようになる。第一注釈群では、芳、脞、白は各巻いずれにも見られる。幻甲は特に巻一、十九に見られ、他の巻でも引用は散見するが、その数は少ない。幻乙は巻一に多く見られ、巻二十一、二十四に若干見られる。第二注釈群では、蘭、頑の二家は巻一のみに見ることができ、馬は巻十九の前半、青は巻十九の後半から見ることができるが、断続的である。幻丙はとりわけ巻一に集中し、巻十九にも多く見られるが、ほかの巻には極めて少ない。

月舟寿桂は、室町時代後期・戦国時代前期の臨済宗の僧侶であり、諱は寿桂、字は月舟、号は幻雲・

中孚道人。『新纂禅籍目録』[二四]によれば、月舟は漢詩文を多く残し、天隠竜沢が編んだ漢詩集『錦繍段』について解釈を施した。また常庵竜崇(一四六九～一五三六)が講じた黄庭堅の詩歌を記述して『黄氏口義』を編み、さらに『史記抄』と『三体詩抄』を著した。しかし、『新纂禅籍目録』には東坡詩に対する月舟の抄は著録されていない。また、大日本史料総合データベース（東京大学史料編纂所）で検索すると、月舟は永正六年（一五〇九）四月七日に後柏原天皇（一五〇〇～一五二六在位）に召されて、杜甫の詩歌を講じ、さらに享禄元年（一五二八）十月二十三日、十一月二十三日および享禄三年（一五三〇）九月二十五日、十月六日に、禁裏において後奈良天皇（一五二六～一五五七在位）に杜甫の詩歌や三体詩を講じた記録が見られるが、蘇詩を講じた記述はない。[二五]しかし、月舟寿桂の談録である『月影集』に次のような記述がある。

方輿勝覧ハ、南方ハカリ委クシテ、北方ヲハエセヌ者ソ。故ニ蘇黄ヲ講スルハ、翰墨金[全]書ノ方輿ヲ以テ講スル也。翰墨金[全]書ノハ、如形北方ヲスル也。今ノ一統志ハ、蘇黄ヲ講スルニ重宝ノ書ヲ[ソ]。南北トモニ委スル也。[二六]

月舟は蘇軾と黄庭堅の詩歌を講じる際、『方輿勝覧』を地理考証の参考書として用いると、南方の地理のみ調べることができ、北方の地理を理解することができないので、南北の地理を調べるには『翰墨全書』『大明一統志』を使うべきだと述べている。これによれば、月舟は確実に蘇軾の詩歌を講じた

と言えよう。

月舟の注の形態については、坪井美樹氏は『三体詩幻雲抄』の「解説」において、「（月舟寿桂は）希世霊彦（一四〇三～一四八八）の言を引くに際しては『村庵云……』の一般的な引用形式の外に『……ト村庵ハヲセラルルソ』『……ト村モヲセラルルソ』『……ト村庵ハ読ム也』という形式も多く、『村本ハ老師ノ三体詩也』ともあり、希世霊彦に親しく教わった者の口吻が随所に読みとれる。」[二七]と指摘しているが、『米沢善本九一抄物』に引用される幻の注釈にも「村云……」「村……」「希世……」[二八]などが見え、坪井氏の指摘する『三体詩幻雲抄』の引用の特徴と符合している。

さらに、『米沢善本九一』の書名（『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』）の「校正」について、次のような解説がある。

（幻丙）増刊ト云（フ）ハ注カ多ソ。誰人カ校正スルソ。未知也。一義、王状元カ**趙堯卿カ注ソ**（傍注、**頑雲、此義非乎**）。校正スルソ。不知ソ。此義可也。三体詩モ古本ト新本トヲ二ヲ一ニ合スル者ヲハ、不知ソ。史記モ索隠ト正義ト二ヲ一ニ合スルヲハ、不知也。此詩モ王状元カ集注ヲハ、誰人カ校正スルヤラシラヌソ。（後略）

この解釈には、『三体詩』の二種のテキストと『史記』の二種の注釈が例として挙げられ、『三体詩幻雲抄』と『史記幻雲抄』を著した月舟の興味の方向を示す資料である。このことから、『米沢善本九

一』にある幻の説を月舟寿桂の東坡詩抄と特定できる。さらに、「趙堯卿カ注ソ」の傍注に、「頑雲、此義非乎」と頑雲（即ち河清祖瀏）[二九]の書入れがある。これによれば、『米沢善本九一』に収められる幻丙は河清が書入れを加えたものによっているかもしれない。

『米沢善本九一抄物』において、幻の引用は幻甲・幻乙・幻丙の三種がある。三種のそれぞれの特色は次のようになる。幻甲と幻乙は漢文の注釈で、第一注釈群に置かれ、幻丙は漢字仮名交じり文で、第二注釈群に配置されている。このような使い分けについて、前に引用した倉田氏の記述にすでに指摘がある。それを承けつつ、筆者の見解を述べる。

幻甲と幻乙は、主として題注、詩歌の分段、詩語・詩句に対する解釈で、基本的には中国の文献の引用である。幻丙は幻甲・幻乙と注釈事項が重複することが多いものの、文献の引用を省き、或いは説を簡略化する傾向が強い。以下「壬寅二月有詔令郡吏分往属県減絶囚犯（中略）作詩五百言、以記凡所経歴者寄子由」詩の第四句[三〇]の「循」に対する解釈と詩歌の分段を例としてその特徴を見てみよう。詩の第四句は「循山得勝遊（山に循って勝遊を得る）」である。「循山」について、幻乙は

『左傳』昭廿三傳、公孫鉏曰、魯將御我、欲自武城還、循山而南。杜注、至武城而還、依山南行不欲過武城。（『左伝』昭廿三の伝に、公孫鉏曰く、魯将に我を御がんとし、武城自り還り、山に循って南せんと欲す。と。杜注に、武城に至りて還り、山に依って南行し、武城を過ぎるを欲せず。と。）[三一]

と、『左伝』における「循山」の例を挙げて、杜預の注釈によって「循」を「依」と解釈している。そして第二注釈群における幻丙の「循山」に対する解釈には「山ニ循（右、ヨツテ。左、ソウテ）、右の点可也。」[三二]とあり、典拠を示さずに直接に結論を出している。また当該詩の分段に関して、幻乙は

遠人以下四句總序段。蕭條至難收十句述赴武城鎭之事、至寶鷄之路也、或半夜以下分節。曉入以下此段内、回趨以下赴虢路之事也。東去以下第四節。平生以下十句太白竝湫事。二曲四句第五節、就下皆盩厔事。先帝至颸第六節、至箜篌四句敍行宮、祕殿四句翊聖事、邂逅以下八句與孫果之遊事。冒曉至終第七節、尹生以下六句尹喜問道老子、序樓觀也、羽客以下四句趙宗有事、山寺序大秦寺、帝子以下四句敍玉眞公主事、序延主觀後有廟、入谷八句仙遊潭事、始二句將入仙遊潭之路也。最愛中興寺後玉女洞中泉事、序不載之。忽憶因泉憶舊遊嘆無弟子由也。以上默本、續翠、蟬闇、蕭菴分節皆同之。

或云、凡講此詩分其段者、有三義也。以所經歷日分之、則其段少。以處分之則其段多。以句與意分之、則其段甚多（「遠人」以下の四句総序の段なり。「蕭条」より「難収」に至るの十句は武城鎮に赴くの事、宝鶏の路に至るを述べるなり、或いは「半夜」以下より節を分つ。「曉入」以下は此の段に内にあり、「回趨」以下は虢路に赴くの事なり。「東去」以下は第四節。「平生」以下の十句は太白並びに湫事なり。「二曲」四句は第五節なり、就下は皆な盩厔の事なり。「先帝」より「颸」

は第六節なり、「箜篌」四句に至りて行宮を叙す、「秘殿」四句は翊聖の事なり、「邂逅」以下の八句は孫果之と遊ぶ事なり。「冒暁」より終に至るは第七節なり、「尹生」以下の六句は尹喜 老子に道を問いて、序の楼観なり、「羽客」以下の四句は趙宗有の事、山寺は序の大秦寺なり、「帝子」以下の四句は玉真公主の事を叙す、序に延主観の後に廟有り、と。「入谷」八句は仙遊潭の事、始めの二句は将に仙遊潭に入らんとする路なり。最も中興寺の後の玉女洞中の泉を愛する事、序に之を載せず。「忽ち憶う」は泉に因って旧遊を憶いて弟の子由の無きを嘆くなり。以上黙本、続翠、蝉闇、蕭菴の分節は皆な之に同じ。或いは云う、凡そ此の詩の其の段を分つを講ずる者は、三義有るなり。経る所の歴日を以て之を分かてば、則ち其の段少なし。処を以て之を分ければ、則ち其の段多し。句と意とを以て之を分れば、則ち其の段甚だ多し。）[三三]

と詩歌を全体的に七段落に分け、各段落の大意をも述べ、分段する際に黙本（？）、続翠（江西竜派一三七五～一四四六）、蝉闇（瑞巌竜惺）、蕭菴（正宗竜統、一四二八～一四九八）の説を参照したことを明記している。また、江西竜派のものと考えられる説[三四]を引用して分段の基準と段落数の多寡との関係について説明している。これに対して、幻丙の記述では、

分段ト云（フ）ハ、上ハ去（ル）ヲ、下カラ別事ヲ云（フ）ソ。過段又作跨段ソ。結前生後ノ段ソ。四六至句跨句ト同ソ。回照段ハ前ニ云（フ）コトヲトリテカエイテ云（フ）ソ。此（ノ）詩

ハ分段ハカリソ。一（ツ）ニハ、指十三日与十九日之間、分ツホトニ大段七段ニ分（ツ）ソ。又処ヲ本ニシテ分（ツ）ソ。其（ノ）縣ノ中ニ在（ル）トキノ事ヲ以テ分ツソ。又詩面ヲ以テ分（ツ）ソ。今ハ日ヲ本ニシテ分（チ）テ小段ヲ交テ可分ソ。又口二句ヲ一段ニモスルソ。前四句之内ノ末二句ヲ総序ト云（フ）ソ。前四句ハ総序ソ。

遠人以下六句ヲ一段ニシテ、薄暮ヨリ又分（ツ）ソ。

蕭條大段、薄暮小段、半夜小段、以上十三日の事ソ。

暁入大段、雞嶺小段、南山小（段）、回趨小（段）、聞道小（段）。(三五)

とあり、分段の働きを言い、分段の基準と段落数の多寡との関係について、幻乙が引用する「或云」の説を和語で簡易に述べ、「結前生後」（前の段落を纏めて後ろの段落を導き出す）の説明に役立つ過段・跨段の概念を解説している。また、幻乙が引用した「或云」の説および分段の句切りを和語表記で記載している。分段のところでは、句切りと大段・小段を示す程度で、各段落の意味説明が施されておらず、簡略化した形を取っている。また『東坡詩幻雲抄』に引用される先行の抄には、段落を分けて詩歌の構成を細かく分析するという方法が普遍に用いられたと考えられよう。

おわりに

本章は著録情報における補訂すべき箇所を指摘したうえで、『米沢善本九一』の形態を記述し、版本を特定し、『米沢九一集注』の構成を具体的に復元した。

『米沢善本九一』は十五世紀四十年代前後に印刷された初鋳甲寅字銅活字本であり、一五八五年以前に越後に伝わり、曹洞宗の月松宗鶴が数種の東坡詩抄を類聚編纂した時に、底本として用いられた。一五八五年八月に、月松宗鶴は『米沢善本九一』を完成して宗虎に付与した。中世日本において蘇軾文学研究の担い手は主に臨済宗の禅僧であり、受容の地域は京都が中心であった。本章では、十六世紀後半頃、蘇軾文学はすでに越後にまで伝わり、そして曹洞宗禅僧も蘇軾文学の研究に参与したことを論証した。本章ではまた、蘇軾の詩文集が中国本土のみならず、豊臣秀吉の朝鮮出兵以前に朝鮮からすでに銅活字本のテキストの伝来があったことも論証した。朝鮮の銅活字本のテキストと日本の抄物との結合は東アジアにおける蘇軾文学受容の新しい形態を形成した。これは東アジアにおける蘇軾の詩文集の流布のあり方を研究する絶好の資料と言ってもよい。

また『米沢九一抄物』に集められている十種類の抄の量と配置を明らかにしたうえで、月舟寿桂の『東坡詩幻雲抄』を中心に考察した。

注

（一）劉尚栄『蘇軾著作版本論叢』、巴蜀書社、一九八八年、五十四～八十六頁。

（二）『人文研究』第十五巻第六号、一九六四年、六十一～八十七頁。

（三）傅増湘「宋建本百家注蘇詩跋」（『蔵園群書題記続集』巻四、国家図書館古籍題跋叢刊第二十五冊、北京図書館出版社、二〇〇二年、五九二頁）

（四）「書込み仮名抄一斑」（『愛媛大学教育学部紀要』第二部第九巻、一九七七年、一～二十頁）に、書入れ仮名抄資料の目録が制作されており、計九十五点の資料（集部の資料計二十九点）が収められているが、『米沢善本九十一』を含めていない。また、氏の「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」（『訓点語と訓点資料』第一一三輯、三～八十二頁）に米沢善本九十一』が著録されている。

（五）朝倉治彦監修・岩本篤志編集『米沢藩興譲館書目集成』第二巻、ゆまに書房、二〇〇九年、九十二頁。

（六）右掲注（五）第三巻、二二六頁。

（七）『興譲館旧蔵和漢書目録』とは、明治四十一年財団法人米沢図書館が設立と同時に教育財団興譲館から受けた書籍目録「興譲館蔵書並寄贈書目録」を基礎にして作成されたものである。

（八）『米沢善本の研究と解題』、市立米沢図書館・ハーバード燕京同志社東方文化講座委員会編、一九五八年、二二〇頁。

（九）右掲注（八）、一五八頁。

（一〇）右掲注（八）、九十五～一〇八頁。

（一一）『珍書目録』、財団法人米沢図書館編、一九一一年、十六頁。

（一二）右掲注（一一）、十六頁。

（一三）国立国会図書館蔵『東国古活字譜』第一張、請求記号：WB31―12。

（一四）韓国図書館学研究会『韓国古印刷史』、同朋舎、一九七八年、一四五頁。

（一五）右掲注（一四）、一四七頁。

（一六）米沢温故会『上杉家御家譜』第三巻、原書房、一九八八年、一二六頁。

（一七）柳田征司氏は「洞門抄物『聯珠詩格抄』について」（『室町時代資料としての抄物の研究』第九章第五節、一一八九～一一二〇頁）において取り扱う丈六寺所蔵の『聯珠詩格抄』は永禄十一年に書写されたものであり、曹洞宗禅僧による外典参与の極めて早い例である。張伯偉氏『注石門文字禅』（釈恵洪著、廓門貫徹注、張伯偉・郭醒・童嶺・卞東波点校、中華書局、二〇一二年）の「前言」に、曹洞宗禅僧の外典注釈活動に参与したことについて紹介があり、江戸時代前期における曹洞宗禅僧の外典注釈活動に参与した実例として、独庵玄光は『譫語』において儒家経典および『老子』、『荘子』、『列子』、『漢書』、杜詩、韓愈詩の字句について注釈していることを挙げており、また廓門貫徹の『注石門文字禅』そのものは臨済宗の惠洪の詩文集に注釈を付け加えたものである。

（一八）藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究　集部』、京都大学学術出版会、二〇〇六年。

（一九）国史編纂委員会『朝鮮王朝実録・燕山君日記』巻四十一、探求堂、一九六九年、四五二～四五三頁。

（二〇）請求記号：820－27。

（二一）請求記号：WB31－12。

（二二）倉田淳之助「東坡抄と山谷抄」市立米沢図書館・ハーバード燕京同志社東方文化講座委員会編『米沢善本の研究と解題』、一九五八年、九十五～一〇八頁）

（二三）右掲注（二）。

（二四）駒沢大学図書館編、一九六二年。

（二五）禁裏における蘇詩の講義について、堀川貴司氏「禅僧による禁中漢籍講義―近世初頭『東坡詩』の例―」（『続五山文学論考』、笠間書院）を参考されたい。

（二六）住吉明彦「『方輿勝覧』版本考」（『斯道文庫論集』第四十九輯、二〇一五年、一七三頁）より引用。

（二七）中田祝夫編『三体詩幻雲抄』、勉誠社、一九七七年、六四四頁。

（二八）「村云……」の例、第一冊五十丁ウ、七十三丁ウ。「村……」の例、第一冊六十五丁ウ。「希世……」の例、第三冊一〇四丁オ。

（二九）上村観光『五山詩僧伝』、民友社、一九一二年、三八三頁。

（三〇）第一冊、十三丁ウ。

（三一）右掲注（三〇）。

（三二）第一冊、十四丁オ。

（三三）第一冊、十二丁オ。

（三四）当該詩の『天下白』の注釈には、「続翠云、大節以日分之、小節以處分之」とあり、幻丙に引用される「或云」の説と一致していることから、「或云」は江西竜派と考えられよう。

（三五）第一冊、十二丁ウ。

第三章　想像と真実――論「虔州八境図八首並引」――

はじめに

本章は五山禅僧の注釈および彼らの引用した資料、即ち中国ですでに散逸した施顧注・趙次公注などを多く参照して論を展開し、蘇詩批評における抄物資料の価値を強調するものである。なお、本章において引用する注釈者の説およびのその底本を、以下のように略称する。

・旧王本の諸家注（中華再造善本影印黄善夫家塾本）：旧王本＋注釈者名
・旧王本未収の趙次公注：書名に引用される趙次公佚注
・施元之、施宿、顧禧『注東坡先生詩』（中華再造善本影印景定三年鄭羽補刻本）：施顧注
・施元之等の佚注：書名に引用される施顧佚注
・『翰苑遺芳』所引の注釈者不明の注釈：『翰苑遺芳』に引用される旧注
・孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、二〇〇九年）に引用される諸注家：査慎行、査注。馮応榴、榴案。王文誥、誥案。

蘇軾の「虔州八境図八首並引」の成立における経緯は以下のようである。

熙寧九年（一〇七六）十二月、四十一歳の蘇軾は密州知事の任を終えて、後任の孔宗翰を迎えた。孔宗翰は密州に来る以前は、虔州の知事であり、彼と蘇軾はすでに四ヶ月前に詩歌を唱和し合っていた。[一] 虔州は章水、貢水の合流する地点であり、長く水流に浸蝕されている故に、しばしば城壁が損なわれることがあったが、孔宗翰は虔州の知事として、城壁を修繕する工事を進め、水害に耐えられるよう城壁を作り、朝廷から褒美を賜った。[二] これを記念して、孔宗翰は「虔州八境図」を作り、虔州の景勝を描き、任を終えて密州へ赴任した際に、孔宗翰は、蘇軾に「虔州八境図」を見せて、詩および文を求めたが、蘇軾は直ちには創作しなかった。

元豊元年（一〇七八）十二月、京東路提刑の任を終えて陝州知事に任ぜられている孔宗翰は、[三] 赴任前に、徐州知事の任にあった蘇軾を訪ねた。蘇軾は孔宗翰のために「送孔郎中赴陝郊」詩を詠んで餞別として送り、あわせて熙寧九年の願いに応じて「虔州八境図八首並引」も与えた。[四] 孔宗翰はこの作品を虔州に送り、それは石に刻まれて八境台の近くに立てられた。

紹聖元年（一〇九四）年八月、蘇軾は左遷されて恵州に向かう途中、虔州を通ると地元の名士諸賢が蘇軾に、誰かが石刻を持ち去ってしまったことを報告し、改めて「虔州八境図八首並引」を石に刻むために、蘇軾に揮毫して欲しいと依頼した。すると、蘇軾は地元の名士諸賢の要望に応じて旧作を揮毫しただけでなく、跋文も新たに書き加えた。こうして序文（引）・詩・跋文からなる本作が、ようやく完成するに至ったのである。

実は、蘇軾が「虔州八境図八首並引」を創作した際に、実際に虔州に行ったわけではなく、孔宗翰

の「虔州八境図」に描かれた風景によって詩歌を作ったのである。虔州八境図八首並引」の全体的構造に分析を加えると同時に、想像的な詩作営為の方法を究明することにしたい。また、本連作と蘇軾が虔州で作った詩作とを比較することで、実景を見ずに作る想像的詩作と実景を見て作る真実的詩作との差異についても考察してみる。

第一節　知事の誘い

宋代において亭台楼閣が新設されると、著名な文人に依頼して文を作らせることがよくあり、またその文章がしばしば石に刻まれる。それは当地の文化的景観にもなり、それを読むと建設の経緯および名称の由来などがわかる。さらに地方官の善政を標榜することもできる。蘇軾は、孔宗翰と交際していた熙寧九年（一〇七六）および元豊元年（一〇七八）前後に、文人を多く集めて二度の詩文の応酬を行っている。[五] 一回目は熙寧八年（一〇七五）であった。密州知事の任にあった蘇軾は古い楼台を修繕して超然台と名付け、著名な「超然台賦」を作った。その後、蘇軾は当時の名高い文人を多く集め、同じ題目で賦を作る活動を行い、その作品を石に刻んだ。二回目は元豊元年である。蘇軾が徐州知事の任にあった時、黄河が氾濫し、蘇軾は民衆や軍を動員して水害を治めたことで朝廷から褒美を得た。[六] これを記念するために、蘇軾は黄楼を建て、その楼上に朝廷からの詔書を石に刻み、親友のみならず、多くの文人も集めて詩文を作らせた。

欧陽脩が亡くなり、蘇軾が文壇の盟主となると、文名が一層高まり、各地からその土地の有名な亭台楼閣に関する詩文を創作して欲しいという要望が届くようになる。「虔州八境図八首並引」を作った元豊八年に限って見ても次のようなものがある。

・七月十五日、故郷の要望に応じて「眉州遠景楼記」を創作して眉州知事黎錞の善政を称賛した。
・七月二十二日、滕県県令范純粹のために「滕県公堂記」を作った。
・八月十三日、「表忠観碑」を揮毫して杭州の表忠観に送り、後に石に刻んだ。
・九月、滕県の時同年が新たに作られた西園に詩を作った。
・十一月八日、張天驥のために「放鶴亭記」を創作した。
・十一月十九日に蒙県県令の王兢に頼まれて「荘子祠堂記」を作った。
・十二月、湖州の沈沔の天隠楼に詩を作った。(七)

この「虔州八境図八首並引」は実景ではないので、どこに分類するかが問題になる。「虔州八境図八首並引」は旧王本では、古跡類に入れている。これについて万里集九は次のように論じている。

若論分類、此八首可編書畫部中、而今在古跡部、未知如何也。「王維呉道子畫」之詩在「八觀」之中、而不能拔之、故在古跡之部、不足可以疑也。(若し分類を論じなば、此の八首は書画部の中に

編すべし、而るに今古跡部に在り、未だ如何なるかを知らざるなり。「王維吳道子画」の詩は「八観」の中に在りて、之を拔く能わず、故に古跡の部在り、以て疑うべきに足らざるなり。）[八]

万里集九は「王維呉道子画」が「鳳翔八観」の一首として古跡類に分類されているのはまだ理解できるが、「虔州八境図八首並引」の分類に関しては理解し難いと述べている。一方で万里集九はこの連作について、「此八首題畫圖之上詩、而一句遂不及丹青之事」[九]とも指摘している。しかし果たして此の八首は画図の上に題する詩にして、一句も遂に丹青の事に及ばないことが、書画類に分類されなかった理由であろうか。孔宗翰が蘇軾にこの連作を求めた動機は「虔州八境図」の優劣を品評させることではなく、蘇軾の文壇における地位および影響力を借りて、自らの善政の美名を広めようとしたのであろう。これは連作に附される序文からも読み取れる。

「南康八境圖」者、太守孔君之作也。君既作石城、卽其城上樓觀臺榭之所見而作是圖也。東望七閩、南望五嶺、覽羣山之參差、俯章、貢之奔流。雲煙出沒、草木藩麗、邑屋相望、雞犬之聲相聞。觀此圖也、可以茫然而思、粲然而笑、嘅然而歎矣。蘇子曰、此南康之一境也、何從而八乎。所自觀之者異也。且子不見夫日乎、其旦如盤、其中如珠、其夕如破壁。此豈三日也哉。苟知夫境之爲八也、凡則寒暑、朝夕、雨暘、晦冥之異、坐作、行立、哀樂、喜怒之變、接於吾目而感於吾心者、有不可勝數者矣、豈特八乎。如知夫八之出乎一者也、則夫四海之外、詼詭譎怪、「禹貢」之所書、

鄒衍之所談、相如之所賦、雖至千萬未有不一者也。後之君子、必將有感於斯焉。乃作詩八章、題之圖上。（「南康八境図」は、太守孔君の作なり。君既に石城を作り、其の城上の楼観台榭の見る所に即いて是の図を作れり。東のかた七閩を望み、南のかた五嶺を望み、群山の参差たるを覧、章、貢の奔流を俯す。雲煙出没し、草木藩麗たり、邑屋相望み、鶏犬の声相聞こゆ。此の図を観るや、以て茫然として思い、粲然として笑い、嘅然として歎ず可し。蘇子曰く、此れ南康の一境なり。何に従りて八たるや、と。自ら観る所の者異なればなり。且つ子は夫の日を見ずや、其の旦には盤の如く、其の中には珠の如く、其の夕には破壁の如し。此れ豈に三つの日ならんや。苟くも夫の境の八為るを知らば、凡そ則ち寒暑、朝夕、雨暘、晦冥の異なる、坐作、行立、哀楽、喜怒の変ずる、吾が目に接して吾が心を感ぜしむるは、勝げて数うるべからざるもの有り、豈に特だに八のみならんや。如し夫の八の一より出づるを知らば、則ち夫の四海の外、詼詭譎怪にして、「禹貢」の書する所、鄒衍の談ずる所、相如の賦する所は、千万に至ると雖も未だ一ならざる者有らざらん。後の君子、必ず将に斯に感ずること有らんとす。乃ち詩八章を作り、之を図上に題す。）

虔州は南朝から隋に至るまで南康と称されたため、序文では「虔州八境図」を「南康八境図」とした。序文を見ると、「虔州八境図」は八枚の図画から構成されるものではなく、八境台を拠点とする一枚の展望図であることがわかる。一枚の画像から八つの焦点を当てて詩を作るのはいかに困難であろ

うか。従って、蘇軾は「此南康之一境也、何從而八乎」と孔宗翰に問いかけた。孔宗翰は同じ太陽なのに、朝、昼、夕の三つの時点から観察すると、三つの情景になると答えた。これは、一枚の図画であっても想像力を働かせて、静的画面を動的に観察すれば、画中の風景は自ずと変化して様々な姿を見せるということである。このようなヒントを得て、蘇軾は「寒暑、朝夕、雨暘、晦冥之異」という季節・時刻の変遷、陰晴・明暗の変化、および「坐作、行立、哀樂、喜怒之變」という画中の人物の行動・情感の変化などを想像して詩を作ったのである。

第二節　画外における鑑賞と想像

本節では、八首を中国の注釈書や抄物資料などを参照しつつ、一首ずつ詳しく見ていく。

虔州八境図八首並引　其一

坐看奔湍遶石樓　坐して看る奔湍の石楼を遶るを
使君高會百無憂　使君の高会　百も憂い無し
三犀竊鄙秦太守　三犀　竊に鄙しむ　秦の太守を
八詠聊同沈隱侯　八詠　聊か沈隱侯に同ぜん

其一の前半二句は章水、貢水の激流が城壁をめぐる中、使君即ち孔宗翰は何の憂いもなく、八境台において盛大な宴会を開いて竣工を祝った場面である。第三句の秦太守とは李氷のことである。李氷は蜀地の太守を勤めた時期、三頭の石犀を埋めて水を鎮めた。詩はこのような巫術は無論孔宗翰の治水工事には及ばないということを述べる。沈隠侯は沈約を指す。沈約は嘗て建昌県侯に封じられ、謚は隠と言うため、沈隠侯と称される。斉の隆昌元年（四九四）、沈約は東陽太守を勤めた頃、「東陽八詠」を作って東陽（今の浙江省金華市）を詠じた。[一〇] ここで蘇軾は自らを沈約に擬えているのである。蘇軾は嘗て鳳翔通判を勤めた頃、当地の遺跡を遊覧して、石鼓文など八か所の名所を選んで「鳳翔八観」を詠じたことがある。「鳳翔八観」詩は実景に即して作られた古体詩であり、物事に対する描写が非常に詳しい。「虔州八境図八首並引」詩が絶句で作られたのは、この連作が題画詩であり、創作してから石にも刻むため、この短い詩型が最も相応しいと思われたためであろう。

ただし、この連作は題画詩として見ると、やや特殊なところがあり、功績をうたっている点で、特異である。孔宗翰が詩を求めた目的は、蘇軾の文名を借りて自らの功績を宣揚しようとしたからである。恐らく蘇軾は孔宗翰の意図をよく理解していたため、其一においてまず孔宗翰の功績を強調して連作の基調を定めたのであろう。

其二

濤頭寂寞打城還　濤頭寂寞として城を打って還る

章貢臺前暮靄寒　章貢台前　暮靄寒し
倦客登臨無限思　倦客登臨して無限の思いあり
孤雲落日是長安　孤雲落日　是れ長安

其二の「暮靄」「落日」の語から、この宴会が夕方まで続いたことが推測することがわかる。ここに、其一からの時間の推移が見られるものの、詩に詠じられる人物に変化はない。第二句の章貢台は其二が焦点を当てた場所である。一韓智翃は趙抃（一〇〇八～一〇八四）の「章貢台記」を引用して、章貢台の所在と由来を解釈している。

『趙清獻公文集』十四巻「章貢台記」云、江右遐陬、南康古郡。水別二派、來數百里。貢源新樂、章出大庾、合流城角、於文爲贛（後略）。（『趙清献公文集』十四巻「章貢台記」に云う、江右の遐陬に、南康古郡あり。水別れて二派、来たること数百里。貢は新楽に源し、章は大庾に出づ、城角に合流し、文に於いて贛と為す。（後略））[一一]

「章貢台記」によれば、嘉祐七年（一〇六二年）に趙抃が知事として虔州の北西にあった野境台の遺跡で楼台を立て直して章貢台と名付けた。この連作が創作された元豊元年（一〇七八）の時点から見ると、章貢台は新たな景観と言える。

第三句の「倦客（疲れた旅人）」は孔宗翰である。[一二] 瑞渓周鳳は『脞説』において「二句蓋李白鳳凰臺詩之意也（二句蓋し李白鳳凰台詩の意なり）」と第三、四句は李白の「總爲浮雲能蔽日、長安不見使人愁」（「登金陵鳳凰台」）を転用したと述べている。[一三] しかし、李白の詩が不遇を表しているのに対して、「無限思」を持つ孔宗翰は君主に忠実である臣下だと言うことができよう。[一四]

其三

白鵲樓前翠作堆　白鵲楼前　翠　堆を作す
縈雲嶺路若爲開　雲を縈う嶺路　若為でか開かん
故人應在千山外　故人応に千山の外に在りて
不寄梅花遠信來　梅花の遠信を寄せて来たらざるべし

其三では、時間の推移は見えないが、詩における場面・視点が変化している。白鵲楼について、『翰苑遺芳』の引く旧注に「在郡治、趙閲道有記。（郡治に在り、趙閲道記有り。）」[一五] と、白鵲楼が郡治の虔州に位置しており、趙抃の「章貢台記」に記されていることを述べる。また旧王本師民瞻注は第二句の「嶺路」について、「大庾嶺梅、南枝落、北枝開、寒暖之候異故也。嶺在虔之西南。（大庾嶺の梅、南枝落ち、北枝開くは、寒暖の候異なるが故なり。嶺虔の西南に在り。）」[一六] と大庾嶺の所在とその名物の梅花を説いている。これによれば、白鵲楼と嶺路はいずれも実際に存在しているものである。

第四句の「梅花」に関して、旧王本程縯の注では、

『荊州記』記載、魯凱與范曄相善、自江南寄梅一枝、詣長安與曄、並贈詩曰、折花逢驛使、聊贈一枝春。（『荊州記』に記載す、魯凱と范曄と相い善し、江南自り梅一枝を寄す、詣りて長安の曄に与え、並に詩を贈らしめて曰く、花を折りて駅使に逢い、聊か一枝の春を贈らん。）」[一七]

とあり、遠方の友人に梅花を贈る故事を指摘している。第三句に登場する故人は誰かはわからないが、孔宗翰の旧友に違いない。万里集九は『天下白』において、

有兩説。其一、『續翠』云、孔之故人也。孔今隔千山萬山而在密、虔州之故人因道路遠未寄來梅花之信息於密州也。千山之中必有大庾嶺也。其一、北禪云、孔在虔之時、嶺外之故人未寄來梅花信息於孔也。（両説有り。其の一、『続翠』に云う、孔の故人なり。孔今千山万山を隔てて密に在り、虔州の故人道路の遠きに因って未だ梅花の信息を密州に寄せ来たらざるなり。千山の中に必ず大庾嶺有るなり。其の一、北禅云う、孔虔に在るの時、嶺外の故人未だ梅花の信息を孔に寄せ来たらざるなり。）[一八]

万里集九は江西竜派の「山々を隔てた虔州の嘗ての友人たちが梅花を密州知事の任にあった孔宗翰

に贈った」のか、瑞溪周鳳の「虔州知事の任にあった孔宗翰が嶺外にいた友人から梅のたよりをもらった」のかについて、二種の説はみな通じると思われるが、瑞溪周鳳の説の方がさらに有力であると考えられる。当該連作は題画詩であるので、孔宗翰も故人も画中の人物として設定されており、孔宗翰が虔州にいたと考えることが妥当であろう。「故人」は蘇軾の想像によって設置された人物であろう。

其四

朱樓深處日微明　朱楼深き処　日微かに明らかなり
皀蓋歸時酒半醒　皀蓋帰る時　酒半ば醒む
薄暮漁樵人去盡　薄暮　漁樵　人去り尽くし
碧溪青嶂遶螺亭　碧溪　青嶂　螺亭を遶る

薄暮の時刻になり、長く宴会を開いた孔宗翰はついに宴会を終えて帰ろうとした。その際に酒の酔いもなかば醒めた。漁師や木こりたちもみな帰り、賑やかであった会場が閑散となった。其四における時間は其二を受けている。趙抃の「章貢台記」によれば、第二句の「皀蓋」について、現存する中国の諸注に見られないが、瑞溪周鳳は『脞説』において「言孔君曾登此樓之時也。（孔君曽て此の楼に登るの時を言うなり。）」[一九]と言い、皀蓋を楼閣名として理解していた。また『翰苑遺芳』に引用され

る旧注では、『『後漢・輿服志』、中二千石、皆皂蓋、朱兩轓。』[二〇]とある。漢代では、郡の太守は二千石の給料が与えられたため、皂蓋は太守の別称となったのである。[二一]万里集九は『翰苑遺芳』の説を受けて「指孔爲太守之時。（孔の太守為るの時を指す。）」[二二]と述べ、皂蓋を孔宗翰として理解している。この詩において孔宗翰はまだ宴会の場にいることが読み取れるため、万里の理解が妥当だと考えられよう。

其五

使君那暇日参禪　使君　那ぞ日びに参禪するに暇あらん
一望叢林一悵然　一たび叢林を望んで一たび悵然
成佛莫教靈運後　成仏は霊運が後ならしむること莫かれ
著鞭縱使祖生先　鞭を着くるは祖生をして先んぜしむるとも

『翰苑遺芳』に引用される趙次公佚注によれば、「第五篇蓋以言大庾嶺有禪刹也。虔有慈雲、天竺二寺（第五篇は蓋し以て大庾嶺に禪刹有るを言うなり。虔に慈雲、天竺の二寺有り。）」[二三]とあり、容易に参禪できた虔州にいるはずであるが、公務多忙の孔宗翰は参禪する暇がなかったようである。

参禪しなかった理由について、万里集九は、

有両説。其一云、祖出世間之法、霊運ガ前ニ成仏之事を了スベシ。孟顗ガヤウニ修行バカリヲ本ニシテ、区区トシテハカナウマシイゾ。転心ノ機ヲ具セヨ。参禅修行ヲスルハ、頓法デハナイゾ。下ノ句ハ言ハ、功名ノ鞭ヲバ、世間ノ利達ヲ求ムル者ニ、ウチマカセテトラセヨ。劉琨ガ如ク、心ヲ功名ニカクベカラズ。此義ノ時ハ、朱ノ点ゾ。両句共ニ太守ノ故事ヲ用ル事ハ、孔今密ノ守ナレバ也。孟顗ガヤウニ、ナアツゾ。劉琨ガヤウニ、ナサチカイゾト。先生ノ孔宗翰ヲ教訓也。コノヤウニ見レバ、霊運ガ後ト云（フ）三字、如本伝而好也。又其一云、上句先生自比霊運。出世間法之事ハ、我レ、早ク可了知也。下ノ句、以祖逖比孔。富貴功名之鞭ハ高ク令孔執之也。(二四)

と二種の説を挙げている。其五において、蘇軾は二つの故事を用いて、多忙な政務から離れて参禅してよかろうと孔宗翰を薦めているため、本章では、前者の意味を取る。

其一から其五までの五首において、内容が連続していることから、詩の主人公である孔宗翰は画中に常に描かれ続けていると言える。時間の推移は其八に至るまで見られるが、内容はこれ以降一貫性を失い、孔宗翰の姿も見られなくなる。

其六

卻従塵外望塵中　却って塵外従り塵中を望めば
無限樓臺煙雨濛　無限の楼台　煙雨濛たり

山水照人迷向背　山水　人を照らして向背に迷い
只尋孤塔認西東　只だ孤塔を尋ねて西東を認む

『翰苑遺芳』に引用される旧注は、

襲公山在贛縣北百八十里、隱士襲毫所棲。襲公山頂塵外亭、今在州治東、形勢最高絶。凡四境之山川可以放閲。（襲公山　贛県の北百八十里に在り、隱士襲毫の棲む所なり。襲公山頂の塵外亭は、今州治の東に在り、形勢最も高絶たり。凡そ四境の山川以て放閲すべし。）(二五)

とある。従って、詩の内容が次のようになる。塵外（亭）は城内から遠く離れた襲公山の山頂にあり、そこから俗世を眺めると、無数の楼台は雨のなかでぼんやりとかすんでいる。四周の美しい山水が人をぐるりと囲み、前後を見失わせる。ただ一基の寺塔によって方向を見分ける。

紀昀は当該詩について、「實景寫來如畫（実景写し来ること画の如し）」(二六)と当該詩の情景を描く表現力を褒めているが、詩に出てくるものは必ずしも実景ではない。塵外亭は確実に存在するものであるが、孤塔は実際にあるものかどうかは不明である。『翰苑遺芳』に引用される趙次公佚注では、

第六篇蓋以大庾嶺有禪刹也。孤塔不見所載。圖有之矣。且因先生詩見之。（第六篇は蓋し以て大庾

嶺に禅刹有るなり。孤塔載するところを見ず。図に之れ有らん。且つ先生の詩に因って之れを見る。）[二七]

とあるため、蘇軾の時代に近い趙次公ですら、地理書の記載から見つけられず、恐らく「虔州八境図」に描かれているものだろうと推測している。査注は趙與虡『娯老堂詩話』を引いて、

歐陽文忠公詩云、山浦轉帆迷向背、夜江看斗辨西東。東坡亦云、山水照人迷向背、只尋孤塔認西東。身遊山水間、果有此理。二公可謂善於形容者矣。（欧陽文忠公の詩に云う、山浦帆を転じて向背に迷い、夜江斗を看て西東を弁ず、と。東坡亦た云う、山水人を照らして向背に迷い、只だ孤塔を尋ねて西東を認む、と。身山水の間に遊べば、果して此の理有らん。二公形容に善きものと謂うべし。）」[二八]

と第三、四句は欧陽脩の「初出真州泛大江作」詩に因んでいることを指摘している。欧陽脩は夜に揚子江を渡る際に、北斗星を参照して方向を弁別したが、其六は昼間の情景なので、参照するものを替えなければならない。この参照物、即ち孤塔は蘇軾の虚構であろう。

其七

煙雲縹緲鬱孤臺　煙雲縹緲たり　鬱孤台
積翠浮空雨半開　積翠　空に浮かんで　雨半ば開く
想見之罘觀海市　想見する　之罘に海市を観ることを
絳宮明滅是蓬萊　絳宮の明滅するは　是れ蓬萊ならん

査注[二九]によれば、鬱孤台は実際に存在するものである。雨が止み、薄いもやのかかった鬱孤台がおぼろげに見える。この台の景観によって之罘で蜃気楼を見るさまが想起される。もやのうちに現れては消える朱塗りの宮殿は蓬莱の仙山であろうと詩は結ばれる。

しかし、この時点では蘇軾はまだ蜃気楼を見ておらず、想像によって描いている。『翰苑遺芳』に引用される旧注は、

後八年知登州時、觀之罘海市。此詩未到登州之前八年、聞人説海市之狀、以形容鬱孤臺之景也。（後八年登州に知たりし時、之罘の海市を観る。此の詩未だ登州に到らざるの前八年、人に海市の状を説くを聞き、以て鬱孤台の景を形容するなり。）[三〇]

と言っており、蘇軾が実際に蜃気楼を見たのは八年以降のことである。ここでは蘇軾は人より聞いた蜃気楼の情景を鬱孤台に重ね合わせたことがわかる。

其一から其五に至る五首は、「落日」「日微明」などの言葉があり、晴天の情景を示している。其六の「煙雨濛」、および其七の「雨半開」は、詩が雨天の情景を描写していることを意味する。一つの書画作品に陰晴の情景が併存することはないわけではないが、「虔州八境図」には恐らくないであろう。連作の序文に、「凡そ寒暑、朝夕、雨暘、晦冥の異なる、坐作、行立、哀楽、喜怒の変ずる、吾が目に接して吾が心に感ずるは、勝げて数うるべからざるもの有り、豈に特だに八のみならんや。」とあるように、蘇軾は想像力を発揮して雨天の情景を作り出した。其七に至って、時間の推移（寒暑、朝夕）、孔宗翰の移動（坐作、行立）、孔宗翰の情緒の変化（哀楽、喜怒）および陰晴の変化（雨暘、晦冥）がすべて描かれた。

其八

回峰亂嶂鬱參差　回峰　乱嶂　鬱として參差たり
雲外高人世得知　雲外の高人　世知るを得んや
誰向空山弄明月　誰か空山に向いて明月を弄する
山中木客解吟詩　山中の木客　解く詩を吟ず

其一から其七には、それぞれに中心となって描かれる景物があった（其一の宴会、其二の章貢台、其三の白鵲楼、其四の螺亭、其五の叢林、其六の塵外亭、其七の鬱孤台）。しかし、其八では情景の視

野が無限に広がり、一つ一つの景物に対する細かな描写は見られなくなっている。高低不揃いな山々が緑うずたかく聳え、虔州の町はその中に囲まれている。雲の彼方に高名な人徳者がいるのか、世間は知らない。人影のない山中に、美しい月光を見る人は誰であろうか。それは詩を吟ずる草木の精霊のみであろう。趙克宜は其八について、「拈一瑣事入詩、頗有餘味。（一の瑣事を拈りて詩に入れ、頗る余味有り。）」[三二]と評しており、瑣末な事柄を詠じてこの連作を終えることで、虔州八境の美景に余情を漂わせる。

第三節　傍観者から画中の人へ

紹聖元年（一〇九四）、蘇軾は翰林侍読学士知定州の任から寧遠郡節度副使に左遷された。[三三]彼は北方の定州より、数千里を離れた嶺南の恵州へ旅立った。八月七日に、惶恐灘を経て虔州に至った。[三三]蘇軾は虔州知事の黄元翁に送った手紙に、「到治下當做陸行、必留數日款見也。（治下に到りて当に陸行を做すべし、必ず留まること数日にして款見せん。）」[三四]と言い、虔州で鬱孤台、廉泉、塵外亭、天竺寺などの景勝を遊覧した。また虔州の知識人たちの要請に応じて、改めて「虔州八境図八首並引」を揮毫し、さらに跋文を作った。

南康江水、歳歳壞城。孔君宗翰爲守、始作石城、至今賴之。軾爲膠西守、孔君實見代。臨行出「八

境圖」求文與詩、以遺南康人、使刻諸石。其後十七年、軾南遷過郡、得遍覧所謂八境者、則前詩未能道其萬一也。南康士大夫相與請於軾曰、詩文昔嘗刻石、或持以去、今亡矣。願復書而刻之。時孔君既沒、不忍違其請。紹聖元年八月十九日眉山蘇軾書。（南康の江水、歳歳として城を壊る。孔君宗翰 守と為り、始めて石城を作り、今に至るまで之れに頼る。軾 膠西の守と為り、孔君 実に代わらる。行くに臨んで「八境図」を出して文と詩とを求め、以て南康の人に遺り、諸を石に刻せしむ。其の後十七年、軾 南遷して郡を過り、遍く所謂る八境なる者を覧るを得たり、則ち前詩は未だ其の万に一も道う能わざりしなり。南康の士大夫 相与に軾に請うて曰く、詩文は昔嘗て石刻せしむ、持して以て去るもの或り、今は亡し。願わくは復た書して之を刻せんことを、と。時に孔君既に沒し、其の請いに違うに忍びず。紹聖元年八月十九日、眉山の蘇軾書す。）

この跋文を見ると、蘇軾は虔州に至って初めて八境を遊覧して、「則ち前詩は未だ其の万に一も道う能わざりしなり」と言い、旧作における八境の描写に後悔の念を示した。これは恐らく想像による創作と実景による創作とでは、大きく異なっていることを言っているのであろう。想像による創作は作者が外部から画中の世界を見ることで、傍観者の角度から観察して詩を作る。一旦現地に入って、自らが景色の中の人となれば、観察の角度や作者の立場も変わる。

蘇軾が実際に虔州に行って八境図に関連する詩としては、「鬱孤台」「塵外亭」「天竺寺並引」の三首がある。以下八境図の詩と比較しながら論じてみる。まず、連作の其七に見える鬱孤台の描写と蘇軾

が現地で作った「鬱孤台」[三五]詩の描写とを比べてみる。

八境見圖畫　八境　図画を見る
鬱孤如舊游　鬱孤　旧遊の如し
山爲翠浪涌　山は翠浪と為って涌き
水作玉虹流　水は玉虹と作って流る
日麗崆峒曉　日は麗かなり崆峒の曉
風酣章貢秋　風は酣なり章貢の秋
丹青未變葉　丹青　未だ葉を変ぜず
鱗甲欲生洲　鱗甲　洲に生ぜんと欲す
嵐氣昏城樹　嵐気　城樹昏く
灘聲入市樓　灘声　市楼に入る
煙雲侵嶺路　煙雲　嶺路を侵し
草木半炎州　草木　炎州に半ばす
故國千峰外　故国　千峰の外
高臺十日留　高台　十日留まる
他年三宿處　他年三宿の処

準擬繫歸舟　帰舟を繫がんと準擬す

「鬱孤台」詩は八聯からなっている。首聯と第七、八聯以外の五聯はすべて景を描いている。連作其七の「想見す、之罘に海市を観ることを、絳宮の明滅する、是れ蓬萊」の二句は、想像の情景によって鬱孤台を描いている。これに対して、「鬱孤台」詩における景の描写は詳細である。草木に覆われる山々は、風に吹かれて波のように動き、清らかな川が流れる。朝陽の光は遠方の崆峒山を照らし、秋の西風は章、貢の川を吹く。万物が衰えていく八月であっても、木の葉は相変わらず緑のままで赤になっていない。魚類は卵を川の中洲に産み付けようとしている。山気が立ちこめて町周辺の樹木が暗くなって、早瀬の響きは虔州の町を通って鳴り続ける。薄いもやは嶺上の道を隠して、草木の大半は南方にしか見えないものである。「山爲翠浪涌」以下の八句について、瑞渓周鳳は『脞説』では、

以下八句皆上句言山、下句言水也。（以下の八句皆上の句山を言い、下の句水を言うなり。）(三六)

と言っているが、これは他に見られない優れた指摘である。景を描写する際に山と水との対比によって言葉の重複を避けていて、空疎なイメージが一切ない。また、蘇軾がその八境の人物として登場して自らの考えを述べている。

このような登場人物としての蘇軾は「塵外亭」(三七)詩の第四～八句にも見られる。

山高惜人力　山高くして人力を惜しみ
十歩輙一憩　十歩　輙ち一憩
卻立浮雲端　却って浮雲の端に立ち
俯視萬戸麗　俯して万戸の麗なるを視る

蘇軾は龔公山の山頂に至るまでの登山体験や塵外亭から鳥瞰した情景をそのまま詩に取り入れて、作中人物の存在感を強く描いている。

「虔州八境図八首並引」其五の首聯は「使君　那ぞ日びに參禅するに暇あらん、一たび叢林を望んで一たび悵然」であり、「虔州八境図」には寺院が描かれていることが窺われるが、連作其五では、蘇軾は画中の寺院に対する具体的な描写がなく、虔州が参禅の勝地という角度から詩を作った。これに対して、今回は虔州の天竺寺を遊覧して少年時代の記憶を呼び起され、個人的な思いを述べている「天竺寺並引」(三八)詩を作った。

予年十二、先君自虔州歸、爲予言、近城山中天竺寺、有樂天親書詩云、一山門作兩山門、兩寺原從一寺分。東澗水流西澗水、南山雲起北山雲。前臺花發後臺見、上界鐘聲下界聞。遙想吾師行道處、天香桂子落紛紛。筆勢奇逸、墨跡如新。今四十七年矣、予來訪之、則詩已亡、有石刻存耳。

感涕不已、而作是詩。（予　年十二、先君　虔州自り帰り、予の為に言う、城に近きの山中の天竺寺に、楽天親ら書する詩有りて云う、一山の門は両山の門と作り、両寺　原と一寺従りわかる。東澗水西澗水に流れ、南山雲北山雲を起こす。前台の花は後台発して見れ、上界の鐘声　下界に聞ゆ。遙かに想う　吾が師行道の処、天香桂子　落ちて紛紛たり、と。筆勢奇逸、墨跡新なるが如し、と。今四十七年、予来って之を訪えば、則ち詩已に亡びて、石刻の存する有るのみ。感涕已まずして、是の詩を作る。）

香山居士留遺跡　香山居士　遺跡を留め
天竺禪師有故家　天竺禅師　故家有り
空詠連珠吟疊壁　空しく連珠を詠じて疊壁を吟じ、
已亡飛鳥失驚蛇　已に飛鳥を亡いて驚蛇を失う
林深野桂寒無子　林深の野桂　寒くして子無く
雨浥山薑病有花　雨浥の山薑　病んで花有り
四十七年真一夢　四十七年　真に一夢
天涯流落涙横斜　天涯に流落して涙　横斜す

序文を見ると、蘇洵は虔州近郊の天竺寺に白楽天の題詩の墨蹟があることを十二歳の蘇軾に伝えている。蘇軾は天竺寺に入ってから白楽天詩の刻石を見て四十七年前の記憶が呼び覚まされた。父の蘇

洵が逝去し、自分は年を取った末に、嶺南という辺鄙の地に左遷された。心に積もった思いがこの一瞬でこみ上げてきて「四十七年真に一夢」と不安定な人生を嘆いた。この詩における濃厚な情感は白楽天詩の刻石を契機として起こったものであり、図による創作にはこのような契機となるものは少ない。

おわりに

万里集九は、「先生未見虔州、只依圖作賦而已。日本ノ諺ニ云（フ）、ミヌ京モノガタリト云（フ）ヤウナ」[三九]と述べ、「虔州八境図八首並引」の創作における最も注目すべき点を指摘している。蘇軾は「虔州八境図」に取材し、想像力を発揮して静的画面に時間の推移・画中の人の移動および情緒の変化・陰晴の転換・情景の移転などを付け加えて巧みに詩を作った。本章では、「虔州八境図八首並引」の創作経緯を明らかにしたうえで、中国・日本の注釈を広く参照しつつ、連作の各作品およびその全体的構造について分析を加え、特に連作における想像的な詩作営為の方法を明らかにした。

また、本連作と蘇軾が虔州で作った詩作とを比較することで、想像的詩作と真実的詩作との差異についても考察した。蘇軾が虔州で体験したものを詩に取り入れた際は、想像的詩作と表現が大きく異なっている。景に対する描写は詳細で、読み手に臨場感が与えられる。また情感の露出も自然であり、詩人の存在感が強い。

注

（一）孔凡礼『蘇軾年譜』巻十五（中華書局、二〇〇五年、第三七七頁）熙寧九年八月十五日条に、「飲超然臺、和孔宗翰題詩、時宗翰乞密」とあり、唱和した作品は「和魯人孔周翰題詩」である。

（二）『宋史・孔宗翰伝』（中華書局、一九七七年、第九八八六頁）に、「伐石爲址、冶鐵錮之。由是屹然、詔書褒美。」とある。

（三）『蘇軾年譜』巻十七、第三九〇～三九一頁。

（四）孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、二〇〇九年）巻十六、第七九一～七九六頁。

（五）朱剛・李棟「從個人唱和到群體表達」（『江海学刊』二〇一二年第三期、第一九二～二〇〇頁）では、蘇軾が密州、徐州において主催した文芸活動について考察している。

（六）『蘇軾年譜』（第三九六頁）巻十七、元豊元年五月四日条に、「朝廷降詔奬諭蘇軾去歳徐州捍水功。刻詔於石、爲敕記。」とある。

（七）『蘇軾年譜』巻十七を参照。

（八）笑雲清三編・中田祝夫整理『四河入海』第一冊、m誠社、一九七〇年、第九二五～九二六頁。

（九）同右掲注（八）。

（一〇）八首の連作によってある地域の景勝を描くのは沈約に遡ることができる。しかし、このような連作が盛んに創作されるようになったのは北宋からである。内山精也は「宋代八景現象考」（中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第二十号、第八十三～一一〇頁）において、ある地域の景勝地を八箇所切り取り、詩歌や絵画によって

具体的に描写する一連の現象について考察している。

（一一）『四河入海』第一冊、第九五四頁。

（一二）瑞渓周鳳は『脞説』で旧注を引いて、「倦客指孔周翰也」と言っている。（『四河入海』第一冊、第九一四頁）

（一三）『四河入海』第一冊、第九一四頁。

（一四）趙克宜は「戀闕之思、自然流露」（曾棗荘『蘇詩彙評』、四川文芸出版社、二〇〇〇年、第六四七頁）と評している。

（一五）『四河入海』第一冊、九一六頁。

（一六）『蘇軾詩集』巻十七、第七九三頁。

（一七）同右掲注（一五）。

（一八）『四河入海』第一冊、第九一六～九一七頁。

（一九）『四河入海』第一冊、第九一八頁。

（二〇）同右掲注（一八）。

（二一）小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第四冊（筑摩書房、一九九〇年）、第四四一頁。

（二二）同右掲注（一八）。

（二三）同右掲注（一八）。

（二四）『四河入海』第一冊、第九一九～九二〇頁。

（二五）『四河入海』第一冊、第九二二頁。
（二六）『蘇詩彙評』、第六四九頁。原文は「實景寫來如話」とあるが、恐らく「話」は「畫」の誤りであろう。
（二七）同右掲注（二四）。
（二八）『蘇軾詩集』卷十七、第七九五頁。
（二九）査注では、『名勝志』、鬱孤臺、一名賀蘭山、在府治。」とある。（『蘇軾詩集』卷十六、七九五頁）
（三〇）『四河入海』第一冊、第九二三頁。
（三一）『蘇詩彙評』、第六五〇頁。
（三二）『蘇軾年譜』卷三十三に拠る。
（三三）蘇軾は「八月七日、初入贛、過惶恐灘」詩（『蘇軾詩集』卷三十八、第二〇五二～二〇五三頁。）がある。
（三四）蘇軾「與黄元翁一首」（孔凡礼点校『蘇軾文集』卷五十七、中華書局、一九九六年、第一七一六頁。）
（三五）『蘇軾詩集』卷三十八、第二〇五三～二〇五四頁。
（三六）『四河入海』第一冊、九四六～九四七頁。
（三七）『蘇軾詩集』卷三十八、第二〇五五頁。
（三八）『蘇軾詩集』卷三十八、第二〇五六頁。
（三九）『四河入海』第一冊、第九一一頁。

後

篇

第四章　蘇詩趙次公注新考――宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書入れを中心に――

はじめに

後篇では、前篇において論考した抄物資料などを用いて、注釈者として蘇軾に最も近い時代を生きた趙次公の佚注と「和蘇詩」とを考察する。

杜氏『左傳』、李氏『文選』、顔氏『班史』、趙氏『杜詩』、幾於無恨矣。（杜氏『左伝』、李氏『文選』、顔氏『班史』、趙氏『杜詩』、恨み無きに幾し。）

これは、南宋の詩人、劉克荘（一一八七～一二六九）「跋陳教授杜詩補注」[一]の引用であり、劉克荘は、杜預、李善、顔師古、そして、趙次公を並べている。これは、杜預をはじめとした名高い注釈家と趙次公が肩を並べるものとして、彼の『杜詩先後解』の注釈水準の高さを称賛するものと捉えられる。しかし、趙次公に関する資料は非常に稀である。林継中氏は考証で次のように述べている。

趙次公、字彦材、蜀人。與邵溥、晁公武交遊。隆興年間、任隆州司法。著有杜詩注、蘇詩注。著杜詩注當在紹興四年至十七年之間。（趙次公、字は彦材、蜀の人。邵溥、晁公武と交遊していた。

隆興年間、隆州司法を務めた。著作としては杜詩注、蘇詩注がある。その杜詩注は紹興四（一一三四）年から十七（一一四七）年の間に著された。）[二]

趙次公は杜詩のみならず、蘇詩にも注釈を行っているが、[三]現存する最も古い蘇詩注である趙次公注の単注本はすでに散逸し、その全貌を見ることができなかった。

従来、蘇詩における趙次公注は極めて重要視されており、蘇詩の早い時期の注釈書の『集注東坡先生詩』前後集、及び王十朋の名を借りて編まれた『王状元集百家注分類東坡先生詩』（旧王本）に頻繁に引用されている。『集注東坡先生詩』については、宋刊残本『集注東坡先生詩前集』巻一から巻四のみが中国国家図書館に所蔵されているが、容易に見ることはできない。従って、旧王本に見られない趙次公注は蘇詩趙次公佚注と看做されている。

はじめに趙次公注の輯佚を試みたのは、清の馮応榴（一七四〇～一八〇〇）である。彼は乾隆五十八年（一七九三）に刊行した『蘇文忠公詩合注』において、宋刊五家注本『集注東坡先生詩後集』七巻を参照して新・旧王本に見られない趙次公注を整理したのである。

以降、小川環樹・倉田淳之助が大岳周崇『翰苑遺芳』より施顧注、趙次公注を輯佚し、『蘇詩佚注』として刊行した。この本は「宋の施元之が顧禧の協力を得て作った『注東坡先生詩』四十二巻の中、佚亡して現存しない巻第一、第二、第五至第十、第十九、第二十の十巻と、趙次公注で『王状元集注分類東坡先生詩』に収められなかった部分を復元して上巻とし」たものである。施顧注・趙次公注の

輯佚については国立国会図書館所蔵の大岳周崇『翰苑遺芳』の古鈔本を用いており、翁万戈氏旧蔵の宋刊『注東坡先生詩』の編次に従っている。(四)

馮応榴、小川環樹・倉田淳之助らの蘇詩趙次公佚注の整理事業以来、一応成果が上げられているが、なお不十分なところがあり、(五)さらなる輯佚作業が必要である。本章では、従来の輯佚研究を検討しつつ、『四河入海』や宮内庁書陵部所蔵の宋版浙本と言われる『王状元集百家注分類東坡先生詩』に書き込まれた趙次公注といった新たな資料を用いてその輯佚範囲と整理方法を定め、趙次公単注本の復元を試みてみたい。

第一節　趙次公注を引用した諸資料

趙次公に関する最も古い記述は、南宋中期の王象之『輿地紀勝』巻一四六の成都府路・嘉定府・人物に見られる。その注には「注杜陵詩、解東坡詩」(六)とあり、趙次公が杜甫や蘇軾の詩歌に注釈を加えたと述べている。杜詩注と蘇詩注が一旦散逸したが、杜詩注について、林継中氏が輯佚作業を行い、『趙次公杜詩先後解輯校』(七)として刊行したことによって、その全貌を見ることができるようになった。しかし、蘇詩注は散逸したままであり、書名も不明である。趙次公注を最も早く収録したのは『集注東坡先生詩』前後集である。後の旧王本系統のテキストは『集注東坡先生詩』所収の趙次公注を採用したのであるが、削除されたものも多かった。また、『集注東坡先生詩』は日本にも伝わり、五山禅僧

の抄に引用されているので、そこから旧王本未収の趙次公注を拾い出すことができる。以下、趙次公注を引用した諸資料を検討し、現存する趙次公佚注の所在を明らかにしたい。

（一）『集注東坡先生詩』前後集

『集注東坡先生詩』前集十八巻、後集七巻は現存する最も早い蘇詩注釈書であり、注釈書の編次は宋版『東坡集』巻一から巻十八までの詩歌部分を前集とし、『東坡後集』巻一から巻七までの詩歌部分を後集とした。五家注本、八家注本及び十家注本があったが、『集注東坡先生詩前集』は巻一から巻四のみが陳揆（一七八〇～一八二五）の『稽瑞楼書目』及び瞿鏞（一七九四～一八四六）の『鉄琴銅剣楼宋金元本書影』、『鉄琴銅剣楼蔵書目録』に著録されており、現在では中国国家図書館に所蔵されている。巻一から巻三は十家注本で、巻四は五家注本である。五家というのは、趙次公、李厚、程縯、宋援、林子仁のことであり、さらに師民瞻、孫倬、胡仔（または胡銓）、傅藻、趙堯卿を加えて十家注になる。五家注と十家注のいずれも趙次公注を主要な注釈として収めており、旧王本に未収の趙次公注を多く保存している。

今、『鉄琴銅剣楼宋金元本書影』に掲げられた『集注東坡先生詩』前集巻一所収の「将往終南和子由見寄」詩・巻四所収の「往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待」詩を旧王本所収二詩における趙次公注との間に見られる異同を比較してみたい。

「将往終南和子由見寄」詩の「我今廢學如寒竽、久不吹之澀欲無。（我今学を廃すること寒竽の如し、

久しく之を吹かずして渋くして無からんと欲す）」句について、十家注では、

趙云、竽吹之則温、不吹則寒。廢學如寒竽言似竽久廢不吹也。（趙云う、竽之を吹けば則ち温かく、吹かざれば則ち寒し。学を廃すること寒竽の如しとは竽の久しく廃せられて吹かれざるに似たるを言うなり。）

とあるが、旧王本（巻十六）ではこの注が削除されている。また、「往富陽新城李節推先行三日留風水洞見待」詩の「知君繫馬巖花落（知る君が馬を繫ぎて巖花落ちるを）」句について、五家注では、「趙云、此句倣杜詩繫馬林花動。（趙云う、此の句杜詩の馬を繫ぎて林花動くに倣う。）」とあり、旧王本（巻一）では、「次公曰、杜詩、繫馬林花動。（次公曰く、杜詩、馬を繫ぎて林花動く。）」とあり、「此句倣」の三文字が削られた。このように、旧王本の編纂者が趙次公注を採録した際には削除したり、省略してしまっていたことがわかる。

『集注東坡先生詩』前集は四巻のみ残るばかりで、後集七巻は伝本が散逸したが、馮応榴の『蘇文忠公詩合注』に引用されたため、その一端を知ることができる。『蘇文忠公詩合注』の「凡例」に、

余所見者、一爲宋刊五家注不全本七卷、五注者、趙云卽次公、李云卽厚、程云卽縯、宋云卽援、新添云卽林子仁。其編次一如七集本、惜只見『後集』、而未見『前集』也。（中略）五家注本之注、

有集百家注本所無者。集百家注本之注、有茅刊、朱刊所無者。今皆擇其可採者補之、所増亦復不少。（余見るところのもの、一は宋刊五家注不全本七巻と為す、五注は、趙云とは即ち次公、李云とは即厚、程云とは即ち縯、宋云とは即ち援、新添云とは即ち林子仁。其の編次は一に七集本の如し、惜むらくは只だ『後集』を見るのみにして、未だ『前集』を見ざるを。（中略）五家注本の注、集百家注本の無きところのもの有り。集百家注本の注、茅刊、朱刊の無きところのもの有り。今皆な其の採るべきものを択びて之を補う、増するところも亦た復た少なからず。）(八)

とあり、馮応榴は宋刊五家注本『集注東坡先生詩後集』七巻を参照し、百家注本に見られない趙次公等の五家注を多く増やしたと述べている。『集注東坡先生詩』の編次は『東坡集』・『東坡後集』と同様であるため、馮応榴が『蘇文忠詩合注』巻三十三に収められている「次韻劉景文西湖席上」詩の題注において、

自此詩起至第四十五巻「答径山琳長老」詩止、五注本、七集本皆在『東坡後集』各巻中。（此の詩自り起めて第四十五巻の「答径山琳長老」詩に至りて止むまで、五注本と、七集本と皆な『東坡後集』各巻の中に在り。）(九)

と五注本が収録する詩歌の範囲を指摘し、さらに当該詩の「二老長身屹兩峰」句の案語において、

以舊王本、茅刊王本他詩參校、知「趙云」者卽次公彦材也。余得『東坡後集』五注本、凡舊王本所無者採録之、另標五注本某云、後皆同。（旧王本、茅刊王本を以て他詩を参校し、「趙云」とは即ち次公彦材なるを知る。余『東坡後集』五注本を得、凡そ旧王本の無きところのもの之を採録し、另に五注本某云と標す、後皆同じ。）[一〇]

と旧王本所収の趙次公注を「王注次公曰」として、五家注所収の趙次公注を「五注本趙云」として区別している。

（二）旧王本

『王状元集百家注分類東坡先生詩』に関しては、第一章、第二章においてすでに触れた。その伝本としては、南宋建安の黄善夫家塾本・万巻堂家塾本・魏仲卿家塾本・泉州市舶司東呉阿老書籍舗本・元建安虞平斎務本堂本・熊氏新綉梓本、さらに朝鮮銅活字本、日本五山版などが多数残されている。ここでは、どのテキストを用いて趙次公注を整理すればよいか、検討する。劉尚栄氏は「『百家注分類東坡詩集』考」において虞平斎務本堂本と比べれば、黄善夫家塾本は多方面において優れているが、誤刊、脱字、文字の転倒などの問題があると指摘した。[一一] また劉氏は

黄本所收諸家注、有虞氏不載或妄加刪節者、今擧一例。巻十四「花」類「寓居定惠院之東雑花滿山有海棠一株士人不知貴也」詩、是蘇軾貶官黄州後、於元豐三年寫成的借花擬人、直抒胸臆、「詞格超逸」（魏慶之語）的傑作。該詩「不待金盤薦華屋」句下、黄本引趙次公注云「言不待金盤盛之、薦於華屋之下」。虞文改作「海棠嬌麗、自有富貴之姿、固不借此」。按黄本中此條注文是趙次公闡釋上句「自然富貴出天姿」句意的、虞本將它移作下句詩的注解、令人莫名其妙。（黄本所収の諸家の注には、虞本（虞平斎務本堂本）に載せていなかったり、いたずらに削除していたりするところがある。ここに、一例を挙げてみよう。巻十四花類の「寓居定恵院之東雑花満山有海棠一株士人不知貴也」詩は蘇軾が黄州に左遷された後、元豊三年に製作した花を人に擬えて率直に自らの思いを述べた「詞格超逸」の傑作である。当該詩の「不待金盤薦華屋」の句について、黄本は次の趙次公注を引いて、「言うこころは、金盤の之を盛り、華屋の下に薦めらるるを待たざるなり」、と。虞本では、これを「海棠嬌麗にして、自ら富貴の姿有り、固より此れに借らざるなり」と改めている。思うに、この注釈は前の句の「自然富貴出天姿」に施した注釈であるが、虞本はそれを下の句の注としている。これでは意味が通らない。）[一二]

と虞本における趙次公注の削除と改竄を指摘している。しかし、劉氏の批判にはまだ検討の余地がある。『四河入海』所収の『翰苑遺芳』に引用される当該箇所の趙次公注は、

海棠嬌麗、以金盤盛之、薦之富貴華屋、所以發揮之也。而後彼自有富貴之姿、雖定惠院之東、不過田家土盆。「不待金盤」、雖其苑舍、不待華屋矣、固不籍此。（海棠嬌麗にして、金盤を以て之を盛り、之を薦むるは富貴の華屋、発揮する所以なり。而るに後彼は自ら富貴の姿有り、定惠院の東と雖も、田家の土盆に過ぎず。「不待金盤」とは、其の苑舍と雖も、華屋を待たず、固より此れに籍からず。）(一三)

であり、「自然富貴出天姿、不待金盤薦華屋」の二句に注釈を加えている。このように見ていくと、黄本と虞本とのいずれも趙次公注から一部のみを要約したことがわかる。また両本が採用した注文の箇所が異なっており、相互に補うことが可能である。さらにもう一例を挙げて両本の関係を見てみよう。同じく花類に収められている「梅花二首」の末尾に黄本には注釈がなく、虞本には、

新添次公、前篇人爲花而賦者、後篇花自言而屬於人者、皆詩人之風致也。「何人把酒慰深幽」花自言也。以無人慰之故「開自無聊落更愁」也。清溪所以浮其落蘂、能送先生到黄州矣。（新添次公に、前篇の人を花と為して賦するもの、後篇の花自ら言いて人に属するもの、皆な詩人の風致なり。「何人か酒を把りて深幽を慰めん」とは花自ら言うなり。人の慰むる無きを以ての故に「開きて自ずから無聊にして落ち更に愁う」なり。清溪　其の落蘂を浮かべて、能く先生の黄州に到るを送る所以なり。）

と二首の詩作を分析する趙次公注がある。

宋末元初に刊行された二種の『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』即ち劉辰翁批点本には、黄本と虞本とには見られない趙次公注がしばしば見られる。当該書の巻十園林類に収められている「和文與可洋州園池三十首」の「天漢台」詩の「此臺試向天文覧、閣道中間第幾星（此の台を試みに天文に向って覧れば、閣道中間第幾星ぞ）」句について市立米沢図書館所蔵の元刊本では、当該詩の次の作品「待月臺」詩の題注に、

次公、前首詩意以臺在楊州之公宇。洋州之水、則漢江以比天漢、其臺以比閣道中星耳。（次公に、前首の詩意台楊州の公宇に在るを以てなり。洋州の水、則ち漢江を以て天漢に比す、其の台を以て閣道中の星に比するのみ。）

とあるが、この注は黄本と虞本及び初期批点本の元建安熊氏本には収録されていない。従って、趙次公注を整理する際には、黄本、虞本及び宋元版増刊校正批点本を相互に参照する必要があるだろう。

（三）『四河入海』

小川環樹・倉田淳之助が大岳周崇の『翰苑遺芳』より施顧注、趙次公注を輯佚し、『蘇詩佚注』とし

て刊行したことは、すでに言及したが、その趙次公佚注の整理には、対象などになお不十分な点がある。以下三点に分けて説明してみたい。

（1）『蘇詩佚注』の「目録」は翁万戈氏旧蔵の宋刊『注東坡先生詩』（現上海図書館蔵）の編次に即している。宋刊『注東坡先生詩』に収録される詩歌の数は巻四十一、四十二の和陶詩一〇七首を除けば二〇〇六首である。和陶詩を収録しない元刊虞平斎務本堂本『王状元集百家注分類東坡先生詩』に収録される詩歌の数は王友勝氏の計算[一四]によれば二一三四首であり、施顧注本前四十巻と比べて一二〇余首多い。従って、趙次公注を輯佚する際に旧王本の編次に即して行うべきであろう。

（2）『翰苑遺芳』では、趙次公注を引用する際、一般的には「次公曰」などと示しているが、注釈者の名を付さない場合がある。『四河入海』巻一紀行類冒頭の「壬寅二月有詔令郡吏分往属県減絶囚犯（中略）作詩五百言、以記凡所経歴者寄子由」詩の題注に、

芳云、仁宗嘉祐六年辛丑先生二十六、授鳳翔府節度判官、明年壬寅二月以府檄行四縣決囚、時鳳翔太守陳希亮也。此長篇敍事之外、到處有所專賦。樓觀等十一題以寄子由、今分類在各部内、此時子由侍老蘇在京。（芳云う、仁宗嘉祐六年辛丑先生二十六、鳳翔府節度判官を授かり、明年壬寅二月府檄を以て四県に行きて囚を決す、時に鳳翔太守は陳希亮なり。此の長篇叙事の外、到る処専ら賦するところ有り。楼観等の十一題を以て子由に寄す、今分類して各部の内に在り、此の時子由老蘇に侍りて京に在り。）[一五]

とあるが、注釈者が示されていない。しかし、施宿『東坡先生年譜』嘉祐七年壬寅条に、

先生在鳳翔。以府檄往寶鷄、郿、虢、盩厔四縣決囚、時鳳翔太守陳希亮公弼也。（先生鳳翔に在り。府檄を以て宝鷄、郿、虢、盩厔の四県に往きて囚を決す、時に鳳翔太守は陳希亮公弼なり。）[一六]

とあることから、「仁宗嘉祐六年辛丑、（中略）時鳳翔太守陳希亮也」は施顧注本より引用されたことがわかる。また、宮内庁書陵部蔵宋版黄善夫家塾刊旧王本の当該詩の欄上に、

趙次公曰、此篇敍事之外、到處有所專賦。樓觀等十一題以寄子由、今分類在各部内、此時子由侍老蘇在京。

と書き込まれている。この書入れを見れば、「此篇叙事之外」以下は趙次公注であることは明らかである。しかし、『蘇詩佚注』では、施宿注と趙次公注のいずれも輯佚されていない。

『翰苑遺芳』に引用される注は一つの注のように見えるが、宮内庁書陵部蔵宋版黄善夫家塾刊旧王本の書き入れを参照すれば、二条の注であることがわかる。『翰苑遺芳』所引の注釈者不明の旧注を識

別するにあたって、書陵部本の資料的価値を強調しておきたい。

（3）『四河入海』は『翰苑遺芳』・『脞説』・『天下白』・『一韓聴書』の四書で構成されており、『蘇詩佚注』は『翰苑遺芳』のみを利用して趙次公注を輯佚したものである。趙次公佚注は、主として『翰苑遺芳』に見えるが、ほかの三書にも少なからず見られる。たとえば「九月十五日観月聴琴西湖示坐客」詩の「哀彈本舊曲」以下の六句について、『脞説』には「次公云、後六句分明是禪也。然則所彈之琴雖舊曲而所聞之時有今昔之異歟。（次公云う、後の六句は分明に是れ禅なり。然らば則ち弾ずるところの琴旧曲と雖も聞くところの時に今昔の異有るか。）」[一七]と『翰苑遺芳』未収の趙次公注を引用している。また佚注の直接の引用ではないが、『脞説』にはしばしば「如次公注則……」「如次公注解則……」のように趙次公注に即しつつ解釈を行い、さらに趙次公注に対する見解を述べる例も見られる。「丙子重九二首」其の一の「惟有黄茆浪、堆壠生坳窊（惟だ黄茆の浪有るのみ、堆壠坳窊を生ず）」句に、「次公、言風吹黄茆、如浪一高一下也。（次公、風の黄茆を吹きて、浪の一高一下するが如きを言うなり。）」[一八]の注に対して、『脞説』では「次公一高一下之注、蓋以堆壠為一高、坳窊為一下也。（次公の一高一下の注は、蓋し堆壠を以て一高と為し、坳窊を一下と為すなり。）」[一九]と趙次公注の解釈をさらに深めている。

万里集九の『天下白』は、『翰苑遺芳』には見られない、あるいは注釈者が示されていない趙次公注を多く引用している。たとえば、「次韻江晦叔二首」其の一の

幸與登仙郭　幸わくは与に仙郭に登ぜんとし
同依坐嘯成　同に坐嘯成に依らん
小樓看月上　小楼に月の上るを見
劇飲到參横　劇飲して参横に到る

の四句について、

白云、（前略）又次公注曰、兩句之意以郭林宗比江晦叔。「幸與」、則先生言與之竝也。「坐嘯成」以言太守霍大夫也、故言「同依」、此交代以前也。蓋用引下句飲酒耳。「月上」、則黄昏之時。「參横」、則三更之後。**『遺芳』無次公注、故載之。『脞說』之解取顧氏之題注、上句指器之、下句指晦叔。蕉雪之解亦用之。某謂、次公注易解。雖然、北禪云非乎。**（白云う、（前略）又た次公注に曰く、両句の意郭林宗を以て江晦叔に比す。「幸与」、則ち先生之と並ばんことを言うなり。「坐嘯成」は以て太守霍大夫を言うなり、故に「同依」と言う、此れ以前を交代するなり。蓋し用て下句の飲酒を引くのみ。「月上」、則ち黄昏の時。「参横」、則ち三更の後。『遺芳』に次公の注無し、故に之を載す。『脞說』の解　顧氏が題注を取り、上の句は器之を指し、下の句は晦叔を指す。蕉雪（惟肖得巌）の解も亦た之を用う。某謂う、次公の注解き易し。然りと雖も、北禪（瑞溪周鳳）は非なりと云う。）[二〇]

と『翰苑遺芳』に見られない趙次公注を引用して、趙次公注と施顧注に対する見解をも述べている。

また屢々『詩林広記』や『苕渓漁隠叢話』より趙次公注を輯佚し、注釈における文字の異同について指摘している。「月夜与客飲酒杏花下」の題注を例として挙げる。

『詩林廣記』後集第三、『（東坡）詩話』云、僕在徐州、王子立、子敏皆館於官舍。蜀人張師厚來過、二王方年少、吹洞簫飲酒杏花下、予作此詩。明年、予謫黄州、對月獨飲、嘗有詩云、去年花落在徐州、對月酣歌美清夜。今年黄州見花發、小院閉門風露下。蓋憶與三王飲時也。張師厚久已死、今年子立復爲古人、哀哉。西蜀趙次公彦材云、此篇不使事、語亦新、古所未有迨。涪翁所謂不食煙火食之語也。爲有數字異故引之。『漁隱叢話』前集四十又引此等詩話、「薄酒」作「酒薄」、『詩林廣記』亦作「酒薄」（『詩林広記』後集第三、『（東坡）詩話』に云う、僕徐州に在りしとき、王子立、子敏皆な官舎に館す。蜀人の張師厚来過す、二王方に年少にして、洞簫を吹きて杏花の下に飲酒す、予此の詩を作る。明年、予黄州に謫せられ、月に対して独り飲む、嘗て詩有て云う、「去年花落ちて徐州に在り、月に対して酣歌し清夜を美す。今年黄州花の発くを見、小院門を閉ざす風露の下。と。蓋し二王と飲みし時を憶うなり。張師厚久しく已に死し、今年子立復た古人と為る、哀しいかな。西蜀の趙次公彦材云う、此の篇 事を使わず、語亦た新、古の未だ迨ぶところ有らざるなり。涪翁謂うところの煙火食を食らわざるの語なり。と。数字の異なること有るが

為の故に之を引く。『漁隠叢話』前集四十又た此れ等の詩話を引き、「薄酒」を「酒薄」に作る、『詩林広記』も亦た「酒薄」に作る。）(二二)

『一韓聴書』における趙次公佚注の引用は、主として巻十一、十二に収められている書画類の作品に集中しており、詳細な注釈がしばしば見られ、蘇軾の題画詩を研究する上で貴重な資料と考えられる。「書王定国所蔵『煙江畳嶂図王晋卿画』」詩について、『一韓聴書』では、

一云、次公曰、江上之峻山兮、鬱崎巘而不極。雲爲峰兮煙爲色、欻變態兮心不識。「山耶雲耶」言疑其帶煙雲。「煙空雲散山依然」言稍近之一疊、見其無煙雲在畫、有煙雲之山則慘憺、無煙雲之山則明朗、所以分遠近也。自「但見兩崖蒼蒼暗」至「漁舟一葉江呑天」蓋又近之一疊、所以畫之形状可見、此眞識畫者矣。今言桃花流水、則逢桃林畫水源之謂也。「在人世」、則漁父從山口入而見之々謂也。「武陵豈必皆神仙」則避秦時亂而如外人之謂也。「雖有去路尋無縁」則尋向所誌遂不復得路之反也。此篇三段、大類杜甫「古栢行」云々。舊本錯編在成都詩中、本是賦夔州之古栢、其第一段所謂言夔之孔明廟前。第二段言成都先主廟中有武侯同閟宮之祠堂、其庭亦有栢。第三段併言材大者皆難於擧用。今此詩第一段言所畫之景、第二段言樊口之眞景、第三段又終之以畫之景、卽不知其在何處、而樊口之景身所親對、乃有思往以爲歸休之地矣。「招我」之言篇字則招隱詞招侍之義也。謂之歸來篇、以往而對者、昔之景爲歸休之地而已、即非淵明「歸去來」之事、謫居黄州

五年、而黄州對武昌也。樊口卽其地矣。「春風遙江天漠漠、暮雲卷雨山娟娟。丹楓飜鴉伴水宿、長松落雪驚晝眠」眞言武昌之景物也。（一は云う、次公曰く、江上の峻山、鬱として崎嶮として極まらず。雲峰を為し煙色を為す、欻態を変じて心識らず。「山か雲か」とは其の煙雲を帯ぶるかと疑うを言う。「煙空しく雲散じて山依然たり」とは稍近の一疊を言うなり、其の煙雲の無きを画に在るを見、煙雲の山有れば則ち惨憺たり、煙雲の山無ければ則ち明朗たり、遠近を分かつ所以なり。「但だ見る両崖蒼蒼として暗きを」自り「漁舟一葉江天を呑む」に至りて蓋し又近の一疊、画の形状を見るべき所以なり、此れ真に画を識るものなり。今桃花流水を言うは、則ち桃林に逢いて水源を画くの謂いなり。「人世に在れば」、則ち漁父山口従り入りて之を見るの謂いなり。「武陵豈に必ず皆な神仙なり」は則ち秦時の乱を避けて外人の如きを謂うなり。「去路有りと雖も尋ぬるに縁無し」とは則ち向に誌すところを尋ぬるも遂に復た路を得ざるの反るなり。此の篇三段、大いに杜甫の「古栢行」云々。旧本錯編して成都の詩中に在るに類す、本より是れ夔州の古栢を賦す、其の第一段謂うところの夔の孔明廟前を言う。第二段は成都の先主廟中に武侯の閟宮を同じくするの祠堂有り、其の庭に亦た栢有るを言うなり。第三段は併せて材の大なるもの皆な挙げ用いらるるに難きを言う。今此の詩の第一段は画ところの景を言う、第二段は樊口の真景を言う、第三段は又た之を終うるに画の景を以てす、即ち其の何処に在るを知らざるも、樊口の景身の親ら対するところにして、乃ち往きて以て帰休の地と為す思い有り。「招我」の篇の字を言うは則ち招隠詞の招侍の義なり。之を帰来篇と謂い、往を以てして対するは、昔の景を帰休の地と為すの

み、即い淵明の「帰去来」の事に非ざるも、黄州に謫居せらるること五年にして、黄州武昌に対するなり。樊口即ち其の地なり。「春風江を揺揺らし天漠漠、暮雲雨を巻き山娟娟。丹楓飜鴉水宿に伴い、長松落雪晝眠を驚かす」とは真に武昌の景物を言うなり。）[一二]

と詳細な趙次公注を引用して、「三疊」を一々分析したうえで、杜甫「古栢行」詩との類似性を指摘し、詩全体の段落を分けて、その構造を明らかにした。また各詩句に関する説明が簡潔かつ明瞭で、「帰来篇」に関する見解が優れている。

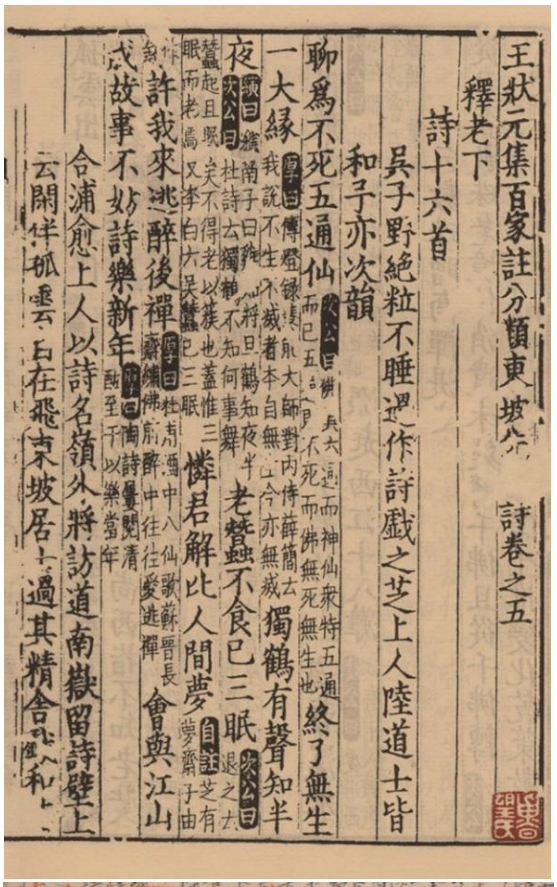
以上を見てみると、趙次公注であることを補足し、校勘し、検討している。これらの情報は蘇詩趙次公単注本を復元する際に注記として採用すべきであろう。

（四）宮内庁書陵部蔵宋刊黄善夫家塾本『王状元集百家注分類東坡先生詩』の書入れ

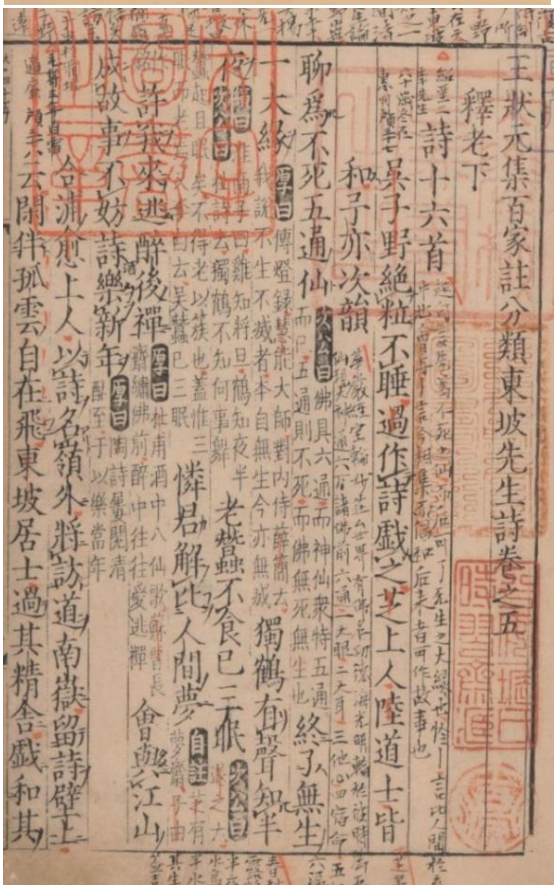
宮内庁書陵部には宋刊浙本と言われる『王状元集百家注分類東坡先生詩』が所蔵されており、「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」書誌書影・全文影像データベースの公開によって容易に見ることが出来る。このテキストの書誌情報については当該データベースに掲載されているが、[一三]版本の系統を指摘していない。その書誌情報が述べるように、確かにテキストの字形などは南宋刊浙本のようにも見えるが、中国国家図書館所蔵の旧王本の中で最もよいテキストと称される黄善夫家塾本と比べることにより、二書の内容、版式及び字形などが明らかに一致しており、同一系統のテキストと考えられることがで

きる。（図版を参照）

・中国国家図書館蔵本


王狀元集百家註分類東坡先生詩卷之五
釋老下
詩十六首
吳子野絶粒不睡過作詩戲之芝上人陸道士皆和子亦次韻
聊爲不死五通仙 次八曰佛具六通而神仙衆特五通而已五通則不死而佛無死無生也 終了無生一大緣 尊曰傳燈錄慧能大師對內侍薛簡云我說不生不滅者本自無生今亦無滅 獨鶴有聲知半夜 次八曰 次八曰杜詩云獨鶴不知何事舞 老蠶不食已三眠 次八曰退之云蠶起且驚矣不得老以蔟也蓋惟三眠而老焉又李白云吳蠶已三眠 憐君解比人間夢 自注芝有夢齋子由詩 許我來逃醉後禪 尊曰杜甫酒中八仙歌蘇晉長齋繡佛前醉中往往愛逃禪 會與江山戍故事不妨詩樂新年 尊曰陶詩曩閱清酤至千以樂當年
合浦愈上人以詩名嶺外將訪道南嶽留詩壁上云閑伴孤雲自在飛東坡居士過其精舍戲和其

・宮内庁書陵部蔵本


王狀元集百家註分類東坡先生詩卷之五
釋老下
詩十六首
吳子野絶粒不睡過作詩戲之芝上人陸道士皆和子亦次韻
聊爲不死五通仙 次八曰佛具六通而神仙衆特五通而已五通則不死而佛無死無生也 終了無生一大緣 尊曰傳燈錄慧能大師對內侍薛簡云我說不生不滅者本自無生今亦無滅 獨鶴有聲知半夜 次八曰 次八曰杜詩云獨鶴不知何事舞 老蠶不食已三眠 次八曰 憐君解比人間夢 自注芝有夢齋子由詩 許我來逃醉後禪 尊曰杜甫酒中八仙歌蘇晉長齋繡佛前醉中往往愛逃禪 會與江山戍故事不妨詩樂新年 尊曰陶詩曩閱清酤至千以樂當年
合浦愈上人以詩名嶺外將訪道南嶽留詩壁上云閑伴孤雲自在飛東坡居士過其精舍戲和其

宮内庁書陵部蔵本の書誌情報に「巻尾「王狀元集百家注分類東坡先生詩巻之幾」（巻六至八、二十四は「注」を「註」に作り、巻二十五「分類」二字なし）」とあり、中国国家図書館蔵本と同様である。また前述のように劉尚栄氏は黄本には誤刊、脱字、文字の転倒などの問題があると指摘している。筆者の調査によれば、テキストにおける誤刊、脱字、文字の転倒の箇所も二書は一致している。しかし、宮内庁書陵部蔵本では、これらの問題が墨筆或いは朱筆によって修正されている。中国国家図書館蔵

本の巻一から四、九から十二の八巻については他本から配補されており、宮内庁書陵部蔵本と比べて最善のものとは言い難い。さらに宮内庁書陵部蔵本の匡郭外の余白や行間には詳細な書入れが記されている。それは、主として趙次公佚注、施顧注を写したものであり、その資料的価値は極めて高いものと言える。

宮内庁書陵部蔵の黄善夫家塾本旧王本の書き入れにおける趙次公佚注の引用は数多く残されており、「集注趙云」、「趙云」「次公云」のように注釈者名を示す場合もあれば、注釈のみを引用し注釈者名を示さない場合もある。また本文の趙次公注の後に直接に書き込むこともある。『集注』は、即ち前述の『集注東坡先生詩』であり、「集注補注」[二四]を引用していることから、『集注東坡先生詩』が十家注本によっていることは間違いない。そして、これは『集注東坡先生詩』が日本に伝来していたことの証左と看做せよう。宮内庁書陵部蔵本は、最もよい旧王本のテキストに現存する最も古い趙次公注が集められている。さればこそ、蘇詩趙次公単注本をある程度復元することが可能なのである。

第二節　蘇詩趙次公単注本の輯校方法と試み

本節では、蘇詩趙次公単注本の輯校方法について検討を加え、旧王本巻十三所収の「器用」類の十首の作品を例として輯校を試みる。

（一）目次・底本の選定

小川環樹・倉田淳之助の『蘇詩佚注』は宋刊施顧注本の目録に即して行われたが、前節においてすでに趙次公注が付される作品については網羅できないことを指摘した。蘇詩趙次公単注本が本来どのような編次であったのかは不明である。趙次公注を現在最も多く収めているのは旧王本であり、それを編年順に改めることは非常に困難である。従って、旧王本の編次に即して復元作業を行うのが最も便利であり、宮内庁書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』を底本とし、中国国家図書館蔵黄善夫家塾本の編次に即すべきである。

（二）諸本の略称

【底本】、宮内庁書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』

【集注甲本】、中国国家図書館蔵『集注東坡先生詩』前集巻一至四

【集注乙本】、宮内庁書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』の書入れ。

【集注丙本】、馮応榴『蘇文忠公詩合注』所引の『集注東坡先生詩』後集

【類注甲本】、元虞平斎務本堂本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』（四部叢刊影印本）

【類注乙本】、中国国家図書館蔵元建熊氏本『王状元集百家注分類東坡先生詩』

【類注丙本】、宮内庁書両部蔵建安魏忠卿刊本『王状元集百家注分類東坡先生詩』

【類注丁本】、市立米沢図書館蔵元刊本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』

【類注戊本】、国立国会図書館蔵元廬陵□□書堂刊本『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』

【類注己本】、京都大学附属図書館蔵五山版『王状元集百家注分類東坡先生詩』
【類注庚本】、国立国会図書館蔵朝鮮版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』
【芳本】『四河入海』所収の『翰苑遺芳』
【脞本】『四河入海』所収の『脞説』
【白本】『四河入海』所収の『天下白』
【一本】『四河入海』所収の『一韓聴書』

以下、黄善夫家塾本巻十三冒頭の「器用」類の十首の作品を例とし、底本及び【集注乙本】で発見した趙次公注を柱として輯校作業を行った。趙次公の注で底本及び【集注乙本】で見られないものは他本によって補う。また、注釈者（趙次公）を示すものを□で囲み、趙次公である可能性の高いものを念のために集めることとする。なお、他本と比べて文字の異同がある時、または、注釈者を示さない注を趙次公注とする場合、五山禅僧らが趙次公注に対する検討、及び解説を要する箇所について、筆者の【按】で説明する。

目次

器用

詩十首

次韻柳子玉二首地爐紙帳

答胡穆秀才遺古劒器

無錫道中賦水車

以雙刀遺子由有詩次韻

鐵拄杖

觀杭州鈐轄歐育刀劒戰袍

送竹几與謝秀才

狄詠石屏

和張耒高麗松扇

次韻柳子玉二首

地爐

細聲蚯蚓發銀瓶、擁褐横眠天未明〔一〕。
衰鬢鑷殘敧雪領、壯心降盡倒風旌〔二〕。
自稱丹竈錙銖火、倦聽山城長短更。〔三〕
聞道牀頭惟竹几、夫人應不解卿卿〔四〕。

『趙注』

〔一〕【集注乙本】白樂天詩、月斜天未明。【按】此詩在施注本巻四、【集注乙本】中凡施顧注不収者多為次公注、故採之以備考、後皆同。

〔二〕次公『蘇秦傳』齊王曰、寡人心將搖搖如縣旌。【集注乙本】、『詩』、既見君子、我心則降。

〔三〕【脞本】此以下二句、蓋言柳子玉於地爐或棟丹、候火時終夜聽更漏也。刻謂、**如次公解則打鼓之數多謂之長更、數少謂之短更。**如「初汲江煎茶」詩有「臥聽山城長短更」之句。『楊誠齋詩話』評此句云「山城更漏無定、長短二字有無窮之味。」**如此評則與次公解相違、未知孰是。如懶雲之解則皆同次公。**【按】、此處次公原注已佚、據【脞本】、【一本】可知其大意。刻為刻楮子之略稱、瑞溪周鳳號。嚴中周噩（一三五九～一四二八）、號懶雲子、室町初期臨濟宗夢窗派禪僧、春屋妙葩法系、嘗師

從義堂周信學習漢詩文。歷任相國寺、天龍寺、南禪寺主持、笑雲清三在『四河入海』中將其列入「日本坡詩講談師」。

〔四〕【集注乙本】、腹聯以下子玉之妻新死故云。自云倦、又云惟竹几也。

紙帳

亂文龜殼細相連、慣臥青綾〔一〕恐未便。
潔似僧巾白氎布、煖於蠻帳紫茸氈。
錦衾速卷持還客、破屋那愁仰見天〔二〕。
但恐嬌兒還惡睡、夜深踏裂不成眠。

『趙注』

〔一〕【集注乙本】趙註 青綾帳、漢制以贈郎官。

〔二〕次公 退之寄盧仝詩「破屋數間而已矣」。又『小説』有縣令求雨於董君異、君異仰視其屋曰、貧家屋皆見天、不可以得雨如何。【按】「不可以得雨如何」之「不可以」與【類注甲本】同。底本作「不所以」。【類注乙本】、【類注丁本】、【類注戊本】、【類注己本】、【類注庚本】皆作「不知所以」。

胡穆秀才遺古銅器似鼎而小。上有兩柱可以覆而不蹶、以爲鼎則不足、疑其飲器也。胡有詩答之。

隻耳獸齧環、長脣鵝擘喙。
三趾下鋭春蒲短、兩柱高張秋菌細。
君看飜覆俯仰間、覆成三角飜兩髻〔一〕。
古書雖滿腹〔二〕、苟有用我亦隨世。
嗟君一見呼作鼎、纔注升合已漂逝。
不如學鴟夷、盡日盛酒眞良計。

『趙注』

〔一〕 次公 「神仙傳」、上元夫人三角髻。「古樂府」、何當垂兩髻、團圓雲間鳴。

〔二〕 次公 趙壹詩、文籍雖滿腹、不如一囊錢。

無錫道中賦水車

飜飜聯聯銜尾鴉、犖犖確確蛻骨蛇〔一〕。
分畦翠浪走雲陣、刺水綠鍼抽稻牙。
洞庭五月欲飛沙、鼉鳴窟中如打衙。
天公不見老翁泣〔二〕、喚取阿香推雷車。

『趙注』

〔一〕 次公 江浙間人目水車爲龍骨車。

〔二〕【集注乙本】 趙注 「天曷不見老翁泣、喚取阿香推雷車」、此蓋雲漢卒章、瞻仰昊天、曷惠其寧之義。老翁、老農也。洞庭而飛沙、鼉鳴於窟中、旱甚矣。不得已用水車、故老翁泣。【按】、【芳本】亦引此注、略有小異。又【按】、【類注甲本】新添次公、老翁老農也。旱甚矣、用水車、故老翁泣。

以雙刀遺子由有詩次韻

寶刀匣不見、但見龍雀鐶。
何曾斬蛟蛇〔一〕、亦未切琅玕。
胡爲穿窬輩、見之要領寒。
吾刀不汝問、有愧在其肝〔二〕。
念此力自藏、包之虎皮班。
湛然如古井、終歲不復瀾。
不憂無所用、憂在用者難。
佩之非其人〔三〕、匣中自長嘆。
我老衆所易、屢遭非意干〔四〕。
惟有王玄通、堦庭秀芝蘭。

知子後必大、故擇刀所便。
屠狗非不用、一歳六七刓。
欲試百煉剛〔五〕、要須更泥蟠。
作詩銘其背〔六〕、以待知者看。

『趙注』

〔一〕 次公 王粲「刀銘」云「陸剸犀兕、水截鯨鯢」。【集注乙本】、漢高紀、抜劍斬蛇。
〔二〕 次公 『詩案』曽供此詩。自「胡爲穿窬輩」至此云以詆當時邪佞之人耳。
〔三〕 次公 吕虔有佩刀、工相之、以爲必登三公、可服此刀。虔以遺王祥謂之曰、苟非其人、刀必爲害。
〔四〕 次公 晉衞玠曰、非意相干可以理遣。
〔五〕 次公 魏武論刀有云、所謂百鍊利器、以辟不祥。
〔六〕 次公 『家語』孔子觀周遂入太祖后稷之廟、古階之前有金人焉、參緘其口而銘其背。

鐵拄杖并序

柳眞齡字安期閩人也。家寶一鐵柱杖、如柳栗木、牙節宛轉天成、中空有簧行輒微響。云得之浙中。相傳王審知以遺錢鏐、鏐以賜一僧、柳偶得之以遺餘。作此詩以謝之。〔一〕

柳公手中黒蛇滑、千年老根生乳節。

忽聞鏗然爪甲聲、四座驚顧知是鐵。
含簧腹中細泉語、迸火石上飛星裂。
公言此物老有神、自昔閩王餉吳越。
不知流落幾人手〔二〕、坐看變滅如春雪。
忽然贈我意安在、兩脚未許甘衰歇。
便尋轍迹訪崆峒〔三〕、徑度洞庭探禹穴。
披榛覔藥採芝菌〔四〕、刺虎鏦〔五〕蛟擉〔六〕蛇蝎。
會教化作兩錢錐〔七〕、歸來見公未華髮。
問我鐵君無恙否、取出摩挲向公説〔八〕。

『趙注』

〔一〕次公　王審知字信通、光州固始人也。唐亡、梁太祖加拜審知中書令、封閩王、升福州爲大都督。

〔二〕【集注乙本】【芳本】、自五代至元豐中、幾百七八十年。【按】、【集注乙本】【芳本】皆未提及次公、檢施顧注本未有此注、故採録存疑。

〔三〕次公　『老子』、善行無轍迹。『莊子』載黄帝立爲天子十九年、令行天下。聞廣成子在於崆峒之上、故往見之。

〔四〕次公　晉趙景眞「與嵇茂齊書」云、涉澤尋蹊、披榛覔路。

〔五〕、【集注乙本】【芳本】、趙注 鏦與摐同撞也。『史記・呉王濞傳』、東越使人鏦殺呉王。注、謂以矛戟撞之也。鏦、楚江反。『方言』、矛、呉揚・江淮・南楚・五湖之間謂之鋋、其柄謂之矜、音勤。『史記』欲鏦加以矛。『方言』、戟謂之鏦。【按】、【集注乙本】【芳本】抄錄該注互有長短、故合參二本加以輯錄。

〔六〕【集注乙本】【芳本】擉、初朔反、指也。【按】、存疑。

〔七〕【芳本】【集注乙本】、次公不如兩錢錐者、兩錢所買之針錐也。【按】、【芳本】無「不如兩錢錐者」六字。

〔八〕【類注甲本】、次公『後漢』薊子訓傳、人於長安東霸城遇之、與一老翁共摩挲銅人。相謂曰、適見鑄此而已、近五百歳矣。又劉禹錫「淮陰行」曰「船頭大銅環、摩挲光陣陣矣。【集注乙本】早晩便風來、沙頭眼認此」、於摩挲鐵拄杖爲近矣。

觀杭州鈐〔一〕轄歐育刀劒戰袍

青綾衲衫暖襯甲、紅線勒帛光遶脅。
禿襟小袖雕鶻盤、大刀長劒龍蛇插。〔二〕
兩軍鼓譟屋瓦墜〔三〕、紅塵白羽紛相戛。
將軍恩重此身輕、笑履鋒鋩如一掐。
書生只肯坐帷幄、談笑毫端弄生殺。

叫呼擊鼓催上竿、猛士應憐小兒黠。
試問黄河夜偷渡、掠面驚沙寒霎霎。
何如大艦日高眠、一枕清風過苕霅。

『趙注』

〔一〕【集注乙本】【芳本】、鈐、音呼潭、居廉二切、耕類也。車轄也。【按】、存疑。【集注乙本】無「車轄也」三字。

〔二〕【集注乙本】【芳本】、次公 上兩句實用其事。「大刀長劒龍蛇插」則史洪肇云、長槍大劒之變、坐帷幄而徑道實事、而語新奇矣。

〔三〕次公 漢光武昆陽之戰、會大雷風、屋瓦皆飛。

送竹几與謝秀才

平生長物擾天眞、老去歸田只此身。
留我同行木上坐、贈君無語竹夫人〔一〕。
但隨秋扇年年在〔二〕、莫鬬瓊枝夜夜新。
堪笑荒唐玉川子、莫年家口若爲親。

『趙注』

〔一〕【芳本】【集注乙本】趙注 山谷日休、辟日閣膝之器、非夫人之職、更名青奴。『金樓子』曰、有人讀書握卷卽睡者、梁人號書卷爲黃妳、言怡神養性、如妳媪也。趙次公「和寶山晝睡」詩「可須黃妳爲閑伴、不怕青奴能惱人」。或者謂秋扇出處無「年年在」三字、而先生用對「夜夜新」、則出處瓊枝連文亦有「夜夜滿、朝朝新」焉。次公謂、既變「朝朝新」爲「夜夜新」矣。雖不成全出則以「年年在」對之爲無害。劉希夷詩「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」、其「年年在」亦倣希夷「年年似」之勢矣。不得謂之不工也。或又曰、盧仝詩以「蚊虻當家口、草石是親情」、而先生通言之、固有義矣。而言及之者何哉。次公謂、蓋由以竹几爲寢器、正欲安眠而與蚊虻親、斯可笑矣。

〔二〕次公 班婕妤有團扇詩云「常恐秋節至、涼飈奪炎熱。棄捐篋笥中、恩情中道絶」、今反言之也。

狄詠石屏

霏霏點輕素、眇眇開重陰。
風花亂紫翠〔一〕、雪外有煙林。
雪近勢方壯、林遠意殊深。
會有無事人、支頤識此心。〔二〕

『趙注』

〔一〕次公杜詩、千峰横紫翠。

〔二〕【芳本】次公此篇直書石屏上形象耳。蓋有雪之状、有陰慘之状、有花有林也。「霏霏」以言雪之散、「眇眇」以言陰氣之微、「支頤」、熟語也。舊注引「漁父」云々。【按】【集注乙本】亦引此注、脱「有雪之状」之「有」字、無「舊注引「漁父」云々」。又【按】、【白本】趙次公云、此篇直書石屏上形象耳、祥見『遺芳』。『續翠』云、上句言雪也。『脞』云、上句言風花也。『續翠』同次公注、北禪破次公注、以重陰句爲雪。某謂、石屏自然紋、不可名雪、不可名花、第一、二句相疑而云有物霏霏、然而其體甚輕、其色甚素、眇眇焉現寒空重陰之間。第三句言擧頭見之、則飛花亂點紫翠歟。第四句言又仔細着眼、則急雪之外有帶煙之林、以此句發露第一、二句之大疑團、故第五第六句只擧雪與林、分明論之而已。

和張耒高麗松扇

可憐堂堂十八公、老死不入明光宮〔一〕。
萬牛不來難自獻、裁作團團手中扇。〔二〕
屈身蒙垢君一洗、掛名君家詩集裏。
猶勝漢宮悲婕妤、網蟲不見乘鸞子。〔三〕

『趙注』

〔一〕次公、漢武帝太初四年、秋起明光殿。師古曰、『三輔黄圖』云、在城中近桂宮。「元后傳」曰、成都侯商嘗病、欲借明光宮避暑。【集注乙本】、初兩句指言末也。「堂堂」、谷儀咸也。『論語』、堂々乎是也。十八公取何人名之呼稱者言之丁國夢云々。卽取以言松、故得用堂々字引之。松而入明宮則爲棟梁矣。不入光明宮則老見兄、其地之松扇而言裁製亦制之謂也。既爲扇在人手、則亦蒙垢矣。而可以一洗者以張耒之有詩也。趙注。

〔二〕【集注乙本】、王雲『鷄林誌』云、高麗松扇揭松膚柔者緝成文、如稷心、亦染紅間之。或言水柳皮也。

〔三〕次公『漢書』云、孝成帝、班婕妤帝初大幸、後趙飛燕寵盛、婕妤失寵遂作秋扇詩云「新裂齊紈素、鮮潔如霜雪。裁成合懽扇、團團似明月。出入君懷袖、動搖微風發。常恐秋節至、涼飈奪炎熱。棄捐篋笥中、恩情中道絶」。後江文通擬班婕妤曰「紈扇如圓月、出自機中素。畫作秦王女、乘鸞向煙霧」。而劉禹錫「團扇歌」則曰「秋風入庭樹、從此不相見。上有乘鸞女、蒼蒼網蟲遍」。先生使事曲折如此。

注

（一）王蓉貴・向以鮮『後村先生大全集』巻一百、四川大学出版社、二〇〇八年。

（二）林継中『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂版）、上海古籍出版社、二〇一二年、「前言」第三頁。

（三）王象之『輿地紀勝』巻一四六（中華書局、一九九二年、三九四八頁）の成都府路・嘉定府・人物に趙次公が選ばれ、注に「注杜陵詩、解東坡詩」とある。

（四）『蘇詩佚注』、跋。

（五）何沢棠氏は「論『蘇詩佚注』的趙次公注」（『華北電力大学学報』（社会科学版）二〇一二年第一期、九十七～一〇二頁）、及び「論蘇詩趙次公注的詩学闡釈」（『北京工業大学学報』（社会科学版）二〇一二年第一期、七十四～七十八頁）において、蘇詩趙次公注の特徴を述べている。

（六）中華書局、一九九二年、三九四八頁。

（七）林継中『趙次公杜詩先後解輯校』、上海古籍出版社、一九八四年初版、二〇一二年修訂版。

（八）蘇軾著、馮応榴輯注、黄任軻・朱懐春校点『蘇軾詩集合注』、上海古籍出版社、二〇〇一年、二六三九～二六四五頁。

（九）『蘇軾詩集合注』、一六七一頁。

（一〇）『蘇軾詩集合注』、一六七二頁。

（一一）劉氏は「南宋建安（今福建建甌）黄善夫家塾所刻『百家注分類東坡先生詩』二十五巻、為現存類注蘇詩的

最早刻本。（中略）今与通行的虞平斎務本堂元刻本之影印本対勘、可知黄本諸方面更為優勝。（中略）黄本也有建安本共同的弊病。一曰誤刊…二曰脱漏…三曰誤倒錯乱」と述べている。（『蘇軾著作版本論叢』、巴蜀書社、一九八八年、五十四～八十六頁。）

（一二）『蘇軾著作版本論叢』、七十～七十一頁。

（一三）『四河入海』第七冊、三一二頁。

（一四）『蘇軾研究史稿』（修訂版）、中華書局、二〇一〇年、二〇八頁。

（一五）『四河入海』第一冊、六六～六七頁。

（一六）王水照編『宋人所撰三蘇年譜彙刊』、上海古籍出版社、一九八九年、三十四頁。

（一七）『四河入海』第六冊、七七八頁。

（一八）黄善夫家塾本『王状元集百家注分類東坡先生詩』巻六。

（一九）同右掲注（一七）。

（二〇）『四河入海』第十冊、一二八～一二九頁。

（二一）『四河入海』第五冊、八三四～八三五頁。

（二二）『四河入海』第六冊、三七九～三八〇頁。

（二三）http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007105（二〇一七年八月二十二日）

（二四）第一冊巻二8b、「維摩像唐恵之塑在天柱寺」詩。

第五章　趙次公「和蘇詩」輯考

はじめに

南宋初期には「千家注杜」「百家注蘇」という言葉から見られるように、杜甫や蘇軾の詩歌に対する注釈が流行したことがわかる。趙次公は「千家」のなかの一人でもあれば、「百家」のなかの一人でもあり、当時の文学界の最前線で活躍した文人と言ってよい。また、彼は名門出身の邵溥といった上流士大夫や蜀地の著名な詩人である韓駒（一〇八〇～一一三五、字子倉）とも交遊があったことから、[一]当時、趙次公の論説もかなり影響力があったと考えられる。

南宋初期の詩壇の主流は江西詩派であった。その詩壇で活躍していた蜀地の詩人は、韓駒を除けばその他はあまり知られていない。たとえば、祝尚書氏の『宋代別集叙録』（一）巻十五から巻十九の五巻には、[二]南宋前期の文人九十五人、百種の別集を著録しているが、そのうち韓駒・王灼・郭印・蘇籀・馮時行・李石・李流謙の七人のみが蜀の文人である。そのうえ、彼らの詩文作品は、その多くが散逸してしまい、従って、南宋初期の詩壇全体を把握し難い現状にある。従って、蜀出身の文人の詩文を輯佚・整理し、基本資料を作成することは重要な意味を持つ。趙次公は、杜甫や蘇軾の詩歌に注釈を加えたことでよく知られているが、文学作品はそれほど世に残っていないため、文学者としての趙次公は従来論じられてこなかった。筆者は『四河入海』から趙次公の「和蘇詩」[三]を四十八首検出し得た。

そこで本章では、今回検出し得た作品を元にその数、性質、創作時期、流伝、詩歌特色、創作動機、文献的意味および「和蘇詩」の類別・詩風といった点について考察を行う。

第一節　趙次公の文学作品

現存する趙次公の著作のほとんどはその杜詩注と蘇詩注であり、詩文作品の流伝は極めて少ない。先人がすでに検出し得ている作品は以下のものである。文章は「杜詩先後解自序」(四)、「杜工部草堂記」「黄鹿真人碑文」(五)の三篇のみ残されており、詩歌は「和東坡海棠」「和東坡定惠院海棠」の二首(六)および杜甫の詩を真似た「登岳陽楼」(七)「春日」(八)詩との四首しか見られない。従来の蔵書目録では趙次公の詩文集が著録されていないため、彼が一体どれ程の詩文を作ったのかについては不明である。しかし、趙次公「和蘇詩」は纏まった形で輯佚することが可能である。

『四河入海』巻一之一に「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩注氏」(九)を見ると、そこには蘇詩の注釈者九十六人を並べ、さらに九十六人のなかからとりわけ重要な注釈者を七名選出して簡略な説明が加えられている。七名の注釈者のうちに趙次公も挙げられており、彼の氏名の下に「和坡詩」という注がある。この注釈は蘇東坡の詩歌に唱和したことを示すが、蘇詩を全部唱和したのかそれとも部分的に唱和したのかは詳らかではない。しかし、林希逸の「題徐少章和注後村百梅詩」の記述によると、趙次公は蘇軾のすべての詩に唱和したことがわかる。

在昔、聞人有注前人詩者、有和前人詩者、未有且注且和者。獨趙次公以坡老爲然。數十卷詩和盡、且注又特祥。此人所難能也。（在昔、人の前人の詩に注する者あり、人の前人の詩に和する者あるを聞くも、未だ且つ注し、且つ和する者あらず。独り趙次公のみは坡老を以て然りと為す。数十巻の詩に和し尽くして、且つ注も又た特に詳らかなり。此れ人の能くし難き所なり。）(一〇)

本章において『四河入海』から検出した四十八首の作品を通覧してみると、詩型・主題ともに明らかな一貫性は見られない。このことがかえってその証左になるであろう。趙次公「和蘇詩」はその杜詩注と蘇詩注と同じように多くが散逸したということなる。杜詩注については、林継中氏は『杜詩趙次公先後解輯校』において優れた輯佚作業をなした。蘇詩注については、旧王本および『蘇詩佚注』に多く見られる。従って「和蘇詩」を輯佚して研究することは重要な意味を有している。

『四河入海』から検出した趙次公「和蘇詩」は第一巻から最後の第二十五巻までに分布しており、詩歌の詩体と主題も明らかな特徴が見られないことから、趙次公「和蘇詩」の数は相当な量に達したと考えられる。

趙次公は蘇軾のすべての詩歌に唱和したが、具体的な数は不明である。これを究明するには、三つの方法がある。

(一)、趙次公が蘇詩を注釈する際に用いた底本を明らかにし、底本所収の詩歌数を以て推算する。
(二)、趙次公の蘇詩注から根拠を探す。
(三)、趙次公と同時期の蘇詩注釈書に収められる詩歌の数と比較することによって推算する。

まず、(一)の方法を以て推算すると、次のようになる。趙次公蘇詩注は単行本として流伝したが、陳振孫の『直斎書録解題』に著録されていないことから、南宋末期にはすでに散逸していたと考えられる。倉田淳之助の考察によれば、

杜詩注と同じように、東坡詩次公注も単行本があったので、本書の蘇詩佚注二の分量は、『王状元本』に収められた以外のものなのである。「生日劉景文以畫松鶴爲壽、且貺佳篇、次韻爲謝」詩の何須構明堂という句の下に、「構字次公作口」と注記しているが、構は高宗の諱。又次公注は紹興中の刊本に引用されているのであるから、すなわち大岳の手にしていた次公注本は、詩の本文を具えた紹興中の刊本であったことを証明するものであり、しかも現存の『東坡集』が皆孝宗以降の刊本であることを思えば、極めて貴重なものを大岳は見ていたことになる。且本書（本書頁一七六）「華蔭寄子由」詩のなかに、「巻首與子由別於鄭州」とあることは、本書下巻の『東坡集』と同様の編次であることも明らかである。(一一)

これによれば、趙次公が蘇詩に注釈を施す際に用いた蘇詩作品集は、紹興年間（一一三一～一一六

二）以前のテキストであり、またこのテキストの編次は宋刊『東坡集』と同じであることから、趙次公は紹興年間以前に刊行された『東坡集』を利用したと推測できる。『東坡集』は前集四十巻と後集二十巻からなっており、現存する宋刊『東坡集』[一二]を以て計算すれば、前集四十巻のうち、巻一から十八までの十八巻に詩歌一四八〇首、巻十九に三首が収録されている。後集二十巻のうち、巻一から巻七までの七巻に詩歌四七五首、巻八に一首が収録されている。合計すると、計一九五九首である。趙次公は「和蘇詩」を創作した際に、蘇詩注と同様のテキストを用いた可能性が極めて高いため、「和蘇詩」の数を一九五〇余首と推測することができる。

次に、(二)の方法を以て考察すると、次のようになる。『四河入海』巻十八「次韻黄魯直見贈古風二首」の趙次公注は、

先生詩古律凡一千四百七十二首、其中答人見贈者概不滿十首、而此卷有「次韻秦觀秀才見贈」及「次韻黄魯直見贈古風二首」、其人於先生之門最爲顯顯、而詩集並行於世。（先生の詩　古律凡そ一千四百七十二首あり、其の中に人の贈らるるに答うる者概ね十首に満たず、而るに此の卷に「秦観秀才の贈らるるに次韻す」および「黄魯直の贈るる古風に次韻す二首」有り、其の人の先生の門に於ける最も顕顕と為す、而して詩集並びに世に行わる。）[一三]

と述べており、蘇軾の古律詩の数を一四七二首と計算している。「和蘇詩」の数も一四七二首以上であ

ると言える。

最後に、(三)蘇詩趙次公注よりやや遅れる景定壬戌（一二六二年）鄭羽補刊本『施顧注蘇詩』所収の詩歌数と比較することによって推算してみると、次のようになる。『蘇詩佚注』に翁万戈旧蔵の宋刊施顧注本「目録」[一四]が翻刻されており、詩歌二三〇九首を収録している。『蘇詩佚注』の編纂者は「目録」の巻四十の下に、

施注原本載「翰林帖子」五十四首、「遺詩」三十三首、今本具在、故皆從略。而其二首特爲收録以存次公注也。（施注の原本に「翰林帖子」五十四首、「遺詩」三十三首を載す、今本具に在り、故に皆な從いて略す。而るに其の二首特に収録を為して以て次公注を存するなり。）

と説明している。「翰林帖子」五十四首および「遺詩」三十三首は併せて八十七首あり、そのうちの二首[一五]に趙次公が注釈していることから、ほかの八十五首は趙次公未見の詩歌と推測できる。詩歌総数より八十五首を除けば、一九五四首になる。この数は（一）で見た詩歌の数（一九五九首）とほぼ一致しており、趙次公「和蘇詩」の数を一九五〇余首と推測してよいであろう。

なお、もう一つ検討しなければならないことがある。それは趙次公が蘇軾の「和陶詩」に唱和したのかということである。今回の調査結果によって得られた四十八首に、「和陶詩」に対する唱和詩および記述が見られず、趙次公注も見られない。そのため、「和陶詩」には唱和しなかったと考えたい。

趙次公「和蘇詩」の数は一九五〇余首という膨大な量に達しているが、歴代の蔵書目録には著録されていない。中国本土では、陳思『海棠譜』に所収の二首のみが見られ、『四河入海』より輯佚した四十八首を加えると、計五十首になる。しかし、この数は趙次公「和蘇詩」総数の四十分の一に過ぎない。新しい資料が発見されるまでは趙次公「和蘇詩」を研究するには、この五十首の作品を利用するほかない。

第二節　趙次公「和蘇詩」に関する先行研究

初めて趙次公「和蘇詩」に言及したのは倉田淳之助である。倉田氏の『蘇詩佚注』は趙次公「和蘇詩」について次のように述べている。

> 注として最も変わっているのは和詩が入っていることである。凡そ二十四回見え、概ね注を伴い、中には一首全部を示さず、一、二句に止るものもある。附せられた注は東坡詩の注ではなくて、和詩の注である。（中略）これは趙次公が自分の作った和詩に注を下し、それを児の趙虎が記録したものと思われる。和詩は概ね軽快老成の作であるが、和詩は置かれた場所の詩に和したものでなくて別の詩に和したものが、何かの関係で入れられたというものがある。（中略）和詩の注は和詩を媒介として間接に注する形をとったものである。従ってそういうような注は前から別にあっ

たのではなく、和詩が入れられると共に書かれたものに相違ない。ここで初めて奇怪に見える和詩が入った理由が分るのである。しかし和詩そのものは別にまとめられてあったのであろう。引かれている和詩に一二句のものがあり、或は別のものがあるところからそう考えられる。(一六)

倉田氏は主に『翰苑遺芳』より趙次公注を輯佚したため、「凡そ二十四回見えた」と述べるのである。筆者が検出した四十八首の内訳は、『翰苑遺芳』より四十一首、『一韓聴書』より七首(一七)、『脞説』(一八)より一首である。倉田氏の計算では『翰苑遺芳』だけでも十四首が漏れている。これは、倉田氏が「和蘇詩」を提示語であると誤解して削除してしまったためである。たとえば、『四河入海』巻二十二「送程徳林赴真州」詩の趙次公注に、

次公和寵字下注、蘇先生全篇句押一韻、似柏梁體(後略)。(次公の和(詩)の「寵」字の下に注す、蘇先生全篇は句ごとに一韻を押ず、柏梁体に似たる。(後略))。(一九)

とあり、注釈冒頭に出てくる「次公和」の三字は趙次公「和蘇詩」を指しているが、倉田氏は「次公」を注釈者提示の語と看做したのである。そのため、倉田氏は「和送程徳林赴真州」詩を「和蘇詩」として計上しなかったのである。

また、趙次公「和蘇詩」は「変わっている注」ではなく、「別にまとめられてあった」ものである。

このことについては、次節で詳しく論ずる。中国の詩歌批評史では「論詩詩」[110]すなわち詩歌の形を以て詩を評論する方式があった。しかし、原詩を唱和することによって原詩に注釈を施す例は趙次公以外には見られない。趙次公「和蘇詩」は形式から内容まで蘇軾の原詩と深く関わっているから、倉田氏は注釈と見做したのであろう。

第三節　趙次公「和蘇詩」の創作時期・刊刻・流布

趙次公の「和蘇詩」の創作時期は杜詩に注釈を施す期間とほぼ重なり、蘇詩注釈に先立つ形でなされている。後に趙次公の息子趙虎が杜詩注と「和蘇詩」をあわせた『男虎録』を刊行したと考えられる。[111]このことは、『翰苑遺芳』の次の検討によって明らかになる。

・例①、『男虎録』所注曰、此篇直敘之作（後略）。（『男虎録』の注する所に曰く、此の篇は直敘の作なり（後略）。[112]）

・例②、『男虎録』所注曰、武昌縣有白雉山（後略）。（『男虎録』の注する所に曰く、武昌県に白雉山有り（後略）。[113]）

・例③、呉中方梅雨而午巳間乍晴、謂之啓晝。（中略）邵公尚書曰、押韻思索至此、幾乎九天上也。（呉中梅雨に方たりて午巳の間に乍ち晴る、之れを啓晝と謂う。（中略）邵公尚書曰く、押韻の思索

此に至って、九天に上るに幾乎し。）[二四]

例①、②から、『男虎録』が趙次公「和蘇詩」やその自注を収録していたであろうことが推測できる。しかし、『男虎録』は歴代の蔵書目録に著録されていないため、その具体的な巻数・冊数などについてはわからない。林希逸『竹渓鬳斎十一稿続集』巻三十に趙次公の「杜詩先後解自序」を収録しており、林希逸はこの序文の後に次のように述べている。

惜此板在蜀、兵火之後、今亡矣。予嘗及見於杜丞相子大理正家、京中書肆已無有。前両行有「男虎録」者是。（惜むらくは此の板蜀に在り、兵火の後、今亡するを。予嘗て杜丞相の子の大理正（卿）の家に見るに及び、京中の書肆已に有る無し。前の両行に『男虎録』なるもの有るは是なり。）[二五]

この記述から見れば、林希逸が見た『男虎録』の内容は趙次公の杜詩注である。前述のように、例①、②に引用された『男虎録』の内容は趙次公「和蘇詩」である。従って、趙次公「和蘇詩」と『趙次公杜詩先後解』は趙虎によって合刊されたと推測できる。

ついで、例③は「和舶趕風并引」詩の趙次公の自注である。資料に出てくる「邵公尚書」は趙次公と交遊関係のある邵溥（字は沢民、邵雍の孫、邵伯温の息子）のことで、南宋初期に活躍した官吏である。李心伝（一一六六～一二四三）の『建炎以来繫年要録』巻三[二六]によれば、邵溥は建炎元年（一一

二七）に偽楚（一一二七年三月七日～四月十日）の戸部尚書を務めたが、在任の時期が短いうえ、趙次公が邵溥を偽楚に仕えた職で称呼する可能性もほぼないであろう。また、当時の邵溥は都の開封におり、趙次公は蜀にいたと思われるので、この時期に二人が交遊するのは不可能である。

また陸心源（一八三八～一八九四）の『宋史翼』巻十に邵溥の伝があり、それは次のようである。

邵溥、字澤民、洛陽人。堯夫孫、伯温子也。（中略）靖康元年爲戸部侍郎、僞楚時權戸部尚書。（中略）六年正月試尚書禮部侍郎、仍兼參議軍事、旋除川陝宣撫使幹辦公事、四月起爲都督府幹辦事。七年二月、充徽猷閣待制充知衡州、溥乞外宮觀、尋改眉州。七月上其父伯温所著『辨誣』三卷。八年正月、召赴行在。上謂趙鼎曰、朕於知名士大夫皆欲識之、獨未識溥、故召。卽溥以疾不至、乃除提擧江州太平觀、居犍爲、十八年卒。(二七)

これによれば、邵溥は紹興六年（一一三六）六月より試礼部尚書侍郎を務めた。また『建炎以来繫年要録』巻一〇九の紹興七年（一一三七）二月丁未の条に「尚書禮部侍郎兼都督府參議軍事邵溥充徽猷閣待制知衡州」とあることから、邵溥のことを「尚書」で呼べる時期は紹興七年二月（一一三六）より彼が亡くなるまでの紹興十八年（一一四八）の十数年間である。『東坡集』の前、後二集の内、計二十五巻（前集十八巻、後集七巻）は詩歌を収めている。蘇軾の「舶趠風並引」詩は『東坡集』巻十一に収録されていることから、趙次公「和蘇詩」の創作は紹興七年より十八年の期間にすでに半分近

く完成したと考えられる。これは紹興四年（一一三四）より十七年（一一四七）までの間に著された『杜詩先後解』とほぼ重なっており、紹興二十二年（一一五二）より二十五年（一一五五）までの間に完成された蘇詩注[二八]よりも早い。例①、②の記述を併せて考えるに、趙次公「和蘇詩」と杜詩注は趙虎によって合刊されたことは明らかである。

次に、中国と日本とにおける趙次公「和蘇詩」の流伝について検討してみる。前述の林希逸は「杜詩先後解自序」の後に「惜むらくは此の板蜀に在り、兵火の後、今亡するを。予嘗て杜丞相の子の大理正（卿）の家に見るに及ぶ。京中の書肆已に有る無し。前の両行に『男虎録』なるもの有るは是なり。」という記述から、『男虎録』は蜀の地において刊行された、所謂蜀刻本であることがわかる。後に述べるように、大理正卿の家は南宋の都（臨安）にあったことから、この版本が都に伝わっていたこともわかる。ただ、その版木は兵乱によって焼かれ、絶版になった。故に、書肆では買えないものとなった。

林希逸の「杜詩先後解自序」に出てくる杜丞相は杜範（一一八二～一二四五）のことである。『宋史』によれば、杜範は黄岩の人。淳祐四年（一二四四）十二月、右丞相兼樞密使の職に除せられ、翌年の淳祐五年（一二四五）四月に亡くなっている。[二九]従って、杜丞相と称せられるのは淳祐四年十二月以降である。また『宋元学案』[三〇]と『南宋館閣続録』[三一]によれば、林希逸は端平二年（一二三五）の進士及第で、淳祐六年（一二四六）十月に秘省正字に除せられ、七年（一二四七）五月荘文府教授を兼ねて、七月に、枢密院編集官に除せられていた。以上を見ると、林希逸が杜範の息子の家で『男虎録』

を見たのは淳祐四年十二月以降となり、可能性として二つの時期を挙げることができる。

一つは、淳祐四年十二月から淳祐五年四月までである。しかし、この時期に、林希逸は臨安にいるかどうかは不明であるため、可能性は低いと思わる。

もう一つは、淳祐七年以降である。杜範は黄岩の人である。杜範の息子の大理正卿(三二)が父の喪に服することになれば、彼は黄岩に戻らなければならない。臨安に戻るのは淳祐七年以降と推測できる。従って、林希逸は館閣で職を務めた時期に『男虎録』を見た可能性が高い。さらに言うと、一二四七年頃、『男虎録』は私家に収蔵されたが、書肆ではすでにあまり見られない稀覯書になっていた。

南宋の蔵書家・出版者である陳思によって編まれた『海棠譜』には陳思の自序があり、序文の最後に、「開慶改元長至日（開慶改元長至の日）」と書いてある。これは一二五九年の夏至の日である。前述したように、『海棠譜』には趙次公「和蘇詩」が二首収録されている。このことから、『男虎録』は一二五九年以前に陳思に収蔵されたことがわかる。

以上は中国における流伝についての考察である。日本における流伝については資料が少ないため、おおよその推測しかできない。『四河入海』所収の四書のうち、一番古い注釈書は『翰苑遺芳』である。「和蘇詩」の輯佚もほとんど『翰苑遺芳』からである。しかし、『翰苑遺芳』は序文や跋文が残っていないため、その成書時期は不明である。注釈者の大岳周崇が亡くなったのは一四二三年であることから、『男虎録』は一四二三年以前に日本に伝わったことは確かである。また、巻一から引用があるため、注釈作業の初期から『男虎録』を採用していたこともわかる。結論としては十五世紀前後、『男虎録』

は日本に伝わったと言えよう。

第四節　趙次公自注の価値

前述したように、「和蘇詩」には概ね趙次公の自注が付いている。これらの自注は「和蘇詩」を理解するうえにおいて非常に役に立つばかりでなく、蘇詩を研究するうえでも極めて価値が高い。ここでは、「和『和王晉卿並引』」と「和送程德林赴真州」詩の自注を見ることによって蘇詩の用韻に関する資料価値を考察する。

「和『和王晉卿並引』」詩は佚詩であるが、趙次公の自注が残っている。

次公和敘曰、先生詩集中有云次韻者、則依元韻之次也。有云和者、則同題意而已、未必用韻也。今敘云、王詵作詩相屬、故和其韻、則又用韻而不次矣。故次公今所和王詵首篇、但押先生詩中韻、而無次焉。意詵詩韻之先後、亦類此而。（次公の和敘に曰く、先生の詩集のなかに次韻と云うもの有れば、則ち元韻の次に依るなり。和と云うもの有れば、則ち題意を同じくするのみ、未だ必ずしも韻を用いざるなり。今敘に云う、王詵詩を作りて相い属す、故に其の韻に和す、と。則ち又た韻を用うるも次せず。故に次公今和する所の王詵の首篇は、但だ先生の詩中の韻を押し、而るに次すること無し。意うに詵の詩韻の先後、亦た此れに類するのみ。）(三三)

次韻と言えば元の韻字に即して和詩が創作されることが指摘されている。また和と言えば、詩の内容に即して詩が作られるのみで、押韻にはこだわっていないことが指摘されている。それから、今叙に表明される和詩創作の態度に趙次公が厳密に則っていることもわかる。この自注から、趙次公が蘇詩における唱和詩の用韻の規則をどのように理解していたのかわかる。さらに我々が、蘇軾の唱和類の作品を研究するのにも大いに参考になる。次に「和送程徳林赴真州」詩の自注を見てみよう。

蘇先生全篇句押一韻、似柏梁體。至第八句卻押「寵」字、云「老人愛君如劉寵」。蓋「寵」字平聲之轉耳、可翻歸本韻也。古詩有此格、故今亦和「寵」字、方得爲工也。（蘇先生の全篇の句一韻を押し、柏梁体に似たり。第八句に至れば却って「寵」字を押じ、「老人君を愛すること劉寵の如し」と云う。蓋し「寵」字は平声の転のみ、翻って本韻に帰すべきなり。古詩に此の格有るが故に、今亦た「寵」字に和して、方めて工と為すを得たるなり。）(三四)

「和送程徳林赴真州」詩も佚詩であるが、趙次公の自注は蘇軾の柏梁体詩歌における転韻現象を指摘している。万里集九はこの現象について、

某謂、此篇東韻而通冬韻從、容、恭、龍四字及上聲腫韻寵一字。如次公注則寵轉爲平聲。先生押

韻如此類多在之。本集廿一「送鄭戸曹」詩灰、咍韻而通用佳、皆淮、乖二字。又寒韻押判字、陽、唐押放字、可爲萬代標準。（某謂う、此の篇は東韻にして冬韻の「從」と「容」と「恭」と「龍」との四字および上声の腫韻の「寵」の一字に通ず。次公が注の如きは則ち「寵」転じて平声と為る。先生の韻を押するに此の如きの類は多く之に在り。本集廿一の「鄭戸曹を送る」詩の灰、咍の韻にして佳（上平九）、皆（上平十四）の「淮」と「乖」との二字を通ずる。又た「寒」韻に「判」の字を押し、「陽」、「唐」に「放」の字を押すは、万代の標準と為すべし。）

と述べており、さらに例を挙げて帰納している。趙次公および万里集九の説が妥当かどうかはなお考証を要するが、蘇軾の柏梁体詩歌における転韻現象の指摘として重要である。

第五節　趙次公の創作動機

前人の詩歌を唱和する創作方式については、すでに横山伊勢雄の研究[三五]に詳しい。横山氏は前人の作に唱和する創作方式は蘇軾からであること、蘇軾が晩年に作った百余首の「和陶詩」がよく知られるが、実際は蘇軾の青年時代から前人の詩歌に唱和する作品がなかったわけではないことを指摘している。治平元年（一〇六四）、蘇軾は二十九歳の時に、「二月十六日与張、李二君遊南溪、酔後相与解衣濯足、因詠韓公山石之篇、慨然知其所以楽而忘其在数百年之外、次其韻。（二月十六日に張、李二君

と南渓に遊び、酔後相い与に衣を解き足を濯う、因って韓公の山石の篇を詠ず、慨然として其の楽しむ所以を知りて其の数百年の外に在るを忘る、其の韻に次す。）」[三六]を作り、韓愈の「山石」詩に唱和している。その創作動機が詩題の「慨然知其所以樂而忘其在數百年之外」から窺える。すなわち時空を超えて前人と楽しみを共有したことに起因している。また、二十年後の元豊七年（一〇八四）に、四十九歳の蘇軾は「和李太白並敘」を作り、李白の「潯陽紫極宮感秋」詩に唱和し、その創作動機を詩序のなかで次のように述べている。

太白詩云、四十九年非、以往不可復。予亦四十九、感之、次其韻。（太白の詩に云う、四十九年非なり、往を以て復すべからず、と。予も亦た四十九にして、之に感じて、其の韻に次す。）[三七]

以上を見ると、韓愈と李白の詩歌に唱和することは、偶発的な試みと言ってよいであろう。意識的に前人の詩歌に唱和するのは「和陶詩」[三八]からである。蘇轍は「追和陶淵明詩引」において、蘇軾の書簡を次のように引用している。

古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。追和古人則始於吾。吾於詩人無所甚好、獨好淵明之詩。（中略）然吾於淵明豈獨好其詩也哉。如其爲人、實有感焉。（中略）半生出仕、以犯世患、此所以深服淵明、欲以晩節師範其萬一也。（古の詩人に擬古の作有るも、未だ古人に追和する者有

らざるなり。古人に追和するは則ち吾に始まる。吾詩人に於いて甚だ好む所無きも、独り淵明の詩を好む。（中略）然れども吾の淵明に於ける豈に独り其の詩を好むのみならんや。其の人と為りの如きは、実に感有り。（中略）半生にして出仕し、以て世患を犯すは、此れ深く淵明に服する所以なり、晩節を以て師範とせんと欲するは其れ萬に一なり。）(三九)

これによれば、前人の詩歌に唱和するという創作手段が蘇軾から始まり、その前身が擬古詩であることがわかる。創作動機は大きく二つに分けられる。一つは、唱和する詩人の作品に対する高い評価から生じる創作欲求である。もう一つは、唱和する詩人の思想および生き方を認めることによって生じる原詩の内実を探求する欲求である。

それでは、趙次公の「和蘇詩」創作動機は何であろうか。まず、蘇軾が陶淵明の作品を愛読して「和陶詩」を創作したように、趙次公も蘇軾の詩歌を好んでいたことが考えられよう。蘇軾の詩歌は膨大な数量に達し、体裁・風格・典故は多種多様であり、また用韻は好んで険韻を用いている。このような蘇軾の詩歌に対して全面的に唱和することは相当の熱意がなければ、一流の詩人であってもなかなか挑戦する勇気は持てないだろう。

もう一つ考えなければならないことがある。それは趙次公と蘇軾とが同じ蜀の文人であるということである。趙次公が職を務めた隆州は蘇軾の出身地の眉山県の隣にあり、地理的には非常に近い。蘇軾は存命中から名を天下に轟かせ、蜀の優秀な文人の代表であり、蜀の地の文人は蘇軾の文学に対し

てとりわけ親近感を持っていた。これは趙次公の「和与参寥師行園中得黄耳蕈（参寥師と園中を行き黄耳蕈を得たりに和す）」[四〇]によく反映されている。

金釘忽喜逢新耳　金釘忽ち新耳に逢うを喜び
絲縷偏宜茸好薑　糸縷偏えに宜しく好薑を茸（えら）ぶべし
即是君侯無飲戒　即し是れ　君侯に飲戒無くんば
不妨浮酒學家鄉　浮酒の家郷に学ぶを妨げざらん

趙次公の自注では、「金釘、則黄耳栮嫩者狀、川人以黄耳蕈浮於酒上而飲云（金釘、則ち黄耳栮の嫩き者の状なり、川人は黄耳蕈を以て酒上に浮べて飲むを云う）」と述べて、黄耳蕈（一種のキノコ）を酒に浮かべて飲むしかないという蜀の人の習慣と指摘している。同じ地域の同一の飲食習慣を共有することによって、価値観の接近をはかっているのであろう。

第六節　趙次公「和蘇詩」の類別・詩風

趙次公「和蘇詩」を通覧すると、概ね二種類に分けられる。一種類は人物を中心とする和詩である。このような作品二十首がある。もう一種類は物事を中心とする和詩である。このような作品二十八首

がある。さらに細かく分類すると、人物を中心とする和詩は「代和類」[四一]と「和補類」[四二]に分けられる。物事を中心とする和詩は同題擬作類[四三]にまとめられる。

次に、趙次公の詩風について考察を行う。まず趙次公の「杜詩先後解自序」を読むことで、彼の詩学理念を窺う。

余喜本朝孫覺莘老之說謂「杜子美詩無兩字無來處」、又王直方立之之說謂「不行一萬里、不讀萬卷書、不可看老杜詩」。因留功十年、注此詩。稍盡其詩、乃知非特兩字如此耳。往往一字察切、必有來處、皆從萬卷中來。至其思致之貌、體格之多、非惟一時人所不能及、而古人亦有未到焉者。若論其所爲來處、則句中有字、有語、有勢、有事、凡四種。兩字而下爲字、三字而上爲語、擬似依倚爲勢。事則或專用、或借用、或翻用。或用其意、不在字語中。于專用之外、又有展用、有倒用、有抽摘滲合而用、則李善所謂「文雖出彼而意殊、不以文害」也。又至用方言之穩熟、用當日之事實者。又有用事之祖、有用事之孫。何謂祖、其始出者是也。何謂孫、雖事有祖出、而後人有先拈用、或用之別有所主、而變化不同、卽爲孫矣。杜公詩句皆有焉。世之注杜者、謬引旁似、遺落佳處固多矣。至於只見後人重用、重說處、而不知本始、所謂無祖。其所經後人先撚用、竝已變化、而但引祖出、是謂不知夫舍祖而取孫。又至於字語明熟混成、如自己出、則杜公所謂「水中著鹽、不飲不知」者。蓋言非讀書之多、不能知覺、尤世之注解者弗悟也。[四四]

序文の冒頭に、孫覚と王直方の論説が引用されている。孫覚は江西詩派の中心人物の黄庭堅の岳父であり、文学的主張も黄庭堅と一致するように見える。王直方は、呂本中によって作られた『江西詩社宗派図』に収められることから、江西詩派の主要メンバーと認められよう。(四五) 趙次公は彼らが主張した「杜子美の詩両字の来処無きは無し。」、「一万里を行かず、万巻の書を読まざれば、老杜の詩を看るべからず。」を引き受けて、自身が十年かかって杜詩に注釈を附した経験から、「乃ち特だ両字のみ此の如くなるのみに非ざるを知る。往往一字察切にして、必ず来処有り、皆な万巻の中より来たる。」と、上記二家の説に強く共感した。また、その具体例として、「若し其の為す所の来処を論ぜば、則ち句中に字有り、語有り、勢有り、事有り、凡て四種なり。両字而下を字と為し、三字而上を語と為し、擬似依倚するを勢と為す。事は則ち専用或り、借用或り、翻用或り。其の意を用うる或り、字語の中に在らず。専用の外に于いて、又た展用有り、倒用有り、抽摘滲合して用うること有り、則ち李善の所謂『文彼より出づと雖も意殊なれば、文を以て害せざる』なり。又た方言の穏熟を用い、当日の事実を用うるに至る者あり。又た用事の祖有り、用事の孫有り。何をか祖と謂う、其の始めて出だす者是れなり。何をか孫と謂う、事に祖出有りと雖も、而れども後の人に先づ拈用するもの有れば、或いは之を用うるに別に主とする所有り、而して変化して同じからず、即ち孫と為すなり。」と、詳しく分類して解説している。趙次公は杜詩に注する際に、「来処」、すなわち典拠を重視した。彼は杜詩における典拠を字・語・勢・事の四つのパターンに分け、それぞれを分析し、特に杜詩における典故の多

用、活用、方言の使用、当世の事を典故として使用するといった技法を高く評価している。また、世のなかの注釈者が不適切な資料を使ったために、杜詩のよい所を損なったものが多くあると述べ、本を多く読まなければ杜詩に注釈を施す資格がない、と同時代の杜詩注釈者を厳しく批判している。ここから、趙次公の文学的主張は、当時の文壇の主流と一致していたということがわかる。

次に、（イ）宋詩の理趣、（ロ）江西詩派の特徴、（ハ）蘇軾からの影響の三つの方面から趙次公の詩風を見てみる。

（イ）宋詩の理趣

唐詩と比べると、宋詩は「理」「理趣」への追及が特徴的である。趙次公「和蘇詩」における宋詩の「理趣」を「代仲殊和椶筍並敘（仲殊の代りに椶筍並敘に和す）」[四六]詩を例にして見てみたい。

二月初頭三月尾　二月　初頭　三月の尾
椶櫚生筍方孕子　椶櫚　筍を生じて方に子を孕る
東坡名筍爲木魚　東坡　筍を名づけて木魚と為すも
未省孰與真魚美　未だ省せず　孰れか真魚より美なるを
真魚無舌自不鳴　真魚　舌無くして自ら鳴かざるも
木魚易烹姑免死　木魚　烹易くして姑らく死を免る

可憐口腹暴天物　憐れむべし　口腹して天物を暴し
動種全生均一理　動種　全生　一理を均しくするを

この理趣は特に末尾の二句に表れているように思わる。この二句は、たけのこと魚はともに食べられてしまう意味では哀れむべきものではあるが、生を全うするという点においては両方に等しく理が認められる、と解釈できる。

（ロ）江西詩派の特徴

江西詩派の特徴として「一字として来処無きは無し」と「難字の使用」が挙げられる。趙次公の作品における江西詩派の特徴が顕著である。以下、趙次公の「代賈收和『和邵同年戯贈賈收秀才三首』（賈收に代はりて邵同年の戯れに賈收秀才に贈るに和す　三首に和す）」其三[四七]を読むことによってこの特徴を見よう。この作品は最後の一聯だけ残っている。

大抵人生眠食爾　大抵人生は眠り食するのみ
奈何不樂獨悲余　楽しまずして独り余を悲むことといかんせん

末句の「奈何不樂獨悲余」の押韻の字は「余」と作っているが、蘇軾の原詩の押韻の字と異なってい

る。蘇軾の「和邵同年戯贈賈收秀才三首（邵同年の戯れに賈收秀才に贈るに和す　三首）」（巻八）其三の末句は「煙波渺渺正愁予（煙波　渺渺として正に予を愁へしむ）」であり、末字の「予」は押韻の字にあたり、現存する蘇詩のテキストは皆「予」と作っている。趙次公は自注において押韻の字を変えた理由を次のように述べている。

「余」與「予」皆訓我、『楚辭』有「余悲」及「悲余」字、方敢使。（「余」と「予」は皆な我と訓ず、『楚辭』に「余悲」および「悲余」の字有れば、方に敢えて使う。）

この注釈によれば、趙次公は「予」より「余」の方が古くから用いられ、正統性が高いため、意識的に変更したのであろう。

次に、「和補次韻正輔同遊白水山（和して次韻正輔ともに白水山に遊ぶを補う）」詩[四八]の第十七、十八句における難字の使用に伴う詩風の硬拗化を見てみたい。ここに言う「硬拗」というのは江西詩派の詩風を評価するのによく用いる評語で、詩全体生硬な表現を用いることである。

攜筇尋幽蹈鼫鼪　筇を携えて幽を訪ねるに鼫鼪を蹈まんとすれば
況無多子行碨磑　況(ま)して多子無きも碨磑を行かん

この二句の「瓠𤇾」と「碨磑」は難解な言葉である。難解な字或いは言葉を用いる際、概ね趙次公の自注が付いている。

先生詩注云、來詩本用磑字。今補正輔當用元韻。碨磑、地形不平。瓠𤇾、不安之貌。（先生の詩注に云う、来たる詩に本々「磑」字を用いるべし、と。今正輔を補うに当に元の韻を用いるべし。「碨磑」、地形不平なり。「瓠𤇾」、不安の貌なり。）

と趙次公自身の解説がある。これにより、この詩を読めるようになった。趙次公「和蘇詩」に附される自注が、「和蘇詩」を理解するには非常に役に立ち、且つ蘇軾の詩歌を研究するうえでも極めて価値が高い。また、趙次公の詩歌は宋詩の理趣的境地が窺われ、北宋と南宋の間に流行していた流行江西詩派の特色を備えていることがわかる。

（ハ）蘇軾からの影響

以上に見てきたとおり、趙次公は同時代的な特色が見られつつも、その一方で、趙次公「和蘇詩」は、題材や用韻の面において蘇軾の原詩と一致しており、蘇詩からの継承は明らかである。またそれは江西詩派の「痩硬」の詩風と比べて、蘇軾の平易な表現の詩風に接近している点においても窺える。

江南人物大儒家　江南の人物　大儒家
飽見疎枝傍水涯　見るを飽く　疎枝の水涯に傍うを
來看曲江千樹□　来たりて見る　曲江千樹の□
却回筆寫孔壇花　却(しりぞ)き回りて孔壇の花を筆写す

（「和『跋王進叔所蔵畫五首・徐熙杏花』」）(四九)

この詩は先に引用した作品と比べて、難解な文字や方言が見られず、一字欠けているが、意味はわかる。加えて擬人法の使用という蘇詩の特色も見られる。次に、「和跋王進叔所蔵画五首・芍薬」(五〇)を読んで、趙次公「和蘇詩」における擬人法を見てみる。

鬢帖冠亭鈿帶長　鬢帖　冠亭　鈿帶長し
臨風初試舞霓裳　風に臨みて、初めて試み、霓裳を舞う
日低露下燕支暈　日低くして露下る　燕支の暈
帶醉含嬌換晚妝　酔を帯び嬌を含みて晩妝を換う

この詩の原詩は、蘇軾が、王進叔所蔵の「芍薬」という美術作品に題した作品である。趙次公の和詩は全編的に擬人法を用いており、風に向かって動く花びらの姿を芸娼の舞踊を躍ることに喩え、ま

た、光の明暗の変化による花びらの濃淡の変化を巧みに描写している。このような、擬人法の使用は蘇軾からの影響が顕著と思われる。(五一)

纏めてみれば、趙次公の詩歌は宋詩の理趣的境地が窺われ、その意味で北宋と南宋の間に流行していた流行江西詩派の特色を備えている。しかしながら、それにとどまらず、蘇軾からの影響も大きく窺えるものと言える。

第七節　趙次公「和蘇詩」四十八首

【凡例】

① 国立国会図書館所蔵の古活字版『四河入海』の中田祝夫影印本を輯佚の底本とする。

② 建仁寺両足院蔵の古鈔本『四河入海』(慶應義塾大学付属研究所斯道文庫所蔵のマイクロフィルム版)と国立国会図書館所蔵の延徳初年整理の喜承写本『翰苑遺芳』を校勘資料とする。前者を建仁寺本、後者を芳本と略称する。

③ 『四河入海』より検出した順序で配列し、[1]、[2]、[3]……のように番号を付ける。

④ 詩題の次に題注を付け、『四河入海』の冊数・巻数(たとえば、『四河入海』第七冊、第九〇〇頁の場合、『四河入海』七900と省略する)、旧王本の門類・巻数、孔凡礼点校『蘇軾詩集』の巻数・頁数を示す。

⑤ 旧字体で翻刻を行う。俗字を正字に改め、脱字を□で表す。
⑥ 断句の場合、句数を示し、原詩の詩体を明記する。なお、古体詩の場合、原詩の句数を付け加える。

[1]
代黄州人答別黄州
整頓青絲瘦馬韉
隨身唯有一書幃
會須西掖華胥去
贏得東坡美號歸
久好豈無啼別酒
臨行不用挽征衣
邦人看取材難詔
要與君侯洗昨非

【題注】『四河入海』一194。原詩、舊王本卷一、紀行類。孔凡禮點校本卷二十三、第一二〇一～一二〇二頁。次公自注、『男虎錄』所注曰、此篇直敘之作。先生前此作唯稱蘇子、今乃有東坡之名矣。末句「詔」云、蘇某（建仁寺本作誤作其）黜居思咎、閲歳滋深、人材實難、不忍終棄。

[2]
代武昌人士和過江夜行武昌山上、聞黄州鼓角

【題注】『四河入海』一200。原詩、舊王本卷一、紀行類。孔凡禮點校本卷二十三、第一二〇二～一二〇三頁。

芙蓉峯插白雉山
黄槲樹彌呉造峴
齊安風送疊鼓聲
已渡江來如未遠
先生行李何太早
僕喜南歸筋力健
長庚睒睒月已沈
東方欲明風景變
景變高高西塞重
不向賢愚求一面
五丈湖中三尺魚
可容鱠玉聊相餞

次公自注、『男虎錄』所注曰、武昌縣有白雉山、山有芙（底本作夫、據建仁寺本改）蓉峯、與呉造峴相近、峴之（建仁寺本脱之字）得名縁孫權樊口被風波（芳本作破）船、鑿樊嶺而歸也。上多黄槲樹云云。西塞山高一百里、亦在武昌之西、袁宏『東征賦』云「浩西塞之俊（芳本作峻）崿」。縣有五丈湖、中有鯽魚長三尺。

[3] 和過大庾嶺

【題注】『四河入海』一378。原詩、舊王本卷一、紀行類。孔凡禮點校本卷三十八、第二〇五六頁。

盤盤大庾嶺

與世隔污淨（第1至2句）原詩爲五言律詩。

次公自注、『廣州記』曰、「俗云經大庾嶺、則清穢之氣分（芳本分字誤作力）。飲石門泉、則緇素貨變」。失垢污、身言消亡之也。

[4] 和南堂五首其一

【題注】『四河入海』二421。原詩、舊王本卷三、堂宇類。孔凡禮點校本卷二十二、第一一六六頁。

夭矯城西千丈堤

江山勝處總臨西（第1至2句）原詩爲七言絕句。

次公自注、先生詩「此邦（臺館一時西）」。又云「掛起（西窓浪接天）」、則坐東向西、故今五首多言面西之意。

[5] 和舶趠風竝引

【題注】『四河入海』四333。原詩、舊王本卷七、風雷類。孔凡禮點校本卷十九、第九七二～九七三頁。

梅黄過雨欣啓晝

海舶歸帆快趠風
窓幕萬象波蕩漾
簷筝彌浹玉丁東
偏能有信三呉地
慣見無差百歳翁
豈止薄山來不再
却須細説與揚雄

次公自注、呉（芳本作浙字）中方梅雨而午巳閒乍晴謂之啓晝。「啓」字於字書音「啓」、而呉人之音則從駈現反也。楊子云「雷乎天淵、風薄乎山」、又云「雷不一、風不再」。今趠風來自海上彌旬、則（底本脱則字、據芳本補）與子雲之説異矣。邵公尚書曰「押韻思索至此、幾乎九天上也」。

[6] 和廬山五詠・聖燈岩

【題注】『四河入海』四367。原詩、舊王本卷七、山嶽類。孔凡禮點校本卷十三、第六二一頁。

山君夜出遊
千燈發幽祕
老翁了不怪（建仁寺本了字傍注作弱字）
見之自孩稚

次公自注、先生説立説以燈爲丹光、今詩以爲山君夜遊之燈、亦詩人各立説也。

[7] 和廬山五詠・三泉

【題注】『四河入海』四368。原詩、舊王本卷七、山嶽類。孔凡禮點校本卷十三、第六二一頁。

瞭瞭摩醯目
分作泉水潔
山精不敢飲
夜夜照明月

[8] 和廬山五詠・障日峰

【題注】『四河入海』四369。原詩、舊王本卷七、山嶽類。孔凡禮點校本卷十三、第六二二頁。

東山捧日出
西山銜日歸
爲群目用□
峰障爲攢眉

次公自注、此譏障日之非。

[9] 和補「次韻正輔同遊白水山」

【題注】『四河入海』四484。原詩、舊王本卷七、山嶽類。孔凡禮點校本卷三十九、第二一四八～二一五〇頁。

攜笻尋幽蹈甗甗

況無多子行碨硊（第17至18句）原詩爲七言古詩、共40句。

次公自注、先生詩注云「來詩本用硊字」。今補正輔當用元韻。碨硊、地形不平。甗甗、不安之貌。

[10] 和補子明始於文登海上、得白石數升、如芡實、可作枕。聞梅丈嗜石、故以遺其子子明學士、子明有詩、次韻。

【題注】『四河入海』四857-858。原詩、舊王本卷八泉石類。孔凡禮點校本卷三十一、第一六五〇頁。

歸奉庭闈得海珍
使君分餉孝同倫
離離新芡千枚滑
粲粲明珠一色純
水灌休誇蜀禪刹
絲文但貴楚江濱
欲論匪報無瓊玖
只有相從意愈親

次公自注、水灌石、蜀僧舍多以盆水貯之。絲文石、云多出荊南七寶灘中。

[11] 和「次韻藤大夫三・沈香石」

【題注】『四河入海』四925。原詩、舊本卷八、泉石類。孔凡禮點校本卷三十七、第二〇〇〇～二〇〇一頁。

斲石爲屏一尺長
水沈芬烈色還蒼（第1至2句）
虢縣風林難竝貴
海山雨肺自慙香（第5至6句）原詩爲七言律詩。

次公自注、虢縣有此石、多爲硯屏也。雨肺事、王子年『拾遺記』曰「爛石色紅似肺、燒之有香煙、聞數百里、煙氣升天則成香雲、香雲遍潤則成香雨也」。

案、『四河入海』十二473。『脞說』亦引此詩、「雨肺」作「雨沛」以次公自注判之、應作「雨肺」。

[12] 代好事者和「予昔作壺中九華詩、其禦八年、復過湖口、則石已爲好事者取去、乃和前韻以自解云」

【題注】『四河入海』四986。原詩、舊王本卷八、泉石類。孔凡禮點校本卷四十五、第二四五四頁。

不論低阜與巍峰
劫火然時□是空
物象偶存形似處

吾曹猶墮愛迷中
亡弓本與千人共
得□休憑一夢通
要看眞仙曾不遠
他年馬首□玲瓏 芳本瓏作瀧

[13] 和黄精鹿

【題注】『四河入海』六325。原詩、舊王本卷十一、書畫類。孔凡禮點校本卷三十、第一五七五頁。

走険寧論岫與峰
穿雲徑去不知重
黄精定勝芧蒿美
飽食時眠緑中茸

[14] 和題李伯時畫「趙景仁琴鶴圖」二首　其一

【題注】『四河入海』六372。原詩、舊王本卷十二、書畫類。孔凡禮點校本卷三十、第一六〇六～一六〇七頁。

栖松飲水啄苔錢
三疊微心意自傳

魚鳥聞音猶解聽
性靈尤異是胎仙

[15] 和題李伯時畫「趙景仁琴鶴圖」二首　其二

【題注】『四河入海』六372-373。原詩、舊王本卷十二、書畫類。孔凡禮點校本卷三十、第一六〇七頁。

道本孤高孰可親
強將琴鶴作三人
它時鶴化何須瘞
便把琴桐厚衣薪

[16] 和「跋王進叔所藏畫五首・徐熙杏花」

【題注】『四河入海』六535。原詩、舊王本卷十二、書畫下。孔凡禮點校本卷四十四、第二三九五～二三九六頁。

江南人物大儒家
飽見踈枝傍水涯
來看曲江千樹□
卻回筆寫孔壇花

[17] 和「跋王進叔所藏畫五首・芍藥」

【題注】『四河入海』六538。原詩、舊王本卷十二、書畫類。孔凡禮點校本卷四十四、第二三九六～二三九七頁。

鬢帖冠亭鈿帶長
臨風初試舞霓裳
日低露下燕支暈
帶醉含嬌換晚妝

[18] 和「跋王進叔所藏畫五首・躑躅」

【題注】『四河入海』六540。原詩、舊王本卷十二、書畫類。孔凡禮點校本卷四十四、第二三九六～二三九七頁。

彤雲亂疊起枝邊
炫熀難禁病眼看
造化功夫都在乎
細思色訣掌調丹

[19] 和「跋王進叔所藏畫五首・寒菊」

【題注】『四河入海』六542。原詩、舊王本卷十二、書畫下。孔凡禮點校本卷四十四、第二三九七頁。

長枝叢葉出纖葩

不喜駢頭丹自丫
比菊容儀豈相似
只應喚作小蓮花

[20] 和「跋王進叔所藏畫五首・山茶」

【題注】『四河入海』六544。原詩、舊王本卷十二、書畫類。孔凡禮點校本卷四十四、第二三九七頁。

絶苞未肯露鬚黃
不學梅花漏泄香
好是紅兒方脱嫁
可容青女弄玄霜

[21] 和寶山晝睡

【題注】『四河入海』六859。舊王本卷二十三、題詠類。孔凡禮點校本卷九、第四五一頁。

可須黃妳爲閑伴
不怕青奴能惱人（第3至4句）原詩爲七言絶句。

[22] 和書林逋詩後

【題注】『四河入海』七360。原詩、舊王本卷二十五、雜賦類。孔凡禮點校本卷二十五、第一三四三～一三四五頁。

東坡更愛一枝斜

好處更在映疎竹（第17至18句）原詩爲七言古詩、共20句。

次公自注、『王立之詩話』、「歐陽永叔最愛林和靖所爲「疎影（横斜水清淺）云云、而山谷以爲不若「雪後園林纔半樹、水邊籬落忽横枝」、餘以爲其所愛者、便是二公之（建仁寺本脱之字）優劣也。和靖又云「池水倒窺疎影動、房簷斜入一枝低」、此句於前所稱、眞可處伯仲之閒耳」。王立之說如此、而吾先生有云「竹外一枝斜更好」、「一枝斜」三字先生所愛而取之以用矣。而貼以竹林外尤（建仁寺本脱尤字）與和靖發暉也。

[23] 代仲殊和椶筍竝敘

【題注】『四河入海』七457。原詩、舊王本卷十四、花類。孔凡禮點校本卷三十三、第一七五六～一七五七頁。

二月初頭三月尾

椶櫚生筍方孕子

東坡名筍爲木魚

未省孰與眞魚美

眞魚無舌自不鳴（建仁寺本脱魚字）

木魚易烹姑免死

可憐口腹暴天物

動種全生均一理

[24] 和贈蒲澗信長老

【題注】『四河入海』七554。原詩、舊王本釋老類、卷四。孔凡禮點校本卷三十八、第二〇六六～二〇六七頁。

來向蒲澗覓壽花（第1句）原詩爲七言律詩。

次公自注、菖蒲花最難遇、名曰壽花。先生之弟黄門公有壽花是也。子由云「石盆種菖蒲甚茂、忽開八九花、或言此花壽祥也。遠因生日、作頌亦作賦此。石盆攢石養菖蒲、沮洳沙泉韮葉鋪。世説華開難値遇、天將壽老報勤劬。心中本有長生藥、根底暗添無限鬚。更爾屈蟠增瘦硬、他年老病要相扶」。

案、『翰苑遺芳』云、「次公「和蒲澗寺」詩云「來向蒲澗覓壽花」」。蘇軾有「廣州蒲澗寺」詩、祥見孔凡禮點校本卷三十八。「花」字爲平聲、當在押韻句。但「廣州蒲澗寺」詩押先、仙韻、花爲麻韻、與之不符。蘇軾另有「贈蒲澗信長老」詩、其首句爲「優鉢曇花豈有花」。蓋『翰苑遺芳』所謂蒲澗寺詩爲「贈蒲澗信長老」。

[25] 和與參寥師行園中得黄耳蕈

【題注】『四河入海』七620。原詩、舊王本卷十四、菌蕈類。孔凡禮點校本卷十七、第九〇三～九〇四頁。

金釘忽喜逢新耳

絲縷偏宜茏好薑

卽是君侯無飲戒

不妨浮酒學家鄉（第5至8句）原詩爲七言律詩。

次公自注、金釘、則黃耳栮嫩者狀、川人以黃耳蕈浮於酒上而飲云。

[26] 代賈收和「和邵同年戲贈賈收秀才三首」其二

【題注】『四河入海』七859。舊王本卷十五、戲贈類。孔凡禮點校本卷八、第四〇二～四〇三頁。

厭食三九庾郎鮭（第6句）原詩爲七言律詩。

[27] 代賈收和「和邵同年戲贈賈收秀才三首」其三

【題注】『四河入海』七865。原詩、舊王本卷十五、戲贈類。孔凡禮點校本卷八、第四〇三頁。

大抵人生眠食爾

奈何不樂獨悲余（第7至8句）原詩爲七言律詩。

次公自注、「余」（建仁寺本脫余字）與「予」皆訓我、『楚辭』有「余悲」及「悲余」字、方敢使。

[28] 代張天覺和謝王澤州寄長松兼簡張天覺二首　其二

【題注】『四河入海』八272。原詩、舊王本卷十六、簡寄類。孔凡禮點校本卷二十九、第一五四四～一五四五頁。

寄君雖緩非慳吝

得處難辛不用嘲

若匪異人相指似
誰知仙草隱菅茆

[29] 和「次韻劉景文西湖席上」

【題注】『四河入海』八712。原詩、舊王本卷十一、燕飲類。孔凡禮點校本卷三十三、第一七六〇頁。

判取醉歸煙色暮
兩欒諸寺起春容（第7至8句）原詩爲七言律詩。

次公自注、鐘兩角曰欒、又曰銑。春容則鐘聲色字之義。出『禮記・學記』。善待問者如撞鐘、叩之以小者則小鳴、叩之以大者則大鳴。待其從容、然後盡其聲。注、「從讀如富父舂戈之舂、舂容、謂重擊鐘也」。疏云、「舂、謂擊也、以爲聲之形容、言鐘之爲體必待其擊、每一舂而爲一容、然後盡其聲」。先生詩「寸筵（何以得舂容）」正用此義。若杜甫云「萬井逼舂容」、則借字以言水撞擊之狀。韓退之「舂容乎大篇」、則又用鐘聲以比文章也。

[30] 代沈長官和「次韻沈長官三首」其一

【題注】『四河入海』八843。原詩、舊王本卷十七、酬答上。孔凡禮點校本卷十一、第五六三頁。

擬欲菟裘便告歸
爲貧猶遣寸心違
不將愁惱成憔悴（建仁寺本脫惱、憔二字）

翻笑吾家瘦勝肥

次公自注、蘇公有怪君肥之語、則沈長官者必肥矣。吾家飯山事、沈昭畧嘗逢王約、張目視之曰、「汝是王約耶、何乃肥而癡」。約曰、「汝沈昭畧邪、何乃瘦而狂」。昭、畧撫掌大笑曰、「瘦已勝肥、狂又勝癡」。

[31] 和補莫笑銀杯小答喬太博　存目。

【題注】『四河入海』八884。原詩、舊王本卷十七、酬答類。孔凡禮點校本卷十三、第六一七頁。原詩爲雜言古詩、共12句。

次公自注、觀先生答喬詩、而名之曰「莫笑（銀杯小）」、則喬首篇、必有誚其銀杯之小矣。今名之曰「寧笑銀歲釀」、蓋以不哭笑之也。其詩曰「寧笑銀歲釀、百舉猶自醒」云云。

次公蘇詩注曰、此篇大率戲蘇先生公筵之薄也。時方檢約公使錢耳。寧笑銀歲釀、言不敢笑也。但雖舉百杯而尚醒則銀杯果小矣。

[32] 和補次韻道潛留別

【題注】『四河入海』九545。原詩、舊王本卷十九、酬答類。孔凡禮點校本卷二十三、第一二三三～一二三五頁。

勝賞未厭餘想在

夢中應復到廬山（第7至8句）原詩爲七言律詩。

[33] 和「和王晉卿竝引」存目。

【題注】『四河入海』九799。原詩、舊王本卷十九、酬答類。孔凡禮點校本卷二十七、第一四二二～一四二四頁。原詩爲五言古詩、共38句。

次公自注、次公和敘曰「先生詩集中有云次(建仁寺本脫次字)韻者、則依元韻之次也。有云和者、則(建仁寺本脫則字)同題意而已、未必用韻也。今敘云「王詵作詩相屬、故和其韻」。則又用韻而不次矣。故次公今所和王詵首篇、但押先生詩中韻、而無次焉。意詵詩韻之先後、亦類此而。

[34] 和補次韻樂著作送酒

【題注】『四河入海』十196。原詩、舊王本卷二十、惠貺類。孔凡禮點校本卷二十、第一〇四三頁。

薄酒聊將助一觴
知君無事興偏長
督郵從事休分別
若禦春寒勝飲湯

[35] 代徐使君謝和送牛尾狸與徐使君

【題注】『四河入海』十198。原詩、舊王本卷二十、惠貺類。孔凡禮點校本卷二十一、第一〇九一～一〇九二頁。

愁無佳味飲芳巵

餉合親開喜入眉
大勝西人食（鼠＋耶）鼠
雅同北地重貔狸
舉盤正恐空犀著
遶齒偏憐凝玉脂
口腹累人端可笑
物微意厚合銘肌 建仁寺本脱厚字

[36]
和補次韻宋肇惠澄心紙二首 其一

【題注】『四河入海』十246。原詩、舊王本卷二十、惠貺類。孔凡禮點校本卷二十九、第一五三八～一五三九頁。

憑君行草成雄句
爲洗重光破國愁（第3至4句）原詩爲七言絶句。
次公自注、重光、李後主字也。

[37]
和用舊韻送魯元翰知洺州

【題注】『四河入海』十892。原詩、舊王本卷二十一、送別類。孔凡禮點校本卷二十七、第一四四四～一四四五頁。

我行曲梁城

一卽廉藺魂（第25至26句）
至人有嘯火
補履雜市垣（第31至32句）原詩爲五言古詩、共40句。
次公自注、嘯火、人名。在縣市補履數十年不死、人奇之。

[38]
代買納和送買納倅眉二首　其一
【題注】『四河入海』十914。原詩、舊王本卷二十一、送別類。孔凡禮點校本卷二十七、第一四五二～一四五三頁。
入蜀今成第二回
修峨端赴眼中來（第1至2句）
只愁應接登臨處
欲賦新章坐短才（第7至8句）原詩爲七言律詩。

[39]
代買納和送買納倅眉二首　其二
【題注】『四河入海』十914。原詩、舊王本卷二十一、送別類。孔凡禮點校本卷二十七、第一四五三頁。
阡隴煙籠空重望
松楸風入有餘哀
爲君點檢郊原路

書信來時與燕來（第5至8句）原詩爲七言律詩。

[40] 和送程德林赴眞州　存目。

【題注】『四河入海』十一189。原詩、舊王本卷二十二、送別類。孔凡禮點校本卷三十五、第一八九九～一九〇〇頁。原詩爲七言古詩、共16句。

次公自注、次公和「寵」字下注、蘇先生全篇句押一韻、似柏梁體、至第八句卻押「寵」字云「老人（愛君如劉寵）」、蓋「寵」字平聲之轉耳、可翻歸本韻也。古詩有此格、故今亦和「寵」字、方得爲工也。

案、萬里集九『天下白』亦在該詩引次公和詩注。且云、「某謂、此篇東韻而通冬韻「從」「容」「恭」「龍」四字及上聲腫韻「寵」一字、如次公注則「寵」轉爲平聲。先生押韻如此類多在之、本集廿一「送鄭戶曹」詩灰、咍韻而通用佳皆、「淮」「乖」二字。又寒韻押「判」字、「陽」「唐」押「放」字、可爲萬代標準。

[41] 代樂全和樂全先生生日以鐵拄杖爲詩二首　其一

【題注】『四河入海』十一386。原詩、舊王本卷二十二、慶賀類。孔凡禮點校本卷二十一、第一〇八六頁。

鐵虵夭矯未登仙
留得人間不計年
皴破蒼顏彭祖老
嶮崎高節伯夷堅

晝隨芒屩穿何許 晝字底本作書、據芳本改。
夜倚繩床伴不眠
只此眞爲般若眼
等閑橫膝話幽禪

[42] 代樂全和樂全先生生日以鐵拄杖爲詩二首　其二

【題注】『四河入海』十一386。原詩、舊王本卷二十二、慶賀類。孔凡禮點校本卷二十一、第一〇八六～一〇八七頁。

已隨佛子畢終身
更伴書生度幾春
閩嶺攜經山角角
越溪拄過水鱗鱗
可憐雲夢澤南客
遠寄樂全堂上人
入手端然黑虵滑 黑字芳本作里
當年爐錘是洪鈞

[43] 和泛舟城南、會者五人、分韻賦詩、得人皆苦炎字四首　其四

【題注】『四河入海』十一622。原詩、舊王本卷三、遊覽類。孔凡禮點校本卷十九、第九七七～九七八頁。

倚風紗帽颭烏簷（第2句）原詩爲七言律詩。

[44] 和補「和孔周翰二絶・再觀邸園留題」

【題注】『四河入海』十一932。原詩、舊王本卷二十三、題詠類。孔凡禮點校本卷十五、第七五三頁。

清詩合用碧紗籠
句法清新練字工
卉木經春多自贔
黄花也復衒西風

[45] 和補「和孔周翰二絶・觀靜觀堂效韋蘇州詩」

【題注】『四河入海』十一932。原詩、舊王本卷二十三、題詠類。孔凡禮點校本卷十五、第七五三～七五四頁。

五賢風味秀瓊枝
屠沽相參定不宜
只有蘇州最清絶
眼明還是見新詩

次公自注、前輩論詩云「五字詩如五個賢人、不容一字不好、正如不可使屠沽雜其閒」。韋詩號清絶、故先生又有

詩云「清絶韋郎五字詩」也。

[46] 和題孫思邈眞

【題注】『四河入海』十一977。原詩、舊王本卷二十四、題詠類。孔凡禮點校本卷二十四、第一二五六～一二五七頁。

丹成未忍便仙去
時伴山僧齋一中
方著千金遺人世
憫茲多病黑頭蟲

次公自注、今禪寺中齋謂之一中。

[47] 代寺僧和歸宜興留題竹西寺三首　其一

【題注】『四河入海』十一970。原詩、舊王本卷二十四、題詠類。孔凡禮點校本卷二十五、第一三四七頁。

自有惠山泉第二
何須此水與君東（第3至4句）原詩爲七言絶句。

次公自注、常州惠山水爲第二、今先生歸常州矣。故寺僧答其不必以蜀岡水而東也。

[48] 和張庖民挽詞

【題注】『四河入海』十二141。原詩、舊王本卷二十四、傷悼類。孔凡禮點校本卷二十四、第一二五三～一二五四頁。

有道人閒士
修文地下郎（第1至2句）
曹溪明去識
皖口誦遺芳（第7至8句）
靈龜泉不朽
德共野梅香（第11至12句）原詩爲五言古詩、共12句。

次公自注、張庖民官於嶺南、嘗於皖溪口開泉長安嶺下。魯直命之曰「靈龜泉」、種梅百本、有銘詩刻其上、其後與之作哀詞亦刻泉上。今詩中使事與字。首句、蓋有道之士也。

おわりに

北宋から南宋の間を生きた趙次公は、杜甫や蘇軾の詩歌に注釈を施したことによって著名である。現存する趙次公の著作のほとんどはその杜詩注と蘇詩注であり、詩文作品は極めて少ない。しかし嘗て、趙次公は「和蘇詩」計一九五〇余首を創作しており、それは息子の趙虎によって杜詩注とあわせて刊刻され、都の臨安にも伝わっていた。十三世紀なかば頃になると、私家には収蔵されたが、書肆にはすでに見られないものとなった。現在、中国本土では、趙次公「和蘇詩」のテキストはすでに散佚し、南宋の陳思の『海棠譜』に収められた二首しか残っていない。しかしながら趙次公「和蘇詩」は、十五世紀前後に日本に伝来しており、五山の禅僧達に引用されることによって、四十八首が今に残っている。

趙次公「和蘇詩」には、概ね自注が付いており、「和蘇詩」を理解するには非常に役に立ち、且つ蘇軾の詩歌を研究するうえでも極めて価値が高い。また、趙次公は蘇軾と蜀の地の文人同士として親近感が強く、蘇軾の詩歌を好んでおり、愛慕と熱意を以て蘇軾のすべての詩歌に唱和した。これは蘇軾文学受容史において多大な壮挙である。趙次公の詩歌は宋詩の理趣的境地が窺われ、北宋と南宋の間に流行していた流行江西詩派の特色を備える一方、蘇軾からの影響も窺える。

注

（一）趙次公は杜甫「絶句漫興九首」其の七に出てくる「雉子」について、「筍根雉子、乃雉雞之子、出古樂府、（中略）縁世間本有作稚子、故起紛紛之説。予問韓子倉、子倉曰、老杜〔之意也〕、不用食筍詩亦可。（後略）」とある。（『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂版）丙帙巻三、上海古籍出版社、二〇一二年、第四五九頁）。

（二）祝尚書『宋代別集叙録』、中華書局、一九九九年。

（三）広義に言うと、時代や人物を問わず、蘇軾の詩歌に唱和する作品であれば、「和蘇詩」と言えるが、本章に言う「和蘇詩」は蘇軾が亡くなった後、後世の人が蘇軾の詩歌に唱和したものを指す。これらの作品は非交際性を持ち、一種の擬作の手段でもある。似ているものとして蘇軾「和陶詩」が挙げられる。

（四）林希逸『竹溪鬳斎十一藁続集』巻三十、文淵閣四庫全書第一一八五冊、台湾商務印書館、一九八六年、第八六七～八六八頁。

（五）傅増湘『宋代蜀文輯存』巻九十八、香港龍門書店、一九七一年、第一二三四頁。

（六）陳思『海棠譜』巻下、『文淵閣四庫全書』第八四五冊、台湾商務印書館、第一五〇頁。また孔凡礼『宋詩紀事続補』上冊（北京大学出版社、一九八七年、第三三三頁）および『全宋詩訂補』にも収録されている。

（七）『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂版）己帙巻三、第一三七一頁。

（八）『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂版）己帙巻八、第一五一二頁。

（九）『四河入海』（一）、第十三～十八頁。

（一〇）『竹溪鬳斎十一藁続集』巻十三、文淵閣『四庫全書』第一一八五冊、第六八五～六八六頁。

（一一）小川環樹・倉田淳之助『蘇詩佚注』、一九六五年、第二八二頁。

（一二）蘇軾『東坡集』（『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯、線装書局、二〇〇一年）

（一三）『四河入海』第九冊、第一八八～一八九頁。

（一四）小川環樹は『蘇詩佚注』凡例において、「施顧注宋刊傳世者有數本、一爲錢牧齋所藏、燬於絳雲之厄、一爲毛子晉所藏、遞藏徐健庵、宋牧仲、翁覃溪、吳荷屋、葉潤臣諸家、最後歸袁伯葵諸家、亦化爲煨燼、僅存爛紙、祥見傅沅叔『藏園羣書題記』、是翁覃溪所言、國初海虞有二本者、皆已收於六丁矣、傅氏有云、尚有殘本兩帙、一爲繆藝風所藏、存四卷、一爲楊氏海源閣所藏、存和陶詩兩卷、又一帙則常熟翁文恭所藏、存三十卷、景定壬戌鄭羽補刊者也、環按繆楊二家所藏殘帙、今皆歸北京圖書館、而翁氏之書、遠在紐約、昭和癸卯、吉川博士善之遊美國、講學之餘、一觀真本、馳書見告、環等驚喜莫名、明年甲辰、環亦以事至紐約府、特訪翁君萬戈、慨然出示、字大如錢、楮墨明淨、正如傅氏所記、宋槧之殊絶者也、古香盎然、贊嘆移晷、頓忘身在異域、洵不孤此一往矣、至於其書目錄二卷、闕然完好、則前此未聞、尤可寶貴（翁覃溪詩云、卷前惜闕譜與目）、亟錄大要以歸」と宋刊施顧注本「目録」を翻刻する経緯を述べている。なお、翁氏蔵本は現在、上海図書館に所蔵されている。

（一五）二首は「予以事繫御史臺獄、獄吏見侵自度不能堪、獄中不得一別子由、顧作二詩授獄卒梁成、以遺子由」、「初貶英州過杞贈馬夢得」の二題三首である。いずれも『東坡集』未収の作品である。こうなると、趙次公は『東坡集』未収の作品に唱和する可能性が十分にあると考えられるが、林希逸が言うところの「數十卷詩和盡」の範囲に入れるか否かについてはまだ考察を要する。

（一六）『蘇詩佚注』上、第二九〇～二九一頁。

（一七）添付資料の[14]から[20]までの作品。

（一八）添付資料の[11]番である。『脞説』に引用される「和蘇詩」は「欧陽少師令賦所蓄石屏」詩の詩注に附されている（『四河入海』第十二冊、第四七三～四七四頁）。

（一九）『蘇詩佚注』上、第二一六頁。

（二〇）杜甫の「戯為六絶句」および蘇軾の「次韻張安道読杜詩」、「夜読孟郊詩二首」、「送参寥師」などがそれである。

（二一）蘇詩注が『男虎録』に収録されたのかについては不明である。

（二二）『四河入海』第一冊、第一九四頁。

（二三）『四河入海』第一冊、第二〇〇頁。

（二四）「和舶趕風並引」趙次公自注、『四河入海』第四冊、第三三三頁。

（二五）『竹溪鬳斎十一藁続集』巻三十、第八六八頁。

（二六）李心伝『建炎以來繫年要録』、中華書局、一九五六年、第七十七頁。

（二七）陸心源『宋史翼』、中華書局、一九九一年、第一一二頁。

（二八）『蘇詩佚注』上、第二八二～二八三頁。

（二九）『宋史』巻四十三、中華書局、一九七五年版、第八三一頁。

（三〇）黄宗羲著、黄百家・全祖望補修《宋元学案》巻四十七、中華書局、一九八六年、第一四八四頁。

（三一）『南宋館閣録続録』巻八、文淵閣四庫全書第五九五冊、第五二八頁。

（三二）一説は杜濬である。鄭欽南氏の「台州的学派」（『台州文学』、二〇一二年第四期）では、「杜濬、字淵卿、杜範之子。好仁重義、與人交無町畦、官大理寺正卿知汀州。」とある。これは林希逸の記述と一致しているが、鄭氏は資料の出処を示していないので、備考として挙げておく。

（三三）『四河入海』第九冊、第七九九頁。

（三四）『四河入海』第十一冊、第一八九頁。

（三五）横山伊勢雄「蘇軾の和蘇詩について」（『宋代文人の詩と詩論』、創文社、二〇〇九年、第四十二～六十四頁。初出、『漢文教室』第九十三号、大修館書店、一九六九年）

（三六）『蘇軾詩集』巻五、第一九八～一九九頁。

（三七）『蘇軾詩集』巻二十三、第一二三二～一二三三頁。

（三八）元祐七年（一〇九二）年五月、蘇軾は揚州太守を務めた期間に陶淵明「飲酒二十首」を唱和した。これはじめての「和陶詩」である。

（三九）『東坡続集』巻三、四部叢刊本。

（四〇）『四河入海』第七冊、第六二〇頁。

（四一）原詩に出てくる人物の立場に立ち、和詩を作ること。「代武昌人士和過江夜行武昌山上、聞黄州鼓角」、「代仲殊和椶筍並敘」などがそれである。

（四二）蘇軾の立場に立ち、原詩に出てくる人物に答える和詩を作ること。「和補莫笑銀杯小答喬太博」「和補次韻道潛留別」などがそれである。

（四三）「和黄精鹿」「和宝山昼睡」などがそれである。

（四四）「趙次公詩文彙校稿」下巻、五十二）

（四五）莫礪鋒『江西詩派研究』、斉魯書社、一九八六年、三一〇頁。

（四六）『四河入海』第七冊、四五七頁。

（四七）『四河入海』第七冊、八六五頁。

（四八）『四河入海』第四冊、四八四頁。

（四九）『四河入海』第六冊、五三五頁。

（五〇）『四河入海』第六冊、五三八頁。

（五一）蘇詩における擬人法の使用については、小川環樹「自然は人間に好意をもつか―宋詩の擬人法」（『小川環樹著作集』筑摩書房、一九九七年、第四二一四八頁）、および横山伊勢雄「蘇軾の詩における修辞―譬喩・擬人法・典故―」（『宋代文人の詩と詩論』創文社、二〇〇九年、第一一八～一四二頁）参照。

結

本論文は日本の蘇詩抄物の実態・資料的価値、および趙次公をはじめとする中日の蘇詩注釈者を究明した。

前篇では、『四河入海』および市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻を文献学的立場から考察することで、抄物の注釈体例、文献学的価値を明らかにし、従来注目されてこなかった注釈によって、中国・日本の諸家の解釈を踏まえつつ、「虔州八境図八首並引」詩における想像と真実について論じた。

第一章「蘇詩注釈書としての『四河入海』」では、蘇詩抄物資料の集大成である『四河入海』を蘇詩注釈史の流れのなかで捉え直すことで、その体例および五山禅僧注釈の独自の価値を提示した。五山禅僧らは蘇詩の諸テキストを網羅しながら批評的に用いており、宋代の注釈者があまり用いていない様々な資料を参照している。また詩歌ごとに題注・作品の構造分析をしたり、詩語や詩句の解説・校勘をしたり、詩歌全体に対して総評を附したりといった、詳細で多様な批評スタイルを取っていることを具体的に明らかにし、『翰苑遺芳』・『脞説』・『天下白』・『一韓聴書』それぞれの特色と、それらの『四河入海』における役割とを明らかにした。

第二章「市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考」では、市立米沢図書館が所蔵する『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻の著録情報における補訂すべき箇所を指摘し

たうえで、当該テキストの形態を記述し、版本を特定し、『米沢九一集注』の構成を具体的に復元した。また、『米沢善本九一』は十五世紀四十年代前後に印刷された初鋳甲寅字銅活字本であり、一五八五年以前に越後に伝わったこと、曹洞宗の月松宗鶴が数種の東坡詩抄を類聚編纂した時に、底本として用い、一五八五年八月に『米沢善本九一』を完成して宗虎に付与したことを究明した。これにより、十六世紀後半頃には、蘇軾文学がすでに越後にまで伝わり、曹洞宗禅僧も蘇軾文学の研究に参与したことが論証し得た。そのうえで、『米沢善本九一』に引用される大岳周崇・瑞巌竜惺・瑞渓周鳳、蘭坡景茝・天隠竜沢・万里集九・河清祖瀏・月舟寿桂・馬・青といった十家の抄の量と配置を明らかにして、とりわけ月舟寿桂の東坡詩注を限定して分類し、その漢文注と漢字仮名交じり文注との関係を明らかにした。

第三章「想像と真実――論「虔州八境図八首並引――」では、創作論の視点から蘇軾「虔州八境図八首並引」における実景を見ずに作る想像的詩作と実景を見て作る真実的詩作について論じた。万里集九が「虔州八境図八首並引」について「ミヌ京モノガタリ」（未見の物事を見たように記述する）のように創作されたと指摘したとおり、「虔州八境図八首並引」の創作には想像による表現が多く見られる。蘇軾は「虔州八境図」に取材し、想像力を発揮して静的画面に時間の推移・画中の人の移動および情緒の変化・陰晴の転換・情景の移転などを付け加えて巧みに詩を作った。本章では、「虔州八境図八首並引」の創作経緯を明らかにしたうえで、中国の注釈および日本の蘇詩抄物を広く参照しつつ、連作の各作品およびその全体的構造について分析を加え、特に連作における想像的な詩作営為の方法

を明らかにした。また、本連作と蘇軾が虔州で作った詩作とを比較することで、想像的詩作と真実的詩作との差異についても究明した。

続く後篇では、前篇において論考した抄物資料などを用いて、注釈者として蘇軾に最も近い時代を生きた趙次公の佚注と「和蘇詩」とを輯佚して考察した。

第四章「蘇詩趙次公佚注新考――宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書入れを中心に――」では、趙次公注を収める（イ）『集注東坡先生詩』前後集、（ロ）諸種の旧王本、（ハ）『四河入海』、さらに従来取り上げられることのなかった（ニ）宮内庁書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』の室町期の書入れを加えて考察し、蘇詩趙次公注の輯佚に関する馮応榴、小川環樹・倉田淳之助といった従来の研究を検討した。以上の考察を経たうえで、蘇詩趙次公単注本の輯校方法を定めた。そのうえで（ニ）を柱として、（イ）・（ロ）（ハ）を参照しつつ、旧王本巻十三所収の器用類の十首の作品を例として、輯校作業を実際に試みた。

第五章「趙次公「和蘇詩」輯考」では、北宋から南宋の間を生きた趙次公は、杜甫や蘇軾の詩歌に注釈を施したことによって著名である。現存する趙次公の著作のほとんどはその杜詩注と蘇詩注であり、詩文作品は極めて少ない。筆者は『四河入海』から彼の「和蘇詩」を四十八首輯佚して考察を加えた。嘗て、趙次公は「和蘇詩」計一九五〇余首を創作しており、それは息子の趙虎によって杜詩注とあわせて刊刻され、都の臨安にも伝わっていた。十三世紀半ば頃になると、私家には収蔵されたが、書肆にはすでに見られないものとなった。現在、中国本土では、趙次公「和蘇詩」のテキストはすで

に散佚し、南宋の陳思の『海棠譜』に収められた二首しか残っていない。しかしながら趙次公「和蘇詩」は、十五世紀前後に日本に伝来しており、五山の禅僧たちに引用されることによって、四十八首が今に残っている。趙次公「和蘇詩」には、概ね自注が附されており、「和蘇詩」を理解するには非常に役に立ち、且つ蘇軾の詩歌を研究するうえでも極めて価値が高い。また、趙次公は蘇軾と蜀の地の文人同士としての親近感が強く、蘇軾の詩歌を好んでおり、愛慕と熱意を以て蘇軾のすべての詩歌に唱和した。これは蘇軾文学受容史において多大な壮挙である。趙次公の詩歌は宋詩の理趣的境地が窺われ、北宋と南宋の間に流行していた江西詩派の特色を備える一方、蘇軾からの影響も窺えるといった諸問題点を究明した。

本論文において筆者が追い続けたのは、日中の蘇詩注解者がどのように蘇詩を読んでいたのかと言うことである。日本の注解者については、従来あまり利用されなかった『四河入海』、市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻、宮内庁書陵部蔵黄善夫家塾本『王状元集百家注分類東坡先生詩』の室町期の書入れなどを取り上げ、その蘇軾文学研究上の価値を明らかにし、これら蘇詩を読む日本の禅僧の注解および、そこに引用されている中国における蘇詩の初期諸注釈を広く参照することで、新たな方法による蘇詩批評の可能性を示した。中国における最も早い時期の注解者である趙次公について、その失われた注を抄物資料やそれに準ずる宮内庁書陵部蔵宋刊黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』の室町期の書入れから輯佚し、趙次公単注本を復元する方法を提示した。また趙次公の「和蘇詩」の数量・創作時期・刊行と流伝・自注の蘇詩解釈に対する価値を

明らかにしたうえで、蘇詩のもっと早い時期の受容状況を知る貴重な資料であること、そしてこれらの資料を取り入れることを通じて、蘇詩研究の世界が広がる可能性について具体的に示した。

蘇詩抄物を、初期の重要な注釈の集成として蘇詩研究に利用することは、我々よりも蘇軾により近い時代の注解者たちの目を通して蘇詩を今一度捉え直すことであり、蘇軾文学の本質に迫る有力な方法といえるのである。

参考文献

【蘇軾テキスト及び注釈】

蘇軾『東坡集』（中華再造善本唐宋編集部、北京図書館出版社、二〇〇三年）
蘇軾『東坡集』（『日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍影印叢書』第一輯、線装書局、二〇〇一年）
蘇軾『東坡集』（竺沙雅章氏解題、汲古書院、一九九一年）
王十朋集注『王状元集百家注分類東坡先生詩』（南宋黄善夫家塾本、中華再造善本唐宋編集部、北京図書館出版社、二〇〇五年）
王十朋集注『王状元集百家注分類東坡先生詩』（宮内庁書陵部蔵南宋黄善夫家塾本）
王十朋集注『集注分類東坡先生詩』（『四部叢刊』影印南海潘氏蔵元刊虞平斎務本堂刊本）
王十朋集注・劉辰翁批点『王状元集百家注分類東坡先生詩』（元建安熊氏刻本、中華再造善本金元編集部、北京図書館出版社、二〇〇五年）
王十朋集注・劉辰翁批点『王状元集百家注分類東坡先生詩』（京都大学附属図書館蔵五山版）
王十朋集注・劉辰翁批点『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』（市立米沢図書館蔵元刊本、米沢善本九〇番）
王十朋集注・劉辰翁批点『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻（市立米沢図書館蔵、米沢善

本九一番）
朝鮮銅活字版『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』（国立国会図書館蔵、請求記号：820-27）
施宿・顧禧・施元之『注東坡先生詩』残本（南宋嘉泰淮東倉司刻本、中華再造善本唐宋編集部、北京図書館出版社、二〇〇四年）
邵長蘅補注『施注蘇詩』（景印文淵閣四庫全書集部第一一一〇冊、台湾商務印書館、一九八六年）
査慎行『補注東坡先生編年詩』（康熙四十一年香雨斎刻本）
翁方綱『蘇詩補注』（乾隆四十七年蘇斎叢書本）
沈欽韓『蘇詩査注補正』（光緒八年心矩斎叢書本）
馮応榴輯注、黄任軻・朱懐春点校『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一年）
王文誥『蘇文忠公詩編注集成』（嘉慶二十四年韵山堂刻本）
孔凡礼『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）
孔凡礼『蘇軾文集』（中華書局、一九八六年）
張志烈・馬德富・周裕楷『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）
中田祝夫整理・笑雲清三編『四河入海』（勉誠社、一九七〇～一九七二年）

【中国語文献】

北京大学古文献研究所編『全宋詩』（北京大学出版社、一九九一年）

卞東波『宋代詩話与詩学文献研究』（中華書局、二〇一三年）
晁公武『郡斎読書志』（四部叢刊三編、影印原北平故宮博物院図書館蔵宋淳祐袁州刊本）
晁公武撰、張猛校証『郡斎読書志校証』（上海古籍出版社、一九九〇年）
陳揆『稽瑞楼書目』（光緒三年八喜斎刊滂喜斎叢書本瞿氏家塾本）
陳振孫『直斎書録解題』（上海古籍出版社、一九八七年）
崔富章『四庫提要補正』（杭州大学出版社、一九九〇年）
杜沢遜『四庫存目標注』（上海古籍出版社、二〇〇七年）
馮恵民・李万健編『明代書目題跋叢刊』（書目文献出版社、一九九四年）
傅増湘『蔵園群書経眼録』（中華書局、一九八三年）
傅増湘『蔵園群書題記』（上海古籍出版社、一九八九年）
傅増湘『蔵園訂補呂亭知見伝本書目』（中華書局、二〇〇九年）
国家図書館編『国家図書館蔵古籍題跋叢刊』（北京図書館出版社、二〇〇二年）
国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』（探求堂、一九六九年）
黄宗羲著、黄百家・全祖望補修《宋元学案》（中華書局、一九八六年）
紀昀『四庫全書総目』（中華書局、一九六五年影印浙本）
買貴栄輯『日本蔵漢籍善本書目集成』（北京図書館出版社、二〇〇三年）
孔凡礼『蘇軾年譜』（中華書局、一九九八年）

孔凡礼『宋詩紀事続補』（北京大学出版社、一九八七年）
李心伝『建炎以來繫年要録』（中華書局、一九五六年）
林継中『杜詩趙次公先後解輯校』（修訂版）（上海古籍出版社、二〇一二年）
劉尚栄『蘇軾著作版本論叢』（巴蜀書社、一九八八年）
陸心源『宋史翼』（中華書局、一九九一年）
馬端臨『文献通考』（中華書局、一九八六年）
莫礪鋒『江西詩派研究』（齊魯書社、一九八六年）
全寅初『韓国所蔵中国漢籍総目』（学古房、二〇〇五年）
瞿鏞『鉄琴銅剣楼蔵書目録』（続修四庫全書影印咸豊七年瞿氏家塾刻本）
瞿啓甲『鉄琴銅剣楼宋金元本書影』（一九二二年瞿氏家塾刻本）
四川大學中文系唐宋文學研究室編『蘇軾資料彙編』（中華書局、一九九四年）
脱脱等『宋史』（中華書局、一九七七年）
厳紹璗・王曉平『中国文学在日本』（花城出版社、一九九〇年）
厳紹璗『漢籍在日本的流布研究』（江蘇古籍出版社、一九九二年）
厳紹璗『日蔵漢籍善本書録』（中華書局、二〇〇七年）
余嘉錫『四庫提要弁証』（中華書局、一九八〇年）
曾棗莊・曾濤編『蘇詩彙評』（文史哲出版社、一九九八年）

曾棗荘等『蘇軾研究史』（江蘇教育出版社、二〇〇一年）
曾棗荘・劉琳主編『全宋文』（上海辞書出版社・安徽教育出版社、二〇〇六年）
張伯偉『域外漢籍研究入門』（復旦大学出版社、二〇一二年）
中国古籍善本書目編委会『中国古籍善本書目』（上海古籍出版社、二〇〇九年）
中華書局編輯部點校『全唐詩』増訂本（中華書局、一九九九年）
中華再造善本工程編纂出版委員会編『中華再造善本総目提要』唐宋篇・金元篇（国家図書館出版社、二〇一三年）
朱剛・李棟「從個人唱和到群体表達」（『江海学刊』二〇一二年第三期、一九二～二〇〇頁）
祝尚書『宋人別集叙録』（中華書局、一九九九年）
祝尚書『宋人総集叙録』（中華書局、二〇〇四年）
王連旺「趙次公『和蘇詩』輯考」（『中国典籍与文化論叢』第十七集、鳳凰出版社、二〇一五年、三十六～五十三頁）
王連旺『趙次公詩文彙校稿』（『筑波中国文化論叢』第三十四号、二〇一五年、一四三～一六〇頁）
王連旺「市立米沢図書館蔵【米沢善本91】『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考」、『域外漢籍研究集刊』第十三輯、中華書局、二〇一六年、四一五～四三二頁）
王連旺「詩人趙次公初探」（『新宋学』第五輯、復旦大学出版社、二〇一六年、一三八～一四八頁）
王連旺「想像與真実――論蘇軾『虔州八境図八首並引』」（『新宋学』第六輯、復旦大学出版社、

二〇一七年、一〇〇～一一〇頁）
王水照整理『宋人所撰三蘇年譜彙刊』（上海古籍出版社、一九八九年）
王水照「蘇軾文学初伝日本考」（「湘潭師範学院学報」、一九九八年第二期）
王水照『蘇軾研究』（中華書局、二〇一五年）
王友勝『蘇詩研究史稿』修訂版（中華書局、二〇一〇年）
王兆鵬『宋代文学伝播探原』（武漢大学出版社、二〇一三年）

【日本語文献】
朝倉治彦監修・岩本篤志編集『米沢藩興譲館書目集成』（ゆまに書房、二〇〇九年）
浅見洋二「校勘から生成論へ：宋代の詩文集注釈、特に蘇黄詩注における真蹟・石刻の活用をめぐって」（『東洋史研究』六十八（一）、二〇〇九年、三四－六九頁）
岩垂憲徳・釈清潭・久保天随訳注『蘇東坡全詩集』（日本図書センター、一九七八年）
上村観光『五山詩僧伝』（民友社、一九一二年）
内山精也「宋代八景現象考」（中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第二十号、二〇〇一年、八十三～一一〇頁）
内山精也『蘇軾詩歌研究―宋代士大夫詩人の構造―』（研文出版、二〇一〇年）
小川環樹『小川環樹著作集』三（筑摩書房、一九九七年）

小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第一～四冊（筑摩書房、一九八三～一九九〇年）
小川環樹・倉田淳之助『蘇詩佚注』（一九六五年）
王連旺「蘇詩注釈書としての『四河入海』」（『筑波中国文化論叢』第三十三号、二〇一四年、四十九～七十五頁）
王連旺「市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残7巻考：朝鮮銅活字版の底本を中心にして」（『中国文化』第七十四号、二〇一六年、一～十三頁）
『新纂禅籍目録』（駒沢大学図書館、一九六二年）
韓国図書館学研究会『韓国古印刷史』（同朋舎、一九七八年）
倉田淳之助「東坡抄と山谷抄」（『米沢善本の研究と解題』、九十五～一〇八頁）
財団法人米沢図書館編『珍書目録』（国立国会図書館蔵、一九一一年）
市立米沢図書館・ハーバード燕京同志社東方文化講座委員会編『米沢善本の研究と解題』（一九五八年）
住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究　韻類編』（汲古書院、二〇一二年）
住吉明彦「『方輿勝覧』版本考」（『斯道文庫論集』第四十九輯、二〇一五年、一六七～二三七頁）
『東国古活字譜』（国立国会図書館蔵、請求記号：WB31-12。）
中田祝夫整理『三体詩幻雲抄』（勉誠社、一九七七年）
林泰三『古活字本と文庫』（韓国書籍センター社、一九八九年）

藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究 集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）
堀川貴司『五山文学研究：資料と論考』（笠間書院、二〇一一年）
堀川貴司『続五山文学研究：資料と論考』笠間書院、二〇一五年）
向嶋成美・高橋明郎『唐宋八大家文読本』五、明治書院、二〇〇四年。
向嶋成美・高橋明郎『唐宋八大家文読本』六、明治書院、二〇一六年。
柳田征司『室町時代資料としての抄物の研究』（武蔵野書院、一九九八年）
柳田征司「書込み仮名抄一斑」（『愛媛大学教育学部紀要』第二部人文・社会科学第九巻、一九七七年、一～二十頁）
柳田征司「洞門抄物『聯珠詩格抄』について」（『室町時代資料としての抄物の研究』、一一八九～一一二〇頁）
柳田征司「抄物目録稿（原典漢籍集類の部）」（『訓点語と訓点資料』第一一三輯、二〇〇四年、三～八十二頁）
横山伊勢雄『宋代文人の詩と試論』（創文社、二〇〇九年）
米沢温故会『上杉家御家譜』（原書房、一九八八年）

初出一覧

序章　未発表

第一章　蘇詩注釈書としての『四河入海』、『筑波中国文化論叢』第33号、二〇一四年、四十九～七十五頁。

第二章　市立米沢図書館蔵「増刊校正王状元集注分類東坡先生詩」残巻考

原題：市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残7巻考：朝鮮銅活字版の底本を中心にして、『中国文化』第七十四号、二〇一六年、一～十三頁。

中文増訂版：市立米沢図書館蔵【米沢善本91】『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考、『域外漢籍研究集刊』第十三輯、中華書局、二〇一六年、四一五～四三二頁。

第三章　「想像與真実――論『虔州八境図八首並引』――」（『新宋学』第六輯、復旦大学出版社、二〇一七年、一〇〇～一一〇頁）

第四章　蘇詩趙次公佚注新考――宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書入れを中心に――、未発表

第五章　趙次公「和蘇詩」輯考、『中国典籍与文化論叢』第十七集、鳳凰出版社、二〇一五年、三十六～五十三頁。

結　未発表